3119
Mi46

0004039000
0004039-000
３１１．９－Ｍｉ４６ウ

国防哲学

蓑田胸喜・著

東京堂

昭和１６

ABB

311.9
Mi46

國防哲學

蓑田胸喜著

東京堂刊行

239

311.9
Mi46

國防哲學

蓑田胸喜著

東京堂出版

明治天皇御製

をりにふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで

誠の道をふめや國民（明治三十八年）

故善戰者之勝也、無智名無勇功——孫子

序

人類史の蓄積はいま世界的大動亂に爆發し、煮え滾ぎつ歷史の熔鑛爐のさ中に民族精神・文化傳統を試錬しつゝある。戰爭は既成文化價値の熱せる試金石また新しき文化創造の彈機として不可測人類史の永遠の課題である。

然しながら和するも戰ふも生命のためである。世に戰爭主義なるものゝあり得ざる如く、平和主義なるものも生命の眞實『世の人のまことの道』ではない。生命の充實緊張、見えざる精神の內なる戰ひと形成力とによつて、そこに不斷に新に健かなる文化の創造開展が行はるゝのでなければ、現狀維持の平和はむしろ生命の硬化障礙または弛緩頽廢の徵候として打破せらるべきものである。和戰を統ぶる生命の大調和――『和』の至高原理は臨戰決死の覺悟に味はるゝ解脫涅槃の宗敎的體驗で、藝術こそは之を確證するものである。

最近發表された企畫院の科學技術新體制要綱に、科學技術の國家總力戰體制を確立すべくその基礎たる國民の科學的精神を作興し、科學技術の日本的性格の完成を期すといふ。科學とはこゝに自然科學を指すが、かくの如き新體制を立案企畫し實施遂行して奏功を期することは自然科學自體の能くす

ることではなく、精神科學本來の任務である。

この點に就いて來朝中のナチス心理學者デュルクハイム伯が『獨逸の技術的精神の非合理的基礎』と題する論文中に、『獨逸人の科學的精神・技術的精神の源泉を理解するにはそれとは異つた他の側面、例へば獨逸の音樂・詩・神秘主義・哲學を見なければならない。』『ゲーテの「山々に靜寂(シヅマ)あり」といふ詩を知らずして獨逸の科學者を理解することは出來ない。』 技術的な悟性は技術的な悟性そのものとは全く趣きを異にする生命力、『已むに已まれぬ衝動』から生るゝといつて、技術的能力と生ける信仰との融合、詩人と軍人との人格的統一、民族的活力と國家形成力との一致を說き、『天地自然の神慮のまに〳〵榮ゆべき人間自身の地磐』として家族・民族公共體の文化的人道的意義を强調する論理は、日本精神に憧憬するナチス精神の見地から『神國日本』の國體明徵・國民精神の昂揚こそ科學技術の日本的性格の育成・國家總力戰體制の力源なることを註するものである。

いま日本精神の健在錬成は最も精銳なる科學兵器の裝備を要素とする高度國防體制の完璧と一體不可分たるべきは言ふまでもない。そのためには自然科學と應用技術との劃期的振興發達を要するが、之を國家總力戰の全體永久目的に統綜合活するものは現代俊傑の學としての精神科學であり、その基礎科學は體驗洞察の心理學である。こゝに世界文化史上のまた東西一體化せる世界現勢に於ける日本

の地位使命を確實に認識して其の國策進路を正しく指標するためには、日本精神の現代的顯現として『性相近』といふ普遍人間性に徹し『之ヲ古今ノ史實ニ稽ヘ之ヲ中外ノ事勢ニ鑑ミ其ノ思索ヲ精ニシ』て始めて體現せらるべき日本精神科學を要する。

ルーデンドルフが總力戰の根基に就いて『人間精神及び國民精神の法則』を究むべきを論じ、國民の精神的團結の力源を『民族固有の信仰』に求めつゝ、最後にその指導人格としての將帥の資質に就いて

『總帥は總ての藝術家の如く、その表現の技巧を十分に心得てゐなければならぬが、他の藝術家と同樣に、更に天才的の創作力がその眞價を決定するのである。而も他の藝術家には直接に必要とせずして、獨り總帥に缺くべからざるは、無限の責任を擔ふ力、意志、性格の外に、更に偉大なる人物が軍隊、國民及び各々の獨逸人に對して至大の責任を感じて、その創造力及び意志を精魂を傾けて實行に移す場合に於て、その人物から發する所の量るべからざる感化指導力である。戰史は總帥を養成し得るものではなく、又總帥の內的生活を叙述することも出來ない。これはその人個人の資質であつて、當人も緊張の極に於てのみそれを經驗し得るのである。』

といつたところのものは、著者が本論に述べた孫子の將帥論とも符節を合するもので、祈りを忘れぬ宗教的人格としてゲーテの藝術的天才に哲學者を見たフォッシュを想起せしむるのである。然しながらわれら日本國民は

折にふれて

うつせみの世のためすゝむ軍には神も力をそへざらめやは
戰のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

折にふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國民

仁

いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや

誠

鬼神もなかするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

述懷

千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ

と詠ませ給ひし　明治天皇の大御歌を拜誦しまつる時、ルーデンドルフが『量るべからざる感化力指

導力』といつたごときものは勿論、イエスの愛、釋迦の慈悲、孔子の仁の如きをも含蓄して餘りある『世の人のまことの道』の至極するところ――『めにみえぬかみの心に通ふ』惟神の大道カンナガラノミチを至心信樂せしめらるゝ。皇軍の無敵必勝は現人神に在しまし『天佑ヲ保有ス』と宣らせ給ふ萬世一系の　天皇を大元帥と仰ぎまつるイツクシミの日本人道精神の仁愛無敵に發するものなることは、日獨伊三國條約締結に當りて煥發あらせ給へる大詔にも『萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安セシムル』と詔はせ給うたところである。

かくして天壤無窮の皇運を扶翼する日本國防の原理は總力戰・高度國防の西歐的機制概念を內的化し生命化する歷史的に現成せられた七生報國・永久國防の理念である。こゝに現日本の新眞體制は、無哲學の國防論・政治論・文化論・經濟論また國家國防を遺却せる無生命の辯證法哲學と併せて『科學卽自然科學』の舊套迷信を打破して活路を啓開する根源的學術維新、綜合科學的世界觀國防哲學を要する。政治・國防・學術の根本問題は道德・宗敎・藝術の至高文化問題に歸嚮せしめられて唯一の世界觀原理の下に渾融的解決を見出すべきである。

本書は著者の近著『學術維新』の結論として用意したる部分を分割公刊するもので、同書一節の別刷冊子『日本世界觀』及び既刊『國家と大學』と併せて讀者の參看を望む。著者は本書の全般に亘り

特に新なる研究領域を開拓したる經濟の基本問題に關する箇所は國防の原理に就いてと共に、學界其他各方面識者の忌憚なき批判、親切なる示教を乞はむとするものである。

昭和十六年六月八日

著者

目次

第一章 國防哲學の原理

一、世界觀認識論と政治國防哲學……一

二、ルーデンドルフの總力戰論批判……八

三、日本國防哲學の原理……一九

第二章 高度政治力と綜合文化政策

一、政治的形成力と文化的創造力……三三

二、大政翼賛の政治原理と官界新體制……四四

三、高度精神力と綜合文化政策……五四

四、現代俊傑の學としての精神科學……六〇

第三章　人間性の心理と哲理
一、あるがまゝの自然と人生……六〇
二、人間性の根源的反省――宗教心理學……七〇
三、政治道德と經濟の問題……七六
四、公益・私益・創造・名譽の心理學……八四
第四章　經濟の不易原理と新體制
一、ドイツの戰時指導經濟の根本觀念……九三
二、レーニンの共產主義實驗失敗告白……一〇〇
三、制度組織と思想精神との問題……一〇五
四、我が國統制經濟實驗に就ての根本的反省……一〇九
五、經濟學の根本問題と心理學……一一六
六、日本國體・帝國憲法と私有財產制度……一二三
七、私有財產制度否認論に就て……一二七

八、石川興二氏のマルクス主義讃美論……一三五
九、經濟の論理と倫理の論理……一四〇
第五章　政治道德と至高文化價値
一、諸文化價値の序列體系……一五七
二、高度政治力・高度文化力・高度經濟力……一六二
三、科學技術新體制と國防哲學……一六九
四、藝術的創造精神と總力戰體制……一七五

第一章　國防哲學の原理

一、世界觀認識論と政治國防哲學

哲學、哲學者の術語であつた認識の語は、滿洲事變の經緯に對する國際聯盟の『認識不足』といふ國民的彈機語の流布と共に日用語となつた。著者はその時、本稿がその一斷片たるべき日本認識論の著想を得たのである。

國際聯盟の日本に對する認識不足の語が國民的標語化した當時、著者は、滿洲事變の根本原因に就いて專ら『日本國民の國際聯盟に對する認識不足』を警告しつゝ、進んでそれは思想的に『日本國民の日本そのものに對する認識不足』こそ根源的のものなることを痛感し確認せしめられたのである。

天皇の國家統治が『天の下知ろしめす』『知らす』といふ世界認識を意味する日本政治哲學を憶念すべきで、こゝに國體明徵・敎學刷新の思想運動が興起した所以があつた。然るにそれが思想的徹底を見ることなくして支那事變に入つたところに現日本の根本問題が存する。『知れ、汝自身を！』とい

ふソクラテスの哲學原理の深義と共にその廣義を究むべき、いまこそその時である。

認識の成立には自覺反省による自己認識——認識主觀の態度・見地・基準原理の確立が先決條件である。同一の客觀對象も態度・見地の相違によつて極端の場合には全く相反する認識價値を結果することは西歐哲學の認識論を俟つまでもないのである。『汝自身を知れ』とはこの謂であるが、孫子は『知レ彼知レ己、百戰不レ殆』といつた。認識論は直ちに兵學、戰略論、國防哲學と密着するといふことが、世界觀人生觀の方法原理を究明する認識論の本來の任務たるべきに、認識論だけの認識論が甚しき場合には實人生また個別科學との關聯をさへ失つて、例へばカント哲學末派のリッケルトのそれの如く取扱はれたといふことが最近までの獨逸哲學の致命的誤謬であつたので、クラウゼウィッチの『戰爭論』の如きは之に對して反動的に同一誤謬を犯し、マルクス主義の唯物的鬪爭思想に利用さるるに至つたのである。こゝに前歐洲大戰に於ける獨逸敗戰の思想的禍因があり、その戰前に喧傳せられた所の思想文化が精神的威力を有しなかつたものであることを實證したのである。老ヴントが大戰勃發當時に書いた『諸國民とその哲學』の論旨が、彼の祖國ドイツの運命によつて消極的に實證せられたのは、釋迦、孔子、ソクラテス、イエスと彼らの祖國の運命との關係を想起せしむる悲劇的事例であつたが、ナチス獨逸はこの慘憺たる悲劇より本來の民族精神に覺醒し之を復活したところに興國の力源を有するのである。（拙著『學術維新』第二篇の『日本精神とナチス精神』及び本書八頁以下參照）

孫子は『知レ彼知レ己、百戰不レ殆』より竿頭更に一歩を進めて

『百戰百勝、非二善之善者一也。不レ戰而屈二人之兵一、乃善之善者也。
故上兵伐レ謀、其次伐レ交、其次伐レ兵、其下攻レ城。攻レ城之法、爲レ不レ得レ已。』

といつた。『運二籌帷幄之內一、決二勝千里之外一』とはこの謂である。山鹿素行は『孫子諺義』中、用間篇の始めに『凡戰ハ敵ノ情ヲ不レ知バ不レ得レ勝、是ヲミルコト、其形ヲ以テ考レ之、其言ヲ以テサトルノ法アリトイヘドモ、間人ヲ入テ其實ヲ詳ニイタスニ不レ可レ如、且又間ヲ以テ敵ノ心ヲトラカシ、其君臣ノアイダヲヘダテ其實ヲ詳ニシテ、而後ニ兵ヲ用トキハ不レ戰シテ勝ノ道自具也、コノユヘニ間ヲ用フ、此篇ニ先知と云ヘル也』といつてゐる。この『先知』といふのが兵學、國防哲學の綜攝原理であつて、それがいはるべき認識論である。孫子はその用間篇に

『先知者、不レ可レ取二於鬼神一、不レ可レ象二於事一、不レ可レ驗二於度一、必取二於人一而知二敵之情一者也。
非二聖智一不レ能レ用レ間。非二仁義一不レ能レ使レ間。
非二微妙一不レ能レ得二間之實一。微哉微哉、無レ所レ不レ用レ間也。
故明君賢將、能以二上智一爲レ間者、必成二大功一。此兵之要、三軍之所二恃而動一也。』

といひ、また虛實第六に如左一節を殘してゐる。

「微乎微乎、至於無形、神乎神乎、至於無聲、故能爲敵之司命。」

こゝに『間』といふのは廣義の間諜スパイ戰術の謂であるが、交通機關と印刷術の發達した現代からいへば、思想戰宣傳戰をも綜合したもので、それに就いて『非聖智不能用間。非仁義不能使間』といひ『微哉微哉、無所不用間也』といふ、孫子の兵學原理は孔子の政治哲學と老子の藝術的直觀力とをも含蓄せるものなるを思はしむる。それは武力戰、外交戰、經濟戰、科學戰、思想戰と分つ現代の總力戰高度廣義國防觀より見ても、盡し難き博大深遠精妙の哲學原理を含蓄するものなることを知らねばならぬのである。

この孫子に對比する時、近代歐洲兵學者として喧傳せらるゝヘーゲル時代のクラウゼヴィッチの『戰爭論』の如き、その未亡人の感傷的序言を卷頭に戴する邦譯一千頁に餘る內容は全篇通讀の煩に堪へざる全く分析的技術的のもので、細目事項の區分あるにも拘らず、孫子の用間篇に當るものは見出すべくもなく、思想戰の重大性に論及したる箇所なかるべきことは、その本論冒頭に『戰爭とは何ぞや?』と題して

『吾々は先づ吾等の個々の要素を考察し、次いでその個々の部分乃至肢節に及び、最後に全體の內的聯關を考察しようと思ふ。』（馬込健之助譯、上卷三頁）

と書き出された、部分から全體への思想法こそ正眞正銘の舊式ドイツ思想で

『戰爭とは畢竟するに決鬪の擴大されたものに外ならない。即ち吾々は個々の決鬪が無數に集り、それが一の統一ある全體をなしたものが戰爭であると考へようとするものである云々』（同三頁）

『戰爭は暴力行爲であつて、その行使には如何なる限界もない、かくて一者の暴力に對して他者も之に拮抗する力を以て應ぜざるを得ず、かくして生ずる所の相互作用は、概念上その極限を知らないのである。これが戰爭に於いて吾々が見出す第一の相互作用であり、又第一の無限界性である。』（同七・八頁）

といふ。こゝには正義・人道の道德觀念宗教感情といふものは毫末も見出されず、唯戰爭と政治との關係に就いて

『吾々は知る、戰爭は單に一の政治的行爲であるのみならず、又實に一の政治的手段であり、政治的對外關係の一の繼續たる事を。然り、それは他の手段を以てするそれの實行に外ならない。』（三二頁）

といひ、こゝに統帥權の獨立をむしろ積極的に否認して

『世人は屢々政治が戰爭の遂行に有害なる影響を及ぼすといつて非難してゐるが、それは全く見當ちがひな考へ方である。かゝる場合に非難しなければならないのは此の影響ではなくて、實は政治それ自身なのだ。政治が正しければ、即ちそれがその目標に適合してゐれば、それは戰爭に影響して有利なる結果を齎さゞるを得ないのだ。若し此の影響が目標から逸れたものであれば、その原因は專ら間違つた政治の中に求めらるべきである。』（下卷五五八頁）

といふ。『政治が正しければ』といふのが假定である。世界各國、ことに民主主義國家の政治が如何に過去現在に於いて腐敗墮落し、その黨派政治の偏倚腐敗が軍隊を支配し、内亂戰爭の禍因となり、革命と敗戰との慘憺たる悲痛犧牲を各國民に課したことか？　クラウゼヴィッチの祖國ドイツはプロシャを主班とする聯邦帝國として統帥權の獨立制度をとつてをつたから、歐洲大戰の初期には聯合國を破り得たが、聯合國側がその敗因を反省してその統一統帥權をフォッシュに委任したことによつて――即ち聯合側各國の政治家の干渉を排すると共に、各國軍隊の個別的統帥權をフランス總司令官フォッシュに歸一せしめたことによつて始めてドイツを破ることを得た、尙ほそれには宣傳戰によつて聯合國がドイツの統帥權を思想的政治的に壞滅することを得たことが重大原因であつたことをこの際銘記しなければならぬ。かくして内亂革命を伴つた對外敗戰はヴェルサイユ條約の鐵則を社會民主黨國家ドイツに課し、これに對する國民的大不平は再革命を激發して反動的にナチス獨裁政治を出現せしめた。孫子が『將在㆑軍、君命有㆑所㆑不㆑受』といつたのは支那的國家に於ける統帥權獨立の重大意義を徹鑒したものであつた。内亂を根絶せる皇國軍隊の必勝無敵の現代史實に照して統帥權獨立の戰略的、政治的、人道的意義を省察熟慮すべきである

　クラウゼヴィッチの右戰爭論に對して、孫子が始計第一に

「兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不㆑可㆑不㆑察也。一曰道、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法。」

といつて、先づ『道』を論じ

『道者、令㆓民與㆒㆑上同㆑意、可㆓與㆑之死㆒、可㆓與㆑之生㆒、而不㆑畏㆑危也。』

といひ、

「故善戰者、立㆓干不敗之地㆒而不㆑失㆓敵之敗㆒也。是故勝兵先勝而後求㆑戰、敗兵先戰而後求㆑勝。善用㆑兵者修㆑道而保㆑法、故能爲㆓勝敗之政㆒。」

「故善戰者之勝也、無㆓智名㆒無㆓勇功㆒。」

といふに至つてゐる。山鹿素行この最後の一文に註して曰く

『天下皆善ト云トキハ有㆓智名㆒有㆓勇功㆒、是誠ニ善也、共一重上ヲ云ハ智名勇功ノ立處ハ、力ノ入所也、上手ノ入、目キ、耳キ、ノ入コトニシテ、若力タラザルカ、耳目ノ不㆑及處アランニハ、必敗亡ノ機アリ、ユヘニ善トハ云ベクシテ、至善トハ云ベカラズ、智モイラズ勇モイラズ、然レバ名モ功モナキ所ノ勝ニアラズシテハ、善ト云ベカラザル也、聖知非㆑論㆑兵、如㆑此言々妙所アルベカラザル也』

と。素行が至道は『百姓日日之ヲ用ヒテ知ラズ』『聖人ハ頻リニ人ヲ感ゼシムルコトナシ』といふのは這般の消息と通ずるものであらう。冒頭に戰爭の本質を論じて、『集合決闘』『暴力の無限的行使』と定義したクラウゼヴィッチの思想は、機制的唯物論である。これ彼が『無慈悲なる闘爭』を公言し

た共産主義者エンゲルスに『軍事科學の分野に於ける一等星』と讃美され、レニンによつて『戰爭問題に關する最も深刻な著作家の一人』と稱へられた所以であつた。

二、ルーデンドルフの總力戰論批判

前歐洲大戰に於ける聯合國軍の總指令官として武力戰の決定者となつたフォッシュは晩年に、時代・精神と國防力との關係を論じて『精神的政治的知識、過去現在に亘る國民生活の歷史的知識なくして國民戰爭の特質をなす社會の諸現象を統綜し得るであらうか。將來戰に於いては最早專門的技術のみを以つてしては充分ではない。』といふに至つたと傳へらるゝけれども、彼の『戰爭の原則』（一九〇三年初版）及び『戰爭の指導』（一九〇四年初版）は、主としてナポレオン戰爭並に普佛戰爭を戰史的に研究して得たもので、『余が不意の場合他に對して言ふべき所、爲すべき所が突然神秘の內に余の胸に浮び來るは、天才によりてに非ず、反省によりてなり、熟慮によりてなり。』といふナポレオンの言葉を冒頭に掲げ、クラウゼヴィッチ、モルトケ、フォン・デル・ゴルツ等の所說は原理的に大體無批判に引用して、自己の戰術を對置論述したもので、東洋に於いては孫子によつて遠き古代に示唆されてゐる綜合兵學また殊に現代の廣義國防總力戰の見地からは缺陷あるものであるにも拘らず、前歐洲大戰の生々しき體驗裡に一九一八年九月一日に發行された前記『戰爭の原則』第四版序文が『兵術

を支配する基礎的眞理の恒久不變なること』の力說に終り、『斯くして本書は一九〇三年の著述に係ると雖も、尙ほ部隊の指導に任ずべき人々の養成に資し、若くは單に戰爭の必然性を深く考察せんとする人々の希望に副ひ得るものである』と結ばれ、フォッシュが同書を無改訂のまゝに世を終つたといふことは、祈を忘れぬ崇高なる宗教的信念に基く彼の人格と天才とが稀有のものであつたと傳へらるるにつけても、今次の歐洲戰爭に於ける佛蘭西の敗戰を思ふ時、衷心より惜まるゝ次第である。

註　フォッシュ元帥著、伊奈重誠氏譯『戰爭論』參照。

ルーデンドルフは前歐洲大戰に於ける獨逸軍の參謀次長として『獨逸國民の死の苦難と全世界に於ける信仰生活の危機と』を身を以つて體驗し痛感したところに基き、『民族固有の神觀に對する信仰』が國家總力戰の活力たる國民の精神的團結の神經中樞たることを切言し反覆强調した『總力戰』（一九三五年初版）中、その本質を論じたる箇所に『クラウゼヴィッチの立てた總ての理論は最早全然廢棄せねばならぬ』と痛論して

『クラウゼヴィッチの「戰爭論」中には、國民團結の必要と同樣、戰爭に對する經濟狀態の重要性に就ても餘り說いて居らず、又偉大なる戰爭理論家たるシュリフェン伯も之に就て眞劍に論じて居らぬ。戰爭の遂行に對する國民の團結及び經濟の意義に就ての明確なる認識は、世界大戰に於て始めて、而も主としてその長期の繼續によつて得られたのである。』（間野中佐譯『國家總力戰』九七頁）

といひ、續けて

「今日各國の政治及び戰爭指導が、この拒否することの出來ない强制的な事實の意義を、如何なる程度まで明瞭に認めて居るかに就ては、玆に論評する事を差控へる。恐らく大部分の國家は、國民團結の問題に就て何等の對策をも講じ得ぬであらう。それらの國々は、如何に人間の心と國民精神とを取扱ふべきかを全く知らない。國民及び國軍に對する供給の問題は、機械的、組織的な措置によつて解決するのがよいであらうが、然しこの場合、冷厳なる現實によつて屢々非常な障害に當面することがあるであらう。」（同九八頁）

と警告したところの『冷厳なる現實』は、今次歐洲大戰に於いて全世界各國民の身上に落ち掛りまたは眼前に展開せられつゝあるのである。

著者は、尙ほこゝにルーデンドルフが、總力戰と經濟との關係を論じて『經濟は死物ではない。生き物である。』『技術も死物ではなく生きて居る。』といひ、前歐洲大戰に於ける獨逸の『非常に中央集權的な施設』の失敗を告白して

「この中央集權は各人の生產の興味と責任觀念とを奪ひ從つてその能率を減殺した。國民の團結も亦購入會社の遣り口では達成されなかつた。その態度と處置は一般國民の不平を昂める動機となり、又賣惜み、密賣を誘發する事にもなつた。さればとてかゝる不正行爲は決してそれが爲に罪惡を免れ得るものではない。――同胞をして數時間も食糧店の前に行列を作らしめたことは、不平者に好都合な運動の可能性を與へるものであつた。經濟上の處置は深く國民の心情に影響するものである。從つて常にその必要を理解せしむる處置をとると共に、愼重且つ最も嚴格なる正義感の下に實行する必要がある。若しこの點を怠り、不正や收賄の爲に斯かる强制經濟の公正に對する信賴が動搖し始めたならば、實に憂ふべき事態を發生すべく、斯かる强制經濟は種々の障害の爲に自ら生產に從事し、勞働する者迄總てから拒否せられざるを得ざるに至る。」（九六―九七頁）

といつてゐることを、今日ナチス『指導』經濟が公益優先の國家的見地に於いても『私有財產と利己的ならざる利潤追求とを正當且つ必要なるものとして公明に認容する』と宣言して、政策的には排擊して已まぬ所謂自由主義資本主義經濟に比較し經濟の本質そのものに於いては『原則的に何等新しきことなし』といつてゐることに對照せしめて注意を喚起し、我が國の最近に於ける『統制』經濟の實驗また新に方向づけられむとする『計畫』經濟の立案實施に就いても亦、當局責任者並に識者に對して猛省熟慮を要請したいのである。（ナチス指導經濟に就ては本書九三頁以下參照）

言はるべき高度政治力とは經濟力と併せて綜合文化力の眞面目をそれぞれその本性に從つて最高度に發揮せしむる能動力でなければならない。かくして民族國家の總力が擧げて國防全體の目的に合成せらるゝところに、始めて現時局の要請する高度國防國家體制は實現せらるゝのである。然しながらその成否を決するものは『人』『國民の精神的團結』である。ルーデンドルフはいふ――

『政治が之（國民の精神的團結の維持）に關する處置の適切を期する爲には、人間精神及び國民精神の法則を知りそれに周到なる考慮を拂はねばならぬ。國民の精神力を强固に維持する事は、所謂機械的の方法を以てしては、到底目的を達し得るものではない。それは最も精神的なものでなければならぬ。』（同五四頁）

と。著者はこゝにルーデンドルフが總力戰に於ける政治的戰爭指導者に對して眞の意味に於ける精神科學的研究と教養とを要請したものであることを、我が國現在の軍民朝野の當局責任者及び識者に愬へたいのである。ルーデンドルフはこの見地を普遍的法則として論じて

『軍隊は國民の中にその根をもつ。要するに國民を形作る一部である。從つて總力戰に於ける軍の强弱は國民の肉體的、經濟的及び精神的强弱に左右される。就中精神力は非常な長期に亘る戰爭に際し、國民維持の爲の生存闘爭に於て必要とする團結力を與へるものであり、この團結はまた國民存亡の爲に行ふこの種戰爭に最後の決を與へるものである。惟ふに今日何れの國家も軍の裝備や訓錬を等閑に附してはゐない。而してたゞ精神的團結のみが國民をして、戰時惡戰苦闘の中に在る軍に終始新たなる精神力を注入し、軍の爲に盡し、戰時の苦難の中に於ても、將また敵の戰爭行爲の下に於ても、自ら必勝の信念に燃え敢然として抵抗を繼續させるのである。』（同二三・二四頁）

といひ、西洋諸國民の精神的動向殊に戰時に於ける基督教と固有の國民精神との關係に論及して

『吾々は世界大戰中には依然基督教國民であり――多數の獨逸人は唯名義だけの信者であつたが――且つ偉大な働きを爲した。然しそれは基督教徒であつたが爲ではなく、寧ろ國民精神が覺醒して從來基督教が國民精神の上に覆ひかけて居た塵を拂つてその精神を發揚し、國民を激勵して國民の生存維持の爲の戰に赴かせた爲である。開戰後日を經るに從つて國民精神が沈默するに至つた事實は、基督教々義が「不平分子」の跳梁に對して、吾々の必要とせる如き持久力を我が國民に與へるやうな信仰の教ではなく、寧ろ到底そのやうな力は與へ得ず、我が國民の傳統とは甚しく融和しないものであると云ふ事を立證したことは、實に嚴肅なる戰爭經驗である。

若干の基督教國民が戰爭に勝つたが、それは他ではない。是等の國民が獨逸國民や露西亞國民のやうに、眞劍な試錬に遭はず、その團結の破壞を受けなかつた爲である。今假りに基督の神秘的教義を他の神秘的の迷信と置換へても、その惑はされた國民の災難は同じ事であらう。』（同上四一・四二頁）

といつてゐる。この主張は單に基督教に對していつたものでないことは明かに右引用文の最後の一節に示されてゐる。西歐近代社會思想としてのデモクラシー、ソシアリズム、マルキシズム等が『宗教の代用物』として思想史的に基督教の變形したものであることは、別に細論したところであるが（拙著『學術維新』第二篇『世界文化史の新回顧と新展望』參照）、ルーデンドルフは獨逸國民思想史上の基督教信仰の禍殃を反覆また反覆力說强調して

『基督教を信奉する國民は、政府と國民との結合、國民と軍隊との結合及び全體の形成する國民生活を基調とする固有の信仰を持つ所の日本國民の如き、幸福な境遇に置かれて居ない。抑も基督の教義は吾々の民族的傳統とは甚しく背反し、國民の傳統を絕ち、固有の精神的團結を奪ひ、その抵抗力を無にするものである。』（同三六頁）

『總力戰遂行に方り、何れの場合でもその基礎となる國民の精神的團結は、民族傳統と、信仰の統一及び民族傳統の生物學的及び精神的法則並に性質を愼重に顧慮する以外他に手段がないのである。而してこの場合その祖先神を神靈信仰にまで導きたいと云ふ民族傳統の慾求に適應した場合に限り、從來基督敎を信じた北方民族の鞏固なる團結を結ぶことが出來たのである。この點に於ては、日本國民並に他の人種系統の民族に於けると何等異つた所はない。而してこの事柄は深く精神の起原と本質、國民精神の本質及びその作用に基くものであつて、この眞理こそ基督敎が吾々の國民的團結を奪ひ、それに依つて猶太人及び僧侶の支配の下に奴隷的地位に陷らしめ、吾々をして自己の存續の爲に團結した生存意志を發揮し得ざらしむる爲に、數百年の長きに亘り實現を阻んだ所のものである。』

（同四三・四四頁）

といふのである。前歐洲大戰に於ける『嚴肅なる戰爭經驗』から出で來つたルーデンドルフのかゝる反猶太的基督敎觀は、ローゼンベルクの『二十世紀の神話』中にも

『歐羅巴の宗敎探求は、その最初の神話時代が終局に向つてゐた時に、本來の性質と無緣なる一つの形式（猶太的基督敎）によつて源泉を毒されてしまつた。西洋的人間は最早本來の種質に固有なる形式で物を考へ感じ、祈ることは出來なくなつてしまつた。』（吹田・上村譯『二十世紀の神話』三五四頁、拙著『ナチス思想批判』參照）

と表現されてゐる。いまはニィチェの猛烈なる『反基督』思想は措いて、先是フィヒテがナポレオン戰爭に於ける獨逸敗戰の經驗から

『近代歐羅巴に於ては、敎育は本來國家そのものゝ手より出でずして一種の他の權力の手より出てゐる。斯くの如き權力としては諸國が大抵共國特有のものをもつてをる。即ち敎會の天國的靈的國家である。法王國は自己をこの世界の團體の一要素と見做すことなく、寧ろこれとは全く無關係なる天國の植民地であつて、この地上即ち異國に於て、彼が根を張り得たすべての場所に於て天國の市民を募集する任務を帶びたものと考へてをる。その敎育は唯人間をしてあの世に於て咀はるゝことなく、常樂を受けしめんとすることをのみ目的としてをつた。宗敎改革に依つて兎も角もこの羅馬敎の權力は從來頻りに反目しつゝあつた現世的國家と調和した。併しながら唯調和したのみであつて、彼等が從來の考へ方を捨てたのではない。從つてその敎育に關する昔の考へは依然として維持された。』

（岩波文庫大津康譯『ドイツ國民に告ぐ』二三八・二三九頁）

といひ、それ故また進んで

『さて吾人が將來のために、しかも今日たゞ今より、吾人の關心事項のために、國家に一層大なる期待を置き得んがためには、國家はその從來抱いてゐたと思はれる敎育の目的の根本觀念を全く新たなる他の概念と換へなければならない。……また敎會――その權力は結局は國家に委讓されたが――の如き天國の植民學校は本來存在す可らざるもので、……今回の新たなる經驗に依つて國家は少なくとも、從來の如き主義を以てしてはその本來の目的を達すること不可能にして、國家が現狀に立至つたのはまさしく宗敎道義の缺如のためにほかならぬことを學んだであらう。』（同二四一・二四二頁）

といつてゐる。これは教會信條に現はれた基督教に對する批判としては正しいが、ルッテルは勿論フィヒテも、またイエスを『吾々の歴史の旋回軸點』『歐羅巴の神』と認めたローゼンベルクにしてもバイブルそのものに現はれてゐるイエスの『原理イスラヘル』の祖國主義の信仰を獨逸國民としての祖國主義の信仰によつて內的に攝取して生かしむることは出來なかつたのである。日本にあつては佛教も儒教も聖德太子、親鸞、素行によつてその心理的動機の徹鑒、思想批判を通じて日本化せられた如く、基督教も亦、故河村幹雄氏によつて眞に內面的に日本化せられたのであつた。卽ち河村氏は

『惟イスラヘルの家の迷へる羊に往け』(馬太傳十章六節)

『イスラヘルの家の迷へる羊の外に我は遣はされず』(同十五章廿四節)

『噫、エルサレムよエルサレムよ、預言者を殺し爾に遣はさるゝ者を石にて擊つものよ、母鷄の雛を翼の下に集むる如く、我爾の赤子を集めんとせしこと幾度ぞや、然れど爾曹は好まざりき。』(同廿三章卅七節以下)

の如き數節を引用して『亡國の悲しみを具に嘗めたハンガリアの志士コスートの悲痛なる雄辯にも斯る深き哀の聲を聞かぬ。開ける眼を以つて新約福音書を讀む者は「原理イスラヘル」によつて生き且つ死んだユダヤの愛國者イエスの「忠」を見逃すことは出來ぬ。』(『河村幹雄博士遺稿』『基督親鸞と祖國主義』參照)と滿腔の共鳴同情を寄せてイエスの『忠』を日本臣道に飜轉令活したのであつたが、われらは獨逸をも含めての西洋精神史上にかくの如き眞に透徹せる批判攝取精神を絕えて知らぬのである。

かくしてルーデンドルフは前記引用文中にも屢々日本に關說せる如く、また伊太利及び露西亞に於ける國民の精神的團結の缺陷を指摘したる後

『日本國民の團結は之とは全然趣を異にする。その團結は精神的であり、主として天皇に對する忠節を基調とする神道の信仰に基くものであつて、彼等の祖先の遺風に副ふものである。天皇に對する忠義と同時に、國家への忠義は、日本人の信仰生活が命ずる所である。日本民族の傳統から發生した神道の信仰は、國民及び國家の要求に適應したものであつて、現今日本人はこの點を認識して神道の精神を大に鼓吹し、天皇の神性は愈々絕對性を增して居ることが知られてゐる。日本國民の强みは全くその民族的傳統及び信仰の純一と、それに基く國民の生活の仕方に存するのである。』(前掲書三五・三六頁)

といふ所には彼の國家總力戰の生命原理より見て日本國體こそ眞に理想的のものなることを羨望したことが窺はれるのである。さうであればある程彼が右に續けて『然し他の宗教と同樣、神道も亦日本國民に重大な危險を齎すものである』と附言してゐるのは、その眞意を解するに苦しまるゝ次第であるが、彼はまたこの點について

『各民族は夫々固有の信仰生活を持つて居る。例へば日本國民の信仰生活は北歐民族のそれと異つて居る。故に日本民族の團結の據つて立つ所の基礎も亦獨逸民族のそれとは違つて居る。日本國民の間に行はれる拘束は、例へば

獨逸民族の拒否する所であり、又一方利己的な基督教から當然生ずる所の、他人の運命などは顧みない自由主義的自由も亦、獨逸民族の排外する所である。獨逸人の宗教觀は……檢討の出來ぬ來世の約束などを含む神話などに基礎を置くものではなく、自然科學の確乎たる認識並に人間及び國民の精神に基くものであつて、地上に於て檢討し得ぬ事などは少しも說かず、又言ひ現はすことの出來ぬ樣な事には少しも觸れないのである。』（同四四・四五頁）

『獨逸人の神觀は國民の存續に就て、彼の神秘日本の拘束や或は物質的ボルシエウィキの拘束と違つた考を持たせ又基督教の自由主義的自由とも趣を異にする。獨逸人の神觀は行動の自由を欲し、國民の存續の爲の道德的拘束を承認し、それが爲に國家指導を慾するが、然しそれ以上の强制は、如何なるものをも拒むこと前述の通りであつて國民的權利によつて與へられた道德的の自由は、我が國民の生活形成に於ける固有の信仰生活の外面的表現であり同胞の滿足及び團結の基礎である。』（同四六頁）

といひ、尙ほその際『天意や宿命や神などの闘說を期待しない』といつてゐるけれども、今次大戰に於けるヒットラー總統の演說にも Herrgott, Schicksal, Segen（ドイチエ・アルゲマイネ・ツアイツング一九四一年二月二十六日附所載總統演說參照）等の語が現はれてゐる如きを思ふべきである。日本の神は『みおやの神』であり、惟神の大道は『天地のなしのまゝなる岩が根のすがた』さながらの『世の人のまことの道』として『白雲のよそに求むな』と詠み訓へさせ給うたのである。日獨伊三國條約の前文にも指導精神として掲げらるゝに至つた『萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシムル』と詔はせ給ふ日本國體原理は、ドイツ建築學者としてのブルノー・タウトが桂離宮の建築を『自由な精神の創り出した自由な藝術』の極致として『文化を有する全世界に冠絕せる唯一の奇蹟』であり、『パルテノンに於けるよりも、ゴシックの大伽藍に於けるよりも、こゝでははるかに著しく「永遠の美」が開顯せられてゐる』と讚歎しつゝ、そこに『何人も强制を蒙ることなく、各人がその本性のまゝに行藏して、而も調和を保つ良き社會』を髣髴して、『それは我々に同一の精神をもつて創造せよと訓へる』といつた一事に徵しても、ルーデンドルフの日本神道觀の重大缺陷は知らるゝであらう。

（次節及び一七五頁以下參照）

三、日本國防哲學の原理

明治天皇の日露戰爭當時の御製――

正述心緒

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

述懷

かみつよの聖のみよのあとゝめてわが葦原の國はをさめむ

まつりごとたゞしき國といはれなむもゝのつかさよちから盡して

山のおく島のはてまで尋ねみむ世にしられざる人もありやと
照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと
民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな
よの中はたかきいやしきほど〳〵に身を盡すこそつとめなりけれ
たゝかひの道にはたゝぬ國民もちゝに心をくだくころかな
國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも
おほづゝの響はたえて四方のうみよろこびの聲いつかきこえむ

劍

しきしまの大和心をみがゝずば劍おぶともかひなからまし

神祇

神垣に朝まゐりしていのるかな國と民とのやすからむ世を
世の中にことあるときぞしられける神のまもりのおろかならぬは

仁

國のためあたなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ

誠

ことのはにあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり
とき遲きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり

折にふれて

うつせみの世のためすゝむ軍には神も力をそへざらめやは
かぎりなき世にのこさむと國の爲たふれし人の名をぞとゞむる
戰のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ
ちはやぶる神の心にかなふらむわが國民のつくすまことは
おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國民

また日露戰爭の前後に詠ませ給ひし御製

神祇

ちはやぶる神のまもりによりてこそわが葦原のくにはやすけれ
千萬の神もひとつにまもるらむ青人草のしげりゆく世を

樂

千萬の民と共にもたのしむにます樂はあらじとぞおもふ

述懐

千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ

仁

ちよろづの民の心ををさむるもいつくしみこそ基なりけれ
いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや

誠

鬼神もなかするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

をりにふれて

きくたびにゆかしきものはまつりごと正しき國の姿なりけり
新高の山よりおくにいつの日かうつしうゝべきわがをしへぐさ

寄道祝

千早ぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ萬代までに

皇國軍隊の武力戰に於ける『無敵』は「おのづから仇のこゝろも靡く」といひ『鬼神もなかする』といふ『いつくしみ』の日本人道精神の仁愛無敵の然らしむるところなることはいふまでもない。それは『萬代までに』『かぎりなき世』に亘りて彌榮えに榮えゆく『千早ぶる神のひらきし敷島の道』を守り、『天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ』奉らむとする永久國防の精神的傳統の發現であつて、孫子が『善用レ兵者、修レ道保レ法』といふ、その『修レ道』とは日本にあつては、カムナガラノミチをヲサムルことである。孫子の兵學は先に指摘した如く、クラウゼヴィッチ等に對比すべからざる驚くべく深遠博大精妙のものであるが、それは畢竟個人たる武將の天才聖智の活用の方式を明かにしたる點に於いてであつて、民族歷史と國民宗教との不可稱不可思議の個人能力時代功罪を超出する國家守護力に至つては孫子の與り知らざりしところ、孔子も然り、唯老子が形而上學的に髣髴せんとしたものである。孫子が『先知者、不レ可レ取ニ於鬼神一』といつたのは孔子が『不レ語ニ怪力亂神一』といつた底のものである。御製に『千萬の神もひとつにまもる』『戰のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほまもる』と歌はせ給うた『神のまもり』は、日本戰史にあつては斷じて迷信や空想ではなく、連續無窮の歷史的生命の實證するところである。滿洲事變に於ける『生命線を守れ！』の國民的標語は戰略的、政治經濟的、地理的意義にとゞまらず實に日清日露の役にその草土を血潮にそめて『たふれしますらをの

魂』の引接敎令またそれへの國民的呼應答禮であつたのである。（井上孚麿氏著『御製を拜して』參照）

フィヒテが『ドイツ國民に告ぐ』の講演の最後に

『本講演と聲を合せて諸君の祖先も亦諸君に要求する。諸君は余の聲の中に、遠き昔の祖先の聲が加はつてゐるものと考ふべきである。自己の生命を捧げてローマの世界的支流の滔々と押寄せ來るに抵抗し、今諸君の時代に至つて外人の獲物となつて終つたこの山、この平原、この河流の獨立を、自己の血を以て贏ち得たりし諸君の遠き昔の祖先、彼等が今諸君に向つて叫ぶ。』

『この聲の中に又宗教及び信仰の自由の爲めの神聖の戰に倒れた諸君の輓近の祖先の靈が加はる。彼等は諸君に向つて叫ぶ。』

『未だ生れざる諸君の子孫が又諸君に要求する。彼等は諸君に向つて叫ぶ。』

『外國人と雖も、少くとも尙自己を理解し又自己の眞の利益を見るの明あるものは、諸君に要求する。』

『すべての時代及び嘗てこの世に呼吸したるすべての賢人及び善人、彼等のすべての思想及び理想の閃きが、この中に合して諸君に迫り諸君に向つて嘆願の手を差伸ばすのである。否神及び新なる人類を作らむとする神の世界的計畫、人間に依つて思惟せられ人間に依つて權化せらるべき神の世界的計畫さへも、その名譽とその存在とを救はれんことを諸君に要求すると云うてもよからう云々』（岩波文庫、大津康氏譯による）

と繰返々々叫んだ、その祖國愛、祖國防護精神の本地本土こそは『神國日本』である。フィヒテの精神はいふまでもなく、フィヒテの郷國とは異りて未だ曾つて外夷の侵略を蒙りたることなき日本國家に成就せられてをり、思想的に東西文明を統合融化せる日本は既に『成就せられたる世界文化單位』である。『われら日本臣民にとつては日本は世界であり人生である。日本はわれらの內心に生くるところの宇宙であり永久生命であり信順意志である。それは祖國日本を防護せむとする實行意志であり、日本は滅びずと信ずる一向專念の信仰である。』（三井甲之氏著『明治天皇御集研究』序）

我等はこゝに畏こくも宣戰の詔勅に

『天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス』

と詔らせ給ひ、軍人勅諭に『忠節』等五ケ條の軍人精神を『世界の光華』とも、『天地の公道人倫の常經』ともまた敎育勅語に『之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス　朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ』とも詔らせ給ひし大御心を更に

千萬の民と共にもたのしむにます樂はあらじとぞおもふ

きくたびにゆかしきものはまつりごと正しき國の姿なりけり

まつりごとたゞしき國といはれなむもゝのつかさよちから盡して

等の御製に仰ぎまつりて、こゝに祖國日本を防護することは、それが卽ち全人類の『平和』『人道』

『眞理』を防護する所以なることを信知信樂せしめらるゝのである。それは『いつくしみ』の日本人道精神に基づく萬世一系の　天皇の統治『天子は文武の大權を掌握するの義』を意味する『知らす』の日本認識論原理であつて、『國のためあたなす仇はくだくともいつくしむ』ところの『言向け和平す』日本國防哲學原理はそれより出自したものである。

最近企畫院第一部長の地位を去つた陸軍少將沼田多稼藏氏は、『國防國家』の示唆を昭和九年ローマ駐在中ムッソリーニ首相の演說から得たと告白し、自己の根本觀念として

「これは廣義の國防を一元的に綜合統制して總國力を發揮するやうに統制するといふことが大切である、平時と戰時との區別のないやうな國家にすること．さうして國家の發展も文化の向上も、その國防國家の完成を前提としてゆくべきものだといふ戰爭哲學のはつきりした信念をもつことである。」（『高度國防國家の建設と日本工業』再編成』、時事通信社發行『講演時報』第六百四號、三四頁參照）

といふ主旨を反覆力說し、特に『戰爭といふものに對する崇高なる信念をもつてこれを重視するといふことが必要である』といふ點を强調してゐるが、戰爭に對する崇高なる信念は、日本臣民としてはその主體目的たる日本國體に對する神聖觀念、日本文化に對する崇高なる信念なくしては之を堅持し得るものでないことといふまでもない。而してかゝる思想信念は、今日にあつては綜合科學哲學的世界觀に基く學術的認識を含蓄內容とするものでなければ、之を主觀的に堅持することもまた客觀的にその眞實性を明徵にし威力を發揮することも出來ないのである。また國防國家にあつては、戰時と平時との區別がなくなるといふ、さうすれば戰時が平時化常態化することになるから、逆に戰爭意識の弛緩徵薄化を來す心理を顧念するところなくしては却つて國防目的に反する結果を招くに至るべきである。何となれば人心の緊張と弛緩とは作業と休養との交替を要すること、天地に晝夜の交替、四季の循環ある自然法則の然らしむる所なるが故である。また戰時の平時化は國家生活の戰國時代化を意味するので、我が國史上源平の爭亂に續いた戰國時代に反國體の幕府政治と共に親鸞、道元、日蓮等の宗教が起つた如く、こゝに人心の不可測不可思議複雜微妙の變化を思量せねばならぬ。それ故高度政治力の發揮は高級の綜合文化政策を隨伴することなくしては、國防國家體制の外形整備がソ聯の殷鑑の示す如き內部崩壞の危險を招き目的結果不一致を暴露するに至るべきである。

かくして高度國防國家の觀念は空間的廣義より時間的永久觀念に進み、人生そのものゝ無窮の歷史的開展を憶念する哲學的世界觀、宗教的信仰に歸嚮する。天壤無窮の神勅に隨順するカンナガラノミチの深義を畏みまつり、われらはこゝに『肇國の精神に反し皇國の主權を晦冥にする惧れある』――聖戰目的を不明徵ならしむる東亞聯盟論・東亞協同體論が最近まで放任せられ來つた事例を顧みて全

國民諸共に『惟神ノ大道ヲ顯揚シ』と詔らせ給ひし聖諭に正しく對へまつらねばならぬのである。

慶大醫學部助教授林髞氏が『對支文化工作へ――醫者に思想的訓練を』要請した論文は自然科學者の側より精神科學的研究の重大性を示唆したものである。曰く

『對支文化工作に現在の日本の醫學を持つて行くといふことは意味がない。醫者が支那人に信用されてゐるといふのは日本醫學の技術が信用されてゐるのであつて、彼等が日本を心から敬慕するなどゝ考へるのはとんでもない誤りである。……

醫者は支那人に對して誰よりも近づき易い。しかしそこには對支工作の出來る思想を持つた醫者、その技術を用ひながらやつて行くといふ方法でなければ駄目である。つまり日本精神をしつかり把握した醫者を作ることが必要なので、そしてさういふ思想的な訓練はさう難事ではない……』（東京日日新聞昭和十六年三月二十三日號『一夕一題』欄參照）

と。高度政治力の發揮・高度國防國家體制の完璧が要請される總力戰時代には、綜合科學世界觀哲學としての國防哲學を要すること、いまは最早議論の餘地なきところである。

註　昨秋敎育審議會の大學敎育刷新に關する答申案中、大學令第一條に『常ニ皇國ノ道ニ基キテ』の一句が新に挿入せらるべきことが決定され、去る三月二十九日文部大臣官舍に於いて行はれた科學振興調査會第八回總會に於いて決定された第三回答申の要綱中には『本部局においては自然科學のみならず、人文科學に關する事項をも所管せしむべし。』『學術研究會議に新に人文科學に關する部門を設け專屬會員を置くこと』が報道された如きは、平生文相當時になされた『敎學刷新評議會』の答申を遡源想起せしむるのである。

この點に於いて情報局勤務の陸軍中佐鈴木庫三氏が『敎育の國防國家』の序文に『敎育を無視しては國防國家は建設もされなければ强化もされない』といひ、本論に於いても『第一に國民の思想が問題になり、第二に國家の各種機構の組織、統制、運營といふことが問題になる』といひ、この點を細論して

「國防國家の根本的な思想は個人主義や自由主義や民主主義とは全く正反對の、全體主義、統制主義、一元主義の思想に基いて居るのでありまして、これが具體的な形に現はれますと、前に述べたやうな廣義國防の一切の要素を擧げて、國防目的に合するやうに一元的な全體組織を作り、これを統制的に運營する國防體制となるのでありま す。」（一三頁）

といふ如く、「敎育」に重點を置く思想法は注目すべきである。然しながら國防國家建設の樣式を論じて、「暴力に依つて無理押し政治や經濟の組織を作り、然る後に國民を無理にその組織に入れて運轉しよう」とするソ聯型と、「敎育的な部面から先に建設して、續いて軍事、政治、經濟等の方面の建設に及ぶ」獨伊型とを指摘したる後

「第三の日本型といふのは一體どういふ樣式であるかといふに、皇道を指導原理とするもので、ソ聯邦のやうに暴

力革命にも依らず、獨伊のやうに計畫的な教育から先に着手するのでもなく、いろ〳〵な國難を突破し、困難なる國際情勢に對處して居る間に、自然に國民の間に輿論が起り、この輿論に基いて政治の樞軸が生れ、所謂合法的な無血維新といふやうな形に依つて建設されるのであります。」（同四五頁）

といふのは、日本國體の不動の政治原理の確認に基き、滿洲事變以來の經過を概括したものと思ふのであるが、「無血維新」といつても、内には五・一五事件、二・二六事件また外には滿洲事變から引續き現支那事變に拂はれ來つてゐる無量の犠牲の思想的意義をその禍根に遡源して考察する時、明治維新の政治改革が今日の事態を呈するに至つた禍源が、我國の思想參謀本部を以つて目すべき帝國大學六十年來の非日本反國體學風に存することを確認して教育改革、殊に精神科學部門の學術維新をして高度國防國家體制整備に對する彈機たらしめねばならぬのである。これこそ『無血維新』そのものであり、その原動力である。それは何等新しき立法も豫算も要せざる合理的、平和的、節約的なる國家革新方途で、ソ聯や獨伊の如きとは全く比倫を絶する國體明徵運動であるが、こゝに必須不可缺のものは現代俊傑の學としての精神科學、哲學的世界觀である。これは最近の『獨逸大觀』の文化欄に掲げられてゐる『戰時における獨逸の精神科學』に於いても、フランク教授が

「教育は、軍隊に後續し、土地を秩序づけ建設する總督府であるが、獨逸の科學は今次の戰爭においてこの總督府的役割を果すべきものである。科學の危機は一度天才アドルフ・ヒットラーに依つて超克された。彼こそは百千の專門分科をば、再び一つの大きな理念の下に結合した。」

「武器の戰爭の勝利の後に於いて獨逸國民の魂の戰爭が起るであらう。この第二の戰爭に於いては精神科學が最前線に出でねばならぬであらう。武器の戰爭に於て技術的諸科學が勝利の道具を鋭くする樣に、民族の魂に關する戰爭に於ては、精神科學は精神的諸價値の秩序變改の手段として重要なる役割を演ずるであらう。」（昭和十五年度日本電報通信社發行『獨逸大觀』二〇〇頁）

といつたところの、『技術的諸科學の勝利の道具』を最高度に精鋭ならしめ、綜合的に威力あらしむる日本精神科學シキシマノミチの任務に就いては、統制と自由との諸問題に就いてと共に以下の論述に讓る。

註　拙著『學術維新』及び『國家と大學——東京帝國大學法學部に對する公開狀』參照

尙ほ東亞聯盟論・東亞協同體論に對する批判に就いても右『學術維新』八二四頁以下及び精神科學研究所編著『支那事變解決を阻害するもの』參照

第二章　高度政治力と綜合文化政策

一、政治的形成力と文化的創造力

一般政治學的意義に於ける政治力とは、國家意志が積極的創造的に發動する場合の力である。國家意志は國家を形成する國民全成員の生命意志生活活動の合成力として生成發動するものであるから、全國民の意志活動、具體的にいへば各自の職分奉公がさながら國家の綜合政治力の成素となる。日本に於いて萬民輔翼の臣道實踐が大政翼贊となり　天皇の大稜威にをさめらるゝのはこの謂であつて、今日國家總力戰高度國防國家體制の完璧を期するといふ『高度政治力』の概念はその分析的抽象的表現である。高度といふのは立體的見地からで、平面的見地からは『廣義政治力』といふことが出來よう。然しながら高度または廣義の語を用ひて形容する政治概念は、實人生的內容を捨象して、形式的機制的に思考する西歐的發想法の產物としての抽象概念であることはいふまでもない。

西洋の政治概念は元來ポリス、ポリティケ、卽ち都市(國家)、都市(國家)政策、處世術といふ形式

的技術概念から生まれたもので世俗的である。これに對すれば支那の政治概念は『政』の字に道德的正義觀念を表はし、『治』の字に土臺を築いて水を疏通する、卽ち治水の治として起つたもので具體的方策を指示してゐるが、後代に及んでは、その道德的觀念は革命の國風史實による國民生活の頹廢と共に西洋の政治概念以下に墮落した。それらに對すれば、日本の政治概念はいふまでもなく、マツリ、マツリゴトといふ宗敎的觀念に發源し、今日に於いても本質的には現人神　天皇の宮中に於ける御祭祀以下官國幣社の祭祀、祭政一致の惟神の大道カンナガラノミチの信仰に、本來の宗敎的政治理念は肇國以來一貫して精神的、現實的傳統として生きてはたらいてゐる。地上の國と天上の國とを對立せしむる、西洋の傳統中には今日僅かに思想的回顧憧憬のよすがをとゞむる『神政』テヲクラシイの民族心理學的政治觀念が、史的現實的に一貫して民族國家生活の指導精神となつてゐるのは唯一つ神國日本あるのみである。マツリゴトは現人神　天皇の統治、オホキマツリゴト『大政』であり、アマツヒツギ『寶祚』――『皇位』『皇統』『皇運』――山川もよりてつかふる『天業』である。山川もよりてつかふるのは、オホギミノマケノマニマニ億兆一心職分に奉公して臣道を實踐する萬民輔翼の活動によつてゞある。

『海國日本は海の備へを今かためよ。』

各自のもちばに職務をつくして
つるぎをとりて立たむと待たむ、
外に秩序の整ふときに
内に自由の研究起り
國民協力の平等感を
國家社會政策に實現し、
集中と分散と分析と綜合と探求と獨創と個人と社會と國家と
はてなき海の八重波の同じきうしほにとけ入る如く
小草の葉末にそよぐ微風の
力もあつめて
人の組織を無限の自然に
とけ入らしめよ。
一切の差別は
こゝに消え
のこる名はたゞ原理「日本」。（三井甲之氏大正七年作『祖國禮拜』の一節）

詩人はすでに前歐洲大戰酣なる時、『小草の葉末にそよぐ微風の力もあつめて』といふ一句に自然

科學と技術應用とをも統綜する現代の國家總力戰・廣義高度國防國家の新體制 —— 國民組織を原理『日本』の名に於いて、大和言葉のコトノハノミチに豫言しつゝ

『天上の極樂は
內心に、
瞑想の觀念は
現實に、
日本の地に
日本のことばに
われらの行ひに、
今うたば吉らしと
不斷の準備と覺悟と
組織と秩序と訓練と
そを內に統ぶる
國民宗教原理「日本」。
ああ、日本よ、

五官と思想との現實的對象日本よ。
ああ、祖國日本よ。
われらは祖國日本を禮拜す。』

と歌ひ續けたのであつた。これがカンナガラノミチの根源的復古精神であつたことはいふまでもなく同じ『祖國禮拜』の一節に、『青山をから山なす、號叫の、民族移動の悲劇を、記錄にのこせし、いにしへのみちよ、めざめよ、今、大正の大御代に、ことそぎて、力ある、いにしへのみちよ、めざよ』と歌はれたのであつた。

來朝中のナチス哲學者デュルクハイムが『理想』昭和十六年二月號への寄稿論文『ナチスの文化觀及び文化政策觀』中に

『今日我々が謂ふ所の政治乃至政策とは民族をそれに相應しい全一體の中に計畫的に實現することである。然るに從來政治乃至政策といへば人間社會の素材のうちに何等かの理念を實現するに必要なる手段の總體を意味したのであつた。理念の基礎たる動機が個人の利己的な特殊利害であらうと、民族全體の福祉であらうと、政治の概念には何等觸れるところがなかつた。……

これに反して現代の政治は全くその意味を異にしてゐる。我々にとつては政治なる概念は内容的には神聖なる價値としての民族の理念に卽したものであり、全一體たる民族がその聖なる本質に相應しく現實界に於て已れを形成・維持・展開し、かくして計畫的に自己實現に邁進する意識的過程なのである。文化政策とは全政治過程の一側面として民族固有の力の創造的な發展を保障するものに他ならない。』

といひ、『最早空虛な形式の調和は喜ばれず、内容をもつた調和が已れの相應しき本質の實現として我々に幸福感と義務感とを與へる。かくして同時に精神は健全な自然に復歸する』といひ

獨特な民族の共同體が意識的に活動を全般的に規定する内容的な根本價値となるや否や、藝術及び科學の一切の文化的勞作は再び自然のまゝの健全な要素の肯定の上に立ち、美は再び現實の中に完成された規範となる。かゝる見地に立つとき、自由主義的な文化の世界に附き物の享受を悅ぶ無責任な氣輕さは文化的情感の國に於ける王座を失ふであらう。蓋し、今や文化は民族の本質的中核と生活形態との健全な精神的統一であるが、これと同樣に生きた本質とこの本質によつて刻み出される形との間に永遠に交錯する憬れと充足とを生ずるからである。』

といふナチス全體主義の政治原理は『神聖なる價値としての民族の理念に卽したもの』『全一體たる民族がその聖なる本質に相應しく』現實界を自覺的に形成する作用として、『民族固有の力の創造的な發展を保障する』といつて綜合文化政策を内容的に含蓄すべきを說く點に於いて、希臘以來の西歐的政治概念を超出せることを示し、『健全なる自然への復歸』『自然のまゝの健全なる要素の肯定』といふ如き言葉にも、大自然的開展としての我が惟神の大道カンナガラノミチの『神政』政治に憧憬

親近し來りつゝある節がうかゞはれる。このことはまた更に

『共同體に目覺めた民族が老若男女を問はず、地方乃至は職業的なさゝやかな集會はもとより全國的な年中行事に至るまで、一堂に相會し嚴なる瞑想のひとときを過ごし總統と祖國獨逸とに對する讃仰の念を新たにする數々の儀式や祭典は恐らくこの文化的意圖の最も獨特なる表現であらう。』

といふ如き一節にいよ〳〵その然るを覺えしめらるゝ。かゝる高度政治力の觀念はローゼンベルクの

『二十世紀の神話』中にも

『眞の再生は決して權力政策だけのことではない。況んや自負的な沒分曉漢が考へるやうな「經濟的建直し」の問題ではない。さうではなく、魂の一つの中心的な體驗、一つの最高價値の認定を意味する。この體驗が人から人へと幾百萬度繼續されるならば、遂に民族の合一された力がこの內的變化の前に顯現する。その時こそは世界の如何なる權力も獨逸の復活を抑止することは出來ないであらう。』（吹田・上村邦譯『二十世紀の神話』序）

『それ故一つの世界觀は、それが童話や傳說や神祕說や藝術や哲學に、相互に切換へられて同じことを違つた方法で表現し、それらが同じ種質の內的價値を前提として持つやうになつた時、始めて「眞實」となるであらう。こゝに宗教的禮拜と政治的公明とは人間自身に依つて表示された神話として相互に結合せらるべきであらう。』（同上五四三頁）

といふところに、綜合文化政策との內的關係に於いて示唆せられてゐるのである。

東京帝大法學部政治學敎授南原繁氏は『人間と政治』と題する論文中に

『吾々は民族と國家それ自體の絕對的存在をでなく、國家の價値を正義を主張しなければならぬ。これは國家と呼ばれるものゝ凡ての超歷史的なる前提であつて、政治生活の根元に於て國家の本質を成すところのものである。玆に飽くまで政治上の「合理性」——それは近代の自然科學的或は實證的なる合理主義とは區別せらるべき——が考へられねばならぬのである。』（帝國大學新聞、昭和十四年五月二十二日號參照）

といつた。こゝには民族、國家、價値、正義、歷史、政治、合理性といふ槪念が見ゆるけれども、それらの諸槪念は何等內容的に規定されることなくして取扱はれてゐるので、全體としての意義關聯に何等論理的必然性を示してゐない。それ故著者は更に氏のいふところを摘出しなければならない。

『……以上の如き價値に對する人間の態度は、凡そ自由なる主觀を前提とするものである。凡そ吾々が自由に眞理を眞理として肯定し僞を僞として否定するに非されば有意義に文化と社會を硏究することも困難であらう。學術は藝術その他の文化財と共に、その內容に於ては歷史的に規定せられ、必ずや各々の國民生活の地盤の上に形成せられるものではあるが、其の論理的前提と妥當性は何處までも「眞理それ自身の爲に」求められるところに存するのであると思ふ。「眞理をして成らしめよ、たとひ世界は滅ぶるとも」といふ言葉は一見誇張の如く又危險の如く響くけれども依然として一面の眞理を含めることを認めない譯にはゆかぬ。學徒としては文化創造の努力にあたり、かゝる學問的價値の自律性の所信の上に立つのでなければ、眞の硏究は不可能であらう。又國家にとりても、さう

した眞の學問的研究を認むることに依つてその基礎は却て益々鞏固にせられるのである。若しさうでなければ、國家に須要なる學術の成果をも期待し能はぬを虞るゝのである。』

『要するに政治は少くとも以上の關係に於て、人間の自由（それは自由主義といふとは異る）を承認し、諸々の文化の價値の自律を前提としなければならぬ。政治は或る意味に於て、それぞれの異るものを異るがまゝに結合するところの術であり叡智である。今後いかなる新しき文化理念と政治理想が立てらるゝにしても、又それが爲に如何なる世界觀乃至哲學體系が考へらるゝにしても以上のことは確保せられなければならぬ。それは實に諸國民が古代及び中世に對して戰ひ取つたところの、近世文化の特質の意義であり、全人類の收獲である。』（同上）

南原氏のかくの如き認識論、文化價値論は人間の『理性』または『叡智』を『吾々の裡なる最も高貴なるもの』と見たアリストテレス哲學の盲信から出たもので、この點につき南原氏は

『アリストテレスに於ては認識と理性との結合としての「叡智」が最高の德にして且最大の幸福であり、意慾と行爲卽ち「實踐」の諸德に優る。それは正に「神的非政治的」な生き方であつて、恰も神と動物との中間的存在者たる人間はかくの如き叡智の生活によりて、初めて神に近づき、神的なるものゝ分有に與り得るのである。』

といつてゐる。こゝでは叡智は、意慾と行爲卽ち實踐と對立せしめられ、それに優位する人間最高の德として『非政治的』卽ち『神的』な生活に屬するものとせられてゐるのであるから、政治と宗教とも亦對立せしめられて後者の前者に對する優位が說かれてゐるのである。

さて南原氏が『眞理をして成らしめよ』といふのはいゝ、然しながら『たとひ世界は滅ぶとも』といふ、その『世界』とは何の謂であるか？　抑もまた『眞理』とは何の謂であるか？　無解明の眞理概念は『神』といふに等しく、學術的には非理性的、非叡智的の無論理である。卽ち眞理といつても數學的眞理もあれば自然科學的眞理も歷史社會科學的眞理もある。學問は眞理を闡明するといふが、何を對象としてそれを闡明せむとするのであるか？　我々が思ふのは『もの思ふ』のであり、言ふのも『もの言ふ』のであつて、何等かの經驗的事實を對象とすることなくしては、思ふことも言ふことも出來ない。數學の如き形式科學、純粹思惟の科學にしても、猶ほ且つ事實上は實在する『世界』の直觀形式に依據し、それを對象とすることなくしては、思考するよすがもないのである。たゞ、數學にあつてはその特殊の學的性質から、その眞理自體は現實の『經驗的世界』を超出する先驗的のものである。然しながらいま南原氏の場合問題は政治學であつて、政治學の研究對象從つてまたその探求する眞理は氏自身『人間と政治』と表題する如く、それは人間の世界に內在するものでなければならぬ。研究者たる主體そのものが元來、人間としてこの世界の所屬者ではないか！　この場合『成る』といふならば、眞理は『世界から成る』のである。從つて『眞理をして成らしめよ、たとひ世界は滅ぶとも』といふ如きは、眞理の地盤たる客觀的對象全部を自ら徹去するに等しき妄論で、宗教的信仰

の表現や文學的比喩としては兎も角、學術認識論の場合にかゝる標語を掲ぐるといふことは童話的幼稚か狂信的妄想を自白するに等しく要するに學術論理學のいろはも知らぬものといはねばならない。

南原氏が綜合科學としての政治學または政治哲學の原理を神的なるものに求めたのは、政治學を神學化したもので、一般的にいへば學術を宗教に歸一せしめたのである。道徳が宗教に至極すべきはいふまでもないであらう。こゝに近代の綜合劇詩人リヒアルド・ワグナーが『藝術品は活き活きと表現された宗教自體である』といつた如きに徹するまでもなく、眞の宗教と眞の藝術とはその深奥に於いて合一渾融するもので、前者が内的信念を重んずるに對して後者は表現形態に力點を置くに過ぎない。ゲーテもイエスに對して『余は人倫最高原理の神的啓示として彼の前に跪拜する』といつてをる。かくして眞の宗教は期せずして眞の藝術を生み出しまたは隨伴し前者は後者によつてのみ眞にその精神的價値を不滅ならしむるのである。大宗教の經典はすでにそれが信仰の世界を表現せる詩篇である。それ故人は宗教の眞の文化的意義を考ふる時、寺院や教會の外形に泥着してはならぬ。かかるものを生み出した宗教的天才の内的信仰を、また一層根源的綜合的には人性の自然と歴史の全展開とを思はねばならぬのである。生命の自然、人格の事實は本來無限の統一である。人類のあらゆる文化は分化しつゝ内的統一を求めて已まぬものである。これ學術研究に於いても、體系化の要求が科學から哲學に歸趨しまた進んで宗教藝術を求むる所以であつて、現代の世界觀の哲學は全文化價値を内的脈絡に於いて統綜せむとするのである。それ故南原氏が『諸々の文化の價値の自律』を說くのは、生命と人格との自然の要求に背反し時代の進展にも逆行せむとするアナクロニズムも甚しきものである。

かくして宗教、道徳、政治、學術、藝術等の人類の諸文化は、それらの眞の精神的意義と價値とを味識するならば、その間に内的有機的の統一的關係を見出すべきであるから、南原氏が『諸々の文化の價値の自律性』を說いて、『政治は或る意味に於て、それ〳〵の異なるものを異るがまゝに結合するところの術であり叡智である』といふのは、各種人類文化の外的形態の殊別に眩惑して、それらの精神的價値の内的有機的體系的關係を味識するを得ないことの自白であり、氏自身に叡智即ち哲學的世界觀のない證據である。それ故、『神的＝非政治的』と見る氏にとつては『政治』は單に『それぞれの異るものを異るがまゝに結合する術』に過ぎない。氏の思想素質は假りに理想主義的であるとしても、氏が『自由なる主觀』『人間の自由』『諸々の文化の價値の自律性』を反覆力說する、この自由主義は思想素質に於いて無政府主義的である。『それ〳〵の異るものを異るがまゝに結合する』といふことは意志の統一を意味する政治にとつてはナンセンスであり、實質的には政治の否定以外の何物でもないからである。（拙著『國家と大學』參照）

二、大政翼賛の政治原理と官界新體制

新體制大政翼賛會の發足に當り、『公益優先の精神』といつた如き、公益といつても畢竟利害觀念に外ならぬ經濟的概念を以て政治文化をも含めて國民生活全領域を包括する指導原理と說いたのは、その根本觀念が組織といひ體制といふ外的機構を重視する唯物思想であつたからである。それはマルクス主義に發したものでなかつたとしても、その經濟主義唯物史觀的思想法の魅力圈內のものであつたことを否定することは出來ない。これは利害を超ゆる正邪善惡の政治道德觀念から、眞僞美醜淨穢の學術藝術宗敎の至高文化理念の精神的創造價値を體驗味識する能はざるもので、依然として舊式の月次低級政治思想の埒內に留つてゐるものである。これ自由主義民政主義的の對立政黨を排擊解消しても、却つて『共產主義の亡靈』等の魑魅魍魎を暗躍跳梁せしめし雰圍氣の裡に、それ自體が『幕府的存在』『一國一黨』的政權獲得意志を危懼せしめて、朝野議會國民輿論の批判對象となり、かくしてその改組再編制を已むなくせらるゝに至つた所以である。

それ故高度廣義の政治力といふことを日本國體に就いていへば、アマツヒツギノミワザ即ち天業恢弘、皇運扶翼の『天業』『皇運』と畏みまつるべきで、大政翼賛會の出發に當りその名稱を『皇運扶翼會』とすべしといふ意見が出でたのは、これこそ該運動の根本精神に適つたのであつた。いま嚴密

にいへば『大政』の語は『大政奉還』の歷史的用語よりするも、詔勅、皇室典範また攝政令の出典よりするも　天皇親政の現實的發動としての統治權の行使を意味する。それは憲法學的にいへば、第一條第四條に象徵的に規定せられた統治大權の全體の作用である。然しながら內閣の首班たる總理大臣が總裁としてなし得べき大政翼賛運動は　天皇の祭祀大權は勿論、統帥大權及び司法大權の發動を除外したる以外の國務全般に亘る大權行爲に就いてなされ得またなさるべきもので、その範圍は大體に於いて國務大臣の『輔弼』のそれと相蔽ふ領域である。立法權は元より　天皇の大權であつて政府國務大臣も亦、帝國議會と共に立法豫算の成立に翼賛し奉るのである。

この活動領域に何等かの影響を及すべく積極的能動的に參加することが我が國法上の『政治』であつて、軍人勅諭に『政治に拘らず』と詔はせたるものは正にこの政治概念である。これ現役陸海軍軍人が今次大政翼賛運動に參加せざる所以であつて、この意味に於ける大政翼賛運動が昭和の大御代に於ける臣道實踐として帝國憲法の條章に恪循して行はるべきはいふまでもないのである。

この意味に於いて大政翼賛會の前東亞副部長たりし杉原正己氏が『國民組織の政治力』中に

「組織においてそれを綜合したる後においては、中心歸一の新しい日本精神の體得は實踐を通じて問題を解決してゆくであらう。それは形の異つた權威的獨裁である……下に對してはその責任から生まれる權威によつて獨裁的決

定、指導をなす、これによつてのみ歴史の命ずる綜合變革は成しとげられるのである。』（三八五頁）といつて、かゝる思想法から共産黨組織を思はしむる『國民組織』をナチス指導者原理の『權威的獨裁』主義と結合する態度は

『一つの最高の權威の下、忠誠の誠によつて貫かれたもの、天皇の御委託によつて　天皇の大御心を心とする指導者の權威と責任は生まれ、御名代としての權威は最高の指導者に最高の指導者の委託者として次位の指導者へと責任は委託される。』（三三三頁）

といふに至つて、不敬冒瀆・大權私議・朝憲紊亂の僭稱言説となり更に『一國一黨で指導者原理であるから……』（三八七頁）といふ如く、『一國一黨』を忌憚なく公言する如き『政治力』の觀念が違憲反國體思想なることはいふまでもなく、皇紀年代に就いて問題を起した同會前東亞部長龜井貫一郎氏の責任は、氏がその直接部下にかゝる違憲反國體思想家を率ゐてゐた事實によつて必然的不可避的に重大化することを注意したい。然しながら根本問題は議會の論議ともなつた如く、かくの如き人物を幹部級に幾多包含してゐた大政翼贊會全體の思想性格そのものであつた。

それ故に政府はこの翼贊會の思想性格と組織人物とに就いて改正する公約を議會に於いてなし、既にその改組の骨組を立てたが、上意下意の觀念を政府の方針と國民意志と解釋し、『大政翼贊會』の名に於いて之を政府の補助機關たる公事結社なりといひつゝ、而も之に高度政治性を有せしむるといふ如きは『政治』概念を昏迷ならしめたもので、かくては高度政治力の哲學的觀念も嚴密なる國法學的觀念も不明徵となり、大政翼贊の實を擧げ得べくもないのである。

元來今次の新體制翼贊會運動の如きが起るに至つたのは、直接には議會政黨が本來の翼贊の任務を果すに缺くるところあつたためであつた。然しながら、それはその憲法上の制度そのものゝ罪ではなく、『翼贊』の精神とは正反對なる民主主義『機關說』思想によつて、議會及び既成政黨が久しく誤り導かれ所謂政權爭奪を事として來たからであつた。問題はこの議會政黨思想の違憲反國體性にあつたのであるから、根本問題はこの思想改革――『機關說』に代表された帝大學風からしての教學刷新であり、こゝに國體明徵・國民精神總動員運動の重大意義があつたのである。然るにこの思想改革、教學刷新の根本問題を逸したるが故に、第一次近衛內閣以來の『精動』は、『物動』の影像的機能に終始して了つた。而も今次の『新體制』運動は、その名の如く『體制』刷新を主目的とし思想改革は閑却したのであるから、大政翼贊臣道實踐を標榜しながら、憲法上の翼贊機關たる帝國議會を無視しまたは無力化し所謂高度政治力によつて、あはよくば之を乘取らむとする如き思想意志を包藏せる者も參加して居つた――例へば前記杉原氏引用文參照――これ解黨したる舊政黨人らをしても議會を通

じて憲法擁護國體明徴を叫んで逆襲せしむることゝなり、政府をして翼賛會の改組を已むなくせしむるに至つた所以である。（國民精神文化、第七卷第五號所載、井上孚麿氏『新體制憲法論』參照）

かくして當初その成否は國運の消長に關すと呼號し高度政治力を志向して發足した大政翼賛會が、今や公事結社的政府補助機關に性格づけらるゝに至つた。この全體の經緯に、思想的昏迷、指導精神の不明徴が如何に重大なる政治問題や國民各層各方面に亙る摩擦紛糾を惹起するものなるかゞ實證せられた。今次第七十六議會の如く貴衆兩院を通じて思想問題が眞劍に論議せられたことはないと述懐されたことの深義を全國民は三省熟考すべきである。

帝國大學の學風を改革せざる限りは、國民精神文化研究所、總力戰研究所其他の研究調査機關を作つても畢竟徒勞である。調査局から擴大せられた企畫院の外に、翼賛會内に政策局企畫局を設けたことの思想的誤謬現實的失敗はいま翼賛會の改組に於いて匡されつゝある。議會局は勿論當然廢止せられた。然しながら憲法上の重大翼賛機關たる帝國議會をその本來の面目に歸し、その職能を正當十全に積極的に發揮せしむるためにも、帝大學風改革の教學刷新を力源とし新聞雜誌の思想風潮をも改革して國民思想社會教化上における舊來の陋習を打破する、眞實に强力なる國民精神總動員運動を更始一新飛躍的に展開すること能はずしては政府は翼賛會を八百萬圓の豫算を以て『精動』化しても更に再び畢竟舊『精動』と撰ぶなき浪費を繰返すに終るべきである。翼賛會改組につきその『理念方向は不變なるべきこと』が軍部の要請として現れたのは、大政翼賛臣道實踐の根本精神に就いてたるべく、その思想性格には根本的革新が行はるべきである。顧みれば翼賛會を作つたのも議會に新生面を開かしむる如き高度政治力、高度精神力を有しなかつた歷代内閣の思想的無力であつた。『經濟新體制』要綱の決定に就いても翼賛會問題と同樣朝野國論議會討議に摩擦紛糾を來し、こゝでも政府は財界人より『官界新體制』の確立を逆襲的に要請せられ、官吏身分保障令の撤廢、自由任用制度の採用、高等文官試驗の改革等をなしたけれども、思想風潮改革の根本彈機には寸毫も觸れ得ないのである。

この點に於いて、所謂革新官僚の一人として經濟新體制の企劃に參與した美濃部洋次氏が『日本評論』昭和十六年三月號の『經濟新體制管見』の最後に

『財界の論將鄕古氏の如きは座談會に於て、論文に於て官界新體制を實現し得ざる官僚を目して「現狀維持」官僚より甚しきはなしとして居られる。この點に關しては官僚の一員たる我々として慚愧に堪へない次第である。……而してこの點に關しては恐らく全官僚の夙に認識して居るところであると思ふ……我々官僚は虚心虚我一日も速かに官界新體制の確立に精進しなければならないと考へる。』

といつたのは、その反省の動機目的が猶ほ機構制度上に留つたものであるが、毛里英於兎氏が同誌同

號の『官界に求められるもの』といふ題下に

『官界人の生活意識が現代の日本の一般知識人のそれと本質的に異るものでなく、從つて現代の知識人に缺くるところのものは、亦官僚人の有つ共通の缺陷である。……高等文官の試驗は實質的には大學の一般知育に對する再試驗に過ぎない。……そのことは知育偏重の大學教育の齎す日本知識人の有つ共通の缺陷によつて自分達も非常に禍されて來たことを意味する。』

『日本に於いて、官吏の地位と責任が非常に重要なものであることを知れば知るほど、また求められるものが大であればある程、今まで文官に對する訓練に方式がなかつたことを遺憾とする。日本の政治は、つとに文官再教育の方法と組織の確立を求めなければならなかつた筈である。……それが單に知識の再教育に止まらず、知情意に亘つて人物の養成に重きを置かれ、新しき型の官吏が輩出されることが希望される。』

といひ、最後に

『統制經濟又は計畫經濟は稍もすれば、その運用が屬僚的になつて行く危險を常に包藏する。政治が下へ下へと落ちて行くことは、統制經濟に致命的な缺陷を齎すものであることを、爲政者は常に考へて行かなければならない。』

『日本人の生活意識の中には、具體的なるもの生活的なるものは、卽ち經濟的なるものとする思考が潛んではゐないか。それこそ自由主義的な、經濟主義的な世界觀である。最後の具體的なるものは民族それ自體であり、民族のエネルギーであり、民族の高度の知情意の綜合が國防であることを政治家も經濟者も知識人もはつきり知らなければならない。」

といふに至つたのは確かに根本的な反省態度であるが、知育偏重がいかぬといふよりも、知育そのものがなつてゐなかつたことを思ふべく、毛里氏のいふ『具體的なるもの、生活的なるものは、卽ち經濟的なるものとする思考』『經濟主義的な世界觀』に於いては、マルクス主義唯物論こそその最たるものであることは、唯物史觀が『經濟史觀』と呼ばるゝことによつても明白である。

かくして現日本の知識階級に、かゝる經濟至上主義的思想が彌漫してゐるのは、この自由主義マルクス主義の思想風潮が、明治大正昭和の三代に亘り帝國大學の學風としてジャーナリズムを通じて全國民的に普遍化された結果に外ならぬ。これ學術維新敎學刷新運動としてわれら同志が二十年來之を朝野に警告し輿論を喚起し來つた所以である。毛里氏の前記所論が此の點に觸るゝに至つたのは思想の進歩であるが、日本の統制計劃經濟の『致命的缺陷』はそれが運用上屬僚政治化する官僚主義的弊害といふよりも、その立案計劃そのものゝ責任者がマルクス主義に對する學術的批判能力を缺き制度機構を迷信する如き偏知主義唯物主義の思想的雰圍氣の裡にあつた點に存する。それが帝大學風の禍殃である。毛里氏がこの點に思ひ至り『自己批判』『自己革命』を告白宣言するに至つたのは激動的情意を窺はしむるのであるが、『知情意に亘つて』といふ全生命全精神的の改革意志が、藝術的表現

を要求する宗教的熱誠に徹すると共に、心理學・精神科學・哲學的研究に向ふ如き思想的新展開を示すに至らむことを期待したい。（拙著『國家と大學——東京帝國大學法學部に對する公開狀』及び『學術維新』參照）

註　山崎靖純氏が讀賣新聞四月十七日の經濟面論説『最大の先決問題』中に

『最近わが經濟一般に何となくサボタージュ的、非協力的傾向が累加し來つた感を強く持たしめられる。それは生産面においても消費面においても同様である。』

『かゝる現象は屢々政治が信頼を失ひ、また國民が生活上の理想と目標とに戸惑ひに陷つた時に起り勝ちである。かやうな場合は單なる經濟的對策や國民に對する說敎や官僚の末梢的活動によつて完全に克服され得るものではない。』

『是を要するに筆者が既に幾度か指摘したる如く、現在の經濟對策は最早單なる技術（經濟對策）の問題ではない。その技術の奥に潜む所の歷史認識、國家觀、政治の意義、生活原則に對する根本的變化が規制する所の政治性格の問題である。』

といつたのは正しい時代感覺を示したものであるが、問題の歷史認識に就いて

『そこで資本主義が行詰つてゐるから資本主義を打破するのだといふ考へ方は非常に幼稚な考へ方で、曾つての左翼思想の中にさういふことを言つた人が若干居つたかと思ふのですが、これは非常に間違つてゐると思ふのですが、われわれの現實の態度として現はれてくるものは眞にわれ〳〵が生きてゆく姿をどういふやうに打開させてゆくかといふことが最大の課題でなければならない。』（『文藝春秋』昭和十六年五月號『世界情勢の展開と革新の斷行』座談會記事）

『……資本家の考へも間違つてゐる、官吏の考へも、軍人の考へも、國民全體が間違つてゐると思ふのです。國民全體の修養と文化意識といふものがまだ低調だと思ふ。……さういふものを指導するものは結局政治なのだから、政治から先づ改められなければ本當に國民が賢くならんのです。』（同上）

といふに至つたのは、マルクス主義の魅力圏・唯物史觀的思想法から超出する契機を示すものではあつても、未だ暗中摸索の域に留つて眞に威力ある世界觀原理を積極的に示唆するにも至つてゐない。この點では美濃部洋次氏が

『今は指導者初めみんな自信がなくなつてゐると思ふのですよ。これが日本として一番怖いことである。このまゝで、ますますむづかしい問題に飛込まうとしてゐる、かういふ態勢では迚も駄目だと思ふのです。』（同上）

といふのも同類項に屬するが、民間から企畫院調査官となつた森川覺三氏が、松岡外相の歸朝歡迎會における報告演説に因み『個人の創意』と題して東京日日新聞に五月八日から三日間連載した寄稿文の最後に

『戰爭大消費に直面して生産擴充の絕對的必要に迫らるゝわが國において、既に生擴なる熟字すら出來てゐるにも拘らず、實際生産力は增してゐるだらうか。ドイツは開戰とともに二、三の例外を除き物資は益々豐富となり、戰爭大消費を賄つてなほ餘りあることは切符制による消費物資配給量の增加によつても明らかであり、各種企業の生産力は平均約二割の增加をなしてゐるとさへいはれてゐる。ドイツに比しては食料において遙かに豐富な筈のわが國において、ドイツと正反對の結果を現出してゐる原因は一體何處にあるのであらうか。』

『多年に亘つて人の上に立つ人達の無責任と無方針と八方美人主義によつて、公平なる人事といふ美名の下に實は最も不公平にしてかつ無責任な人事が官民を通じて踏襲されて來たために、個人の努力や創意が防遏されて來た上に、更に、事變以來、生硬な觀念の遊戲が橫行し、一層人間を物品視したがる傾向を生じたために、原因は結果を生み、結果は更に次ぎの原因となつて、今や個人の創意や努力は全然といつてもいゝほど無視せられてゐる寒心すべき狀態を招來してゐるのではあるまいか。爲政者の無氣力と努力の不足も確に一因に相違ないと考へらるゝが、今一つ大きな原因は官民を問はず個人の創意

と努力を封ずるが如き習慣が凡ての動きを不敏活に導き、常に目的と正反對の結果を招來するのであらうと考へるほかはない。かゝる憂慮をひそかに抱く私に取つて、松岡外相の歸朝第一聲は誠に天來の妙音であつた。』

といつたのはこの限り注目すべき意見である。

三、高度精神力と綜合文化政策

こゝに著者は大政翼贊會の運動中比較的堅實に進みつゝありしやに噂された同文化部の指導方針を檢討して、眞の精神總動員運動に論及したい。岸田國士氏は文化部長に留任したが、改組直前に翼贊會文化部から發表された『地方文化新建設の根本理念』にも、第一に掲げられてゐるのは

『高度國防國家完成の不可缺な要件として、文化機構の再編成が要請せられてゐること。』

といふ『機構の再編成』であつて、この文體語法の血も肉もない無味乾燥の平面論理は無思想性、非文化性そのものを象徴したものである。また次に第二として『その際、文化を新しい時代に即應して再認識する必要あること』と續くるのも同樣で、何處にも溢るゝ如き生命感覺、永遠無窮の創造的精神の躍動が認められない。かくして

『從來は政治、經濟は勿論のこと國民生活を遊離した贅澤品乃至は裝飾品のごとく考へられた、その消費的、享樂的傾向を打破すること』

といふ如きも低調極まる文體で、かういふ文章として現はるる思想そのものは創造的生命感を缺如する點に於いて享樂的以下の消極的存在に過ぎない。その際『生産面にふれた文化』といふ如きも『物動』の影像的機能たりし舊『精動』思想を搖曳したもので、思想的に貧困無力であればこそ政治性を求めるのである。即ち

『倫理性、科學性、藝術性のほか文化に更に高い意味の政治性を考へること。』

といふのも『考へる葦』の弱音である。倫理性、科學性、藝術性の『ほか』別箇に『政治性』といふものが存在する、それを外から改めて結合するといふ如きことでは、それら一切の文化も政治もすべて箱庭式のもので『詩を作るより田を作れ』といはるゝ月次低級のものである。『技術的能力と生ける信仰との合致』（デュルクハイム）といひ『詩與政治相昇降也』（副島蒼海）といふ如き高級の創造的精神にあつては、倫理性、科學性、藝術性がさながら高度政治性に通ひまたそれを發揮する。『詩人と軍人との人格的統一』を思想し體現する如き世界觀に立たずしては、今日『國防國家體制』を說くべくもないのである。

かくして第三に『新しき文化の建設は光輝ある傳統の自覺によつて行はれる』といひ『日本に於ては復古は、復古の如く見えてつねに維新であること』と結ぶ御義理思想は、原始ゲルマン民族の神話的精神を二十世紀の現代に復活すると大膽率直に宣言するナチスの勇氣に通ふ節もなければ、況んや

日本國體の稜威を宣揚せむとする何物をも感ぜしめない。それ故第四に地方文化の振興を說いて『日本の文化の正しき傳統は地方文化の中に存する』といふのは、『地域的共同體』の確立といふ語にその片鱗を示すところのマルクス主義的唯物論を思はしむるもので

『地方文化の健全なる發展は、中央文化への批判であり、これによつて、中央文化再建の方向を與へるものなること。

從つて地方文化の健全なる發達は實は國民文化の再建となるものなること。

地方文化の振興なくしては、東亞新秩序の建設乃至は東亞文化新體制の確立をいふ資格なきこと。』

といふに至つては、現日本にあつては中央に日本國民文化の正しき傳統すでに滅亡せりと斷ぜるに等しき敗戰思想である。この日本民族文化の精神的生命中樞を全く無視して地方文化――國民文化――東亞文化とやうに外面的地域的擴大を說く昭和研究會の東亞協同體思想はまた『個人主義的文化を止揚して、集團主義的文化の發揚をはかる』といふところにもその唯物論的傾向を示してゐる。人生觀としての個人主義の誤謬はわれらの久しく排擊し來つたところであるが、文化ことに高級の文化は天才的個人の創作に屬するものであつて同時に國民的全人類的の精神的價値を具現するものであるから『個人主義文化』の排擊を說くのは認めても『集團主義文化』といふ如きもののみを强調するのは、高級なる超時代的國民文化の精神的價値を味識せざる多衆主義的唯物思想である。かくしてこの文化政策の指導理念が遂に一度も惟神の大道カンナガラノミチまた一般宗教的信仰に言及するところがないのもこの故である。(拙著『學術維新』第二篇『世界文化史の新回顧と新展望』參照)

註　岸田國士氏が翼贊會文化部長就任に當り昭和十五年十月二十日の都下新聞に挨拶狀を發表した中に、『我々が子孫に殘す文化的遺産が、非常時以外に通用しないやうなもの、國民生活を低く貧しくするやうなものであつては、由々しいことであります』といつたのは正しかつたが、『國防國家の求める文化統制は平時に於ては是とされる一部の傾向を排擊し抑制しなければなりません』といつた如きは月次を一步も出たものではなかつた。

また『所謂非常時局は國家千萬年の生命に比べて、これは一つの限られた瞬間であります。この期間に釀成される國民文化の特質がその後に來るべき時代のため禍となるやうなものであつてはなりません』といふ所には『平時』と『非常時』と、『限られた瞬間』と『國家千萬年の生命』とを離接的對立的に考へる態度が示された。これは西洋でも『永遠の今』といふ日本歷史哲學の『中今』の生命原理の徹底的究極的信念に達してゐないもので、『以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ』と繰返しまた繰返し勅命あらせ給へる大御言葉を拜しまつれば、天皇親政・臣道實踐の國體原理の下にあつては平時戰時、瞬間永遠の對立觀は排拭せられ、われら日本臣民にあつては『中今』のいまのをつつが恒に『天壤無窮ノ皇運扶翼』の信行であらねばならぬ。これは『治に居て亂を忘れず』といふ武士道精神を含蓄し『戰はずして人の兵を屈する』といふ兵學原理を實踐するもので、『この生死はすなはち佛の御いのちなり』といひ『生死に處して疲倦なし』といふ如きもその分析的表現に外ならぬ。ことに『物のあはれを知る』モノノフノミチまた『わび』『さび』を味ふ日本的美感藝術精神シキシマノミチの傳統に佛教

の無常感が貢獻しつゝ長養せられた消息を思ふべく、皇國日本の國防國家體制の完璧を期するためには『義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ』との忠節軍人精神を、『國をおもふ道にふたつ』なき銃後國民の最後の一人にまで徹底せしむるとこそいふべきである。デュルクハイムが『詩人と軍人との人格的合致』を說き、ローゼンベルクが神秘主義者エックハルトをゲルマン魂の最高峰と讃仰して、『この人物と鐵兜の出征軍人とが同一であることを體驗せねばならぬ』といつたものは、わが國にあつては東鄕元帥、乃木大將に實現師範せられてゐる。

『歐洲大戰にはかに起り
地圖の區劃は忽ち動き
日よりもあかるき文化のともし火
その國々を
うちとより
い照しかゞやかし
ひむがしの國日本に
西の國のありさまを
さながらに
見しめつゝ、
大波はさゝ波に
さゞ波は大波に
うつり押し進み
全世界の
人とふ人の
心を刺戟す。』（前揭三井甲之氏『祖國禮拜』の一節）

と歌はれた如く、戰爭は國民總力戰として既成國民文化力の暴露試錬であり、その新創造新開展の契機であることは過去史實またわれらの眼前に展開せられつゝある冷厳の現代史實である。

明治天皇御製

心

しきしまの大和心のをゝしさはことある時ぞあらはれにける（明治三七年）

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな（同年）

ときにつけ折にふれつゝ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

といふ大御歌を拜誦しまつれば、最高の文學藝術、至上の精神文化は個人的にも民族的にも『世の中にことある時』にこそ創作の衝動を得て表現せられ、それが永遠無窮の生命價値として國家國民生活の『守護神』となるの事理を、畏かれどもわれらは『明治天皇御集』に現しく仰ぎまつるのである。岸田氏は『國民各自はこの領域に限つて乏しきを忍ぶ必要はありません。伸びるだけ伸び得られればよいのです』といふ如き安易なる現實無痛感、思想的無批判にとゞまつてゐるべきではない。

かくして前記翼賛會の文化思想にはローゼンベルクが『神話も性格もない十九世紀は議會政治、マルクス主義、要するにあらゆる破壊力に對して爲す所を知らなかつた』といひ、『宗教的心情は往々言明されずに存在してゐるものであるが、かゝる場合にも矢張り一つの民族的精神の全雰圍氣を啓示する』それが『人間の精神的な、唯一の創造的根源力の眞に生けるしるしである』といつた如き潑剌たる生命感を覺えしむる何物もない。デュルクハイムが前記『ナチスの文化觀及び文化政策觀』中に

> 『文化生活の革新は組織にあらずして教育による一途あるのみである。全一體の成員として自己を發揮する力を個人の中に蘇らせる教育的革新の成功を俟つて初めて組織の成功も期待されるのである。かくて初めて個人の行爲は事物に固有の法則に服從する場合にも、或はまた素人の目から見れば國民に對する直接の利益が見えないやうな問題を學者的立場から攻究する場合にも、全一體に奉仕するものといへよう。』（一五頁）

といつたのは、『個人主義的文化を止揚し集團主義的文化の發揚をはかる』といふ如き辯證法的反動思想とは全くその生命原理を異にするものである。

爛熟頽廢の弊風を發生せしむる文化の大都市的集中また偏在が綜合國民文化の見地から不健全で、かゝる弊風を除くために文化の地方分散を說くことには、國土計畫の觀點からも意義を認むべきであるけれども、前記翼賛會文化部の文化政策指導理念中に、『大都市文化卽中央文化』といふ不正確の概括論から、現日本にあつては中央文化はいますでに本來の正しい國民文化の傳統を害はれてゐるから、地方文化の健全なる發展によつて『中央文化再建の方向を與へ』ねばならぬといふ如きは、先に批判した如く、現日本には政治的中樞に健全なる國民文化の傳統がすでに滅亡してをると斷定したも同樣である。畏くも日本文化の光源としての皇室を仰ぎまつることを遺忘せぬところに、かゝる斷定が下され得るであらうか？　抑も『中央文化再建の方向を與へる』如き眞に價値ある國民文化の根源的傳統はいま現に日本の何處に生くるといふのであるか？

これは文化の進展が內外の交通によつて行はるゝ歴史法則を確認せず弊風の一面のみから空漠に斷定したものである。長短利弊は人生の一切に不可避である。如何なる時代にも地方農村に次の時代の文化創造の荷ひ手となる自然素朴の民族生命が潜んでゐることは事實であるけれども、稀有の特殊事例を除き、いま現在一般的に地方文化が中央文化よりも指導的優秀價値を實現してゐるといふ如き、事實無視の架空論から具體的文化政策をまで云爲するのは、文化觀上の無政府主義ともいふべく、これは立案者自身のフランス文學的頽廢、思想的無力を日本文化の現狀に投影したものに外ならぬ。

鎌倉時代から續いた國體不明徵時代を除けば、日本の國民文化の指導力が政治中樞と結合してをつ

たことは歴史の事實であり、著者らが指摘し警告し來つた帝大學風の歐米崇拜思潮の及ぶ所、表面上如何に頽廢的要素が目に着くにもせよ、いま昭和の大御代に世界的日本文化の方向を指標する指導的精神が、首都東京に生きてをらぬと大政翼贊會の名に於いて斷言する如きは、日本文化の眞實を歪曲貶黜し日本國家の威嚴と生命價値とを冒瀆するも甚しき妄論である。外來文化の影響によつて正系國民文化を破壞する要素が現に著しく東京に於いて見らるゝことは一面の事實であるが、然しそれと同時に之を打破し匡正せむとする思想改革運動も亦現に東京を中心として最も有力に行はれてゐることは、五・一五事件や二・二六事件等の政治的改革運動もこゝに於いて起つた如く、これまた嚴然たる事實である。かくしてまた地方的文化勢力もそれが優秀有力であれば、必ず中央に進出し交流してそこから全國的にはたらきかくるといふことが、交通によつて進展する文化の生命法則であり、かくしてまた必ず中央地方の政治力と結合するに至るのである。

要するに翼贊會文化部の文化政策論は、その根柢に於いて無哲學の月次低級思想であり、日本文化の現實の認識に於いて重大錯誤に陷つてゐるのであるから、かくの如き文化觀と文化政策を以つてしては高度政治力の發揮が要望せらるゝ『新しい時代に呼應』し得べくもない。根本的方策は、機構の再編制により中央地方の文化交流を計るといふ外的施設にあるのではなく、先づ第一に世界的日本精神史の創造的傳統・生命原理を宣明して日本文化の現狀に思想的批判檢討を加へ、以つてその高低、正邪、健不健を分ち高級の價値あるものを育成し之に反するものを陶汰芟除せねばならぬのである。

英語のカルティベート、カルチュアまた獨逸語のクルティビーレン、クルツゥルの西歐語からしても、文化は生成的に『耕されたる自然』であるから、現日本にあつては八重葎しげれる文化の曠野を底深く鋤き返し　明治天皇御製に『うとましと思ふ葎』と歎かせ給ひし『あらぬ心の種』を芟除して『開けゆくときにいよいよ仰がれぬ聖の御代のたかきをしへ』と仰がせ給ひし『神代のたね』を新に播きひろめねばならぬのである。こゝにデュルクハイムが前記『ナチスの文化觀及び文化政策觀』に

『ナチスの政權獲得後の獨逸に於ては、先づ民族の特性と相容れざる人物や精神的要素及び之を是認する組織を斷乎として排擊したのである。國家と黨との協力によつて直ちに全職域に於ける民族意識の更新を目指した大規模な教育事業と文化總力の再編制とが開始せられた。かゝる建設的な事業によつて生活の各領域に亘つて健全な自然のまゝの正常なものが改めて涵養せられるに至つた。』（一七頁）

といつてゐることを指摘したい。日本文化、日本政治の原理がドイツ文化、ナチス獨裁主義とは異ることといふまでもないが、以上に引用紹介した文化の本質と文化政策とに關するデュルクハイムの所論は日本の場合にも原理的に共通たるべきである。先づ『全職域に於ける民族意識の更新を目指した大

規模な教育事業』が行はれ、それを彈機として始めて『文化總力の再編制』は成就せられ得る、この順序——その顚倒は誤謬であり失敗である——に於いて行ふといふことが、眞の國民精神總動員運動の方途でなければならない。（『文化』概念の根源的綜合的意義に就ては拙著『學術維新』七五五頁以下參照）

日本に於いては明治維新に於いて政治改革は本來の民族精神の復興によつて成就せられ、高度廣義政治力の發動の基準は『君民一體』『一億一心』の具現として行はれ得る如くカンナガラに帝國憲法の條章に昭示せられてゐる。その具現が妨げられてゐるのは一つに教育學術上の思想的誤謬缺陷によるのである。大政翼賛會は憲法の條章に基きその眞精神を發揚することによつて全國民の職域奉公臣道實踐を徹底せしむると新に宣言した。政府が眞に承詔必謹以つて之を實現せむとする場合これを妨ぐる政治的勢力のあり得べき筈はないのである。故に問題は現日本にあつては唯一つに國民精神總動員運動の徹底如何に存する。それ故翼賛會の『精動』化を忌避せむとする如きは、本來眞の『精動』の何たるやを解せず、現日本の政治的情勢と思想文化的實狀とに對する正しき認識を缺いてゐるためで、それは然しながら首相大臣の思想批判力、高度精神力の有無の問題である。

ヒットラー總統は『マイン・カムプ』のうちに前歐洲大戰に於ける英國の宣傳の威力を回顧して

『宣傳なるものは武器以上でもなければ、それ以下でもない——もし宣傳なるものゝ性質を眞に會得した人の手にかゝつたら、實に恐るべき武器である』

『かくて英國人は、この武器が引續き大衆に對して使用し得るのみならず、いくら費用をかけてもその費用ぐらゐ充分に償つて餘りある程價値あるものであることをはつきりと悟つた。』

といひ、之に對する自國の宣傳戰の無力を悲歎して

『宣傳が英國においては第一級の武器として利用されたのに反して、わが國においては失業政治家の飯の種としてか、或はせいぜい內氣な英雄達の部屋代稼ぎとして利用されたに過ぎなかつた。結局われにおいてはその效果は零に等しかつたのである。』（原著一九三—二〇四頁參照）

といつたのであるが、今日はそれと全く正反對の事實を示しつゝある。思想戰の威力を敗戰に於いて痛感し、高度精神力を發揮して先づ徹底的に『國民の再教育』を斷行して國內改革を成就し、以つて『世界觀の戰』を世界史的變革に實現しつゝある。これに比すれば日本の『精動』は實に『いくら費用をかけても』『その效果は零に等しかつた』のであつた。大情報局から更に翼賛會をまで新設しても帝國大學の反國體學風と大新聞大雜誌の亞流無氣力風潮とを寸毫も改革し得なかつた政府當局者の思想的無力昏迷が『政治の貧困』の根本原因で、この狀態を打開することが現下の根本課題である。

かくして高度政治力とはその眞義に於いて高度思想力、高度精神力の謂でなければならない。自然

科學とその技術應用との現代文化と國防とに於ける强大なる作用は何人も之を承認し要請する。自然科學の理論應用をも含めて、産業文化と政治國防との全領域を統綜する現代俊傑の學としての綜合精神科學、哲學的世界觀の威力を發揮するものこそ高度思想力精神力であり、高度政治力とはその別名に外ならぬのである。

現代の日本精神は自然科學を要する。而して世界文化史上における、世界現勢における日本を確實に認識し、その進路を正しく指標し拓開するためには、單に大和魂・日本精神といふものではなく、『之ヲ古今ノ史實ニ稽ヘ之ヲ中外ノ事勢ニ鑑ミ其ノ思索ヲ精ニシ』て始めて得らるゝところの日本精神科學を要するのである。

註　三井甲之氏『明治大皇御集研究』拙著『學術維新』及び本書一六九頁以下參照

第三章　人間性の心理と哲理

一、あるがまゝの自然と人生

明治天皇御製

岩

天地のなしのまゝなるいはがねの姿はことにおもしろきかな

寄道述懐

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道

皇祖の神勅のまに〳〵日本國體が『皇運』として天壌無窮であるのは『天地のなしのまゝなる』カンナガラノミチであるからである。『秋の野の千草の花に比ぶれば染めなす色は限ありけり』とも述懐せさせ給ひし大御歌に、人爲の知慮分別努力の限界を確認すべきである。『天工を奪ふ』といふ如きは形容に外ならず、人爲としての文化活動は『天地の化育に賛する』に過ぎない。自然はたゞ從ふこ

とによつてのみ支配し得る。自然科學の實證的精神とはこの謂である。精神科學も亦、經驗科學としてその原理法則はあくまでも人間性とその歴史的開展、實人生そのものゝうちに求めねばならぬ。

吉田松陰の至誠純忠は『至誠不動兮自古未之有、人宜立志兮聖賢敢追陪』といふ松洞描くところの自像への賛に、また僧默霖との往復書簡中の『一誠感兆人』の語にも敬仰せしめらるゝのであるが、われらはこの松陰がまた同時に『情ノ至極スル所、理モ亦至極ス』『人情ハ愚ヲ貴ブ』といひ、かの留魂錄の最後に書きつけた連作歌の一首に

愚なるわれをも友とめつ人はわかとも友とめてよ人々

と歌つた人生の愚惡痛感の態度を忘るゝことは出來ない。この松陰が唯一の『先師』と仰いだ山鹿素行が、日本義士傳の歴巻として日本國民性の至純なる一表現たる赤穗義士の指導鍊成者であつたこと、また乃木大將がこの一系の精神的傳統の繼承體現者であつたことは周知の事實であるが、素行はまた今日臣民規律の根本標語となつた『承詔必謹』の日本『臣道』の第一の思想的確立者たる聖德太子を『上古に聖德太子ひとり異朝を貴ばず、本朝の本朝たることを知れり』と敬仰して、日本精神史の正系傳統に列位するものである。この素行は『謫居童問』中に

『欲ハ情ノ發而感レ外ワザナリ、コノ心ナキトキハ人ニ非ズ、凡ソ知識アルモノ皆欲心アリ、コトニ人ノ知ハ萬物ニ過グルヲ以テソノ欲心モ又萬物ニコユ、此ノ欲心アルヨリ聖人ノ道ニモ可レ至、更ニ欲心ヲキラフモノニ非ズ、人ノ心皆好レ利惡レ害ノ二ツアリ、是ヲ好惡ノ心ト云、コノ心ニタヨリテ敎ヲ立テ、ツイニ聖人ノ極ヲノベ玉フ、大學ニ好二好色一惡二惡臭一ヲ誠意ノ章ニヒイテ、人ノ心ノ好惡天下一ナルコトヲイヘルモ此ノユヘナリ、コノ利害ノ心アラザレバ死灰稿木ニシテ人ニ非ズ、人情ハ古今コトナラズ、四海トモニ同ジ、故ニ孟子性ノアトヲ論ジテ、以レ利爲レ本トイヘリ、唯其利ヲ私シテ惑フガユヘニ是ヲ戒シメ、人必ス利ニ過ルヲ以テ聖人罕ニノ玉フ也、當時ノ學者ヤヽモスレバ利害ノ心ナリトテ、此ノ心ヲ絶セントスルコト尤モアヤマレリ、皆此ノ知ヲキハメザルユヘノ惑ナリ』

といひ、また

『サレバ古ノ聖賢、人ノ欲ヲ節スルノミニシテ此欲ヲ止メコレヲ絶スルノ敎アラズ、是欲ハ人ノ性情ノ動テ物ニ感ズル處ニシテ、非レ無レ之ヲ以テナリ、異端ノ敎ハ過テコレヲ斷ズルニ及ブ、コレ身ニコヽロミ庶人ニコヽロムル處アラザルユヘナリ、聖人ノ學豈シカランヤ、唯ツマビラカニコレヲ盡スニアルノミ也、今天下ノ人情ヲ以テハカルニ、人ノ性以レ利本トセザルハナシ、利ヲ本トスルガユヘニ此道立テ行ハレ、君君タリ臣臣タリ、若此利心ヲ失却セバ君臣上下ノ道タヽズ、善惡邪正ワキマフル人ナク、天地忽ニクツガヘリ、日月忽ニ地ニ落べシ、四夷ハ利ノ小ヲ事トシ中國ハ利ノ極ヲ事トシ、コトゴトク此利ニヨツテ萬物立、萬事ヲコナハルヽ也、學者只其實ヲシラズ、其知ヲキハメザルユヘニ、此惑アリトシルベキ也』

といひ、『人ノ情ハ愛惡ノミ』といつて、この人情の自然より發してその極を盡す『已ムヲ得ザルノ

誠』を說いた。ヒユーマニズムといふならばこれこそ眞のヒユーマニズムで、素行が『異端』と拒斥したものは、御製に『世の人のまことの道』を說かせ給うて、人生法則を人生以外に即ち『白雲のよそに求むる』古來の宗教哲學的迷妄を誡めさせ給うたものと同じき非科學思想のことである。『學ハヒキク近クタシカニ跡アル處ヨリ此ヲツトムルヲ以テ本トス』といつた素行の爲學精神こそ實に現代科學の勝義の實證的精神で、眞の教學は之を『身ニコヽロミ庶人ニコヽロムル處』に成立すべきを說いた人生體驗、歷史的社會的生活に密着した眞の實證的研究方法に注目して、この素行が

『今天下ノ人情ヲ以テハカルニ、人ノ性以レ利本トセザルハナシ、利ヲ本トスルガユヘニ此道立テ行ハレ、君々タリ臣々タリ、若シ此利心ヲ失却セバ、君臣上下ノ道タタズ、善惡邪正ワキマフル人ナク、天地忽ニクツガヘリ、日月忽ニ地ニ落ツベシ』

とまで極言した人性論の深義を三思熟考すべきである。（次節以下及び第五章『諸文化價値の序列體系』參照）

二、人間性の根源的反省——宗教心理學

若しも人間各個人が日常生活に於いて現に容易に『滅私奉公』を行じ得るものであつたならば、元來人間社會には政治や法律はその發生の必要も理由もなかつたのである。道德や宗教も亦、實に人が容易に滅私奉公を行じ得ざるところにこそ、人性自然の社會的要求、人心の機微から生れて歷史的に變遷發達し來つたものであり、藝術の人生價値もかくの如き實人生をさながらに表現する所にこそ存するのである。

いま現に人類最高の文化發達を誇稱しつゝある東西諸民族國家の間に、全世界を震憾する痛ましき大戰爭が『神意』を問ひ『人道』の名に於いて、已むことを得ずして戰はれつゝある眼前の事實は、それを誘發した一切の歷史的事情の出自たる人間性そのものゝ問題に遡つて、根源的に反省考察せらるべきである。

明治天皇御製

をりにふれて

わが心われとをり〳〵かへりみよしらず〳〵も迷ふことあり

現人神と仰ぎまつる天皇御自ら畏くも『知らず〳〵も迷ふことあり』と述懷させ給うたのである。『和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す』に始まる聖德太子十七條憲法第一の『和』の原理は實に

『人皆黨有り、亦達れる者少し、是を以て或は君父に順はず、乍隣里に違ふ』

といふ、あるがまゝの人間性の痛感、人生事實の確認の上に說かれてゐることを思はねばならぬ。『滅

私奉公』の出典と誤解せらるゝ十七條憲法の原文は『背私向公』で、『滅私』といふ論理主義的極端表現は、人心洞察の達者たる聖賢の言葉には見出されぬものである。

かくして『承詔必謹』『君言臣承』の日本臣道は、同じく聖徳太子憲法十七條の第三に宣示せられたところであるが、第十に曰く

『忿を絕ち、瞋を棄てゝ、人の違ふを怒らざれ、人皆心有り、心各執ること有り。彼是すれば則ち我非する。我是すれば則ち彼非する。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理、詎か能く定む可き、相共に賢愚なること、鐶の端无きが如し。是を以て彼の人は瞋ると雖も、還りて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に從ひて同じく擧へ。』

と。我等が一君萬民の日本國體の本義において『共に是れ臣民』たるは、普遍人性的に『我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ』『相共に賢愚なること、鐶の端无きが如』きものたるが故である。『愛憎違順することは、高峯岳山にことならず、有情の邪見熾盛にて、叢林棘刺のごとくなり』と、聳え立つ山嶽のうねりにも非情無心の草木の棘刺にも、愛憎違順、邪見相剋する人間情意の奔騰衝擊を観感した親鸞の言葉は、現下の世界的痛酷動亂をさながら表現せる思ひあらしむるものであるが、これ實に

浄土眞宗に歸すれども　眞實の心はありがたし
虛假不實のわが身にて　淸淨の心もさらになし
惡性さらにやめがたし　こゝろは蛇蝎のごとくなり
修善も雜毒なるゆへに　虛假の行とぞなづけたる

と、悲歎述懷した人生悲惡の深刻痛感から發せられた告白的眞實語であるからである。今日『滅私奉公』といひ、佛敎々義に於いて『無我』を說き、また眞如實相の諦觀より菩提涅槃を勸むる所以のものは生死の間に我執、我慢、私心、私情に苦悶する煩惱熾盛の個體人間の解脫の希求の表現である。然しながら『神の子』と信ぜられたイエスにして、『善き師よ』と呼びかくる弟子に向ひ、『何故われを善きと稱ふるや、一人の外に善きものは無し、卽ち神なり』といつて、その人たることを告白した。イエスの人道精神の根基はこゝに存するので、この人間性の痛感確認を缺いたヒユーマニズムや道德論は僞善の說敎である。

かくして現世、地上の國を厭離して、天國淨土を死後來世に欣求した中世宗敎の迷信はいふまでもないが、法悅の信樂世界が『この世のものにあらず』といはるゝのは、そこに人生の眞實と秘密とが語られてゐることを思はねばならぬのである。踊躍歡喜の法悅境は精神的高揚の瞬間に『ときぐ〵も

ねがへ』といはるゝもので、人間各個人が悉く聖人君子といふ如き理想人格となり、現實の國家社會人類生活に天國淨土といふ如き理想狀態が具現せらるゝことは永久に不可能であり、期待すべくもないのである。

フランス革命やロシヤ革命は、完成的理想社會卽ち『地上天國』實現の迷信が却つて『活地獄』を結果した實例であつた。また國際聯盟の組織において永久平和の希求と努力とを新にした前歐洲大戰の後二十餘年にして現歐洲大戰が激發せられて、永續悲劇が全地球を蔽ひ果てむとしつゝある。人類生活とは永久にかくの如しと痛感し覺悟する悲劇的人生觀こそ、道德宗教藝術の生命原理であり、それが廣義國防總力戰また高度國防體制の完璧を要請する現代の綜合政治學・國家哲學・國防哲學の出自根源でなければならない。これこそ『ものゝあはれ』を知る武士道の眞髓を含蓄するものとして、『義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ』との聖諭に拜する忠節義勇精神の普遍的世界觀原理たると共に、あるがまゝの人間性と與へられたる歷史的條件とを確認して政治經濟政策の企劃遂行に過誤なきを保せしむる精神科學的法則の根基である。

我等の祖先は佛教の攝受に當り、逸早く『日域大乘相應之地』と宣言して、人性の自然に開發進展するカンナガラノミチによつて、出家遁世、煩惱斷絕の小乘佛教を日本化し『煩惱を斷せずして涅槃を得る』大乘佛教を國民實生活の上に生かしむるを得た。親鸞は平安朝時代の理知主義的戒律宗教を打破して、『罪をけしうしなはずして善に轉じなすなり。』『こほりおほきにみずおほし、さはりおほきに德おほし』といふ心理學的人生宗教を西洋の宗教改革よりも三世紀早く宣布したのであつた。七百年前に親鸞が『煩惱』といひ『罪』といつたものは、現代の言葉を以ていへば個人的慾望、私心といふに等しいものである。今日『新體制』と稱しつゝ、個人的慾望、私心を滅却しなければ臣道實踐の職分奉公をなし得ずといふものは、七百年前の小乘佛教的舊思想に逆轉せむとするものである。

今日萬民翼贊の臣道實踐が國民道德の指標原理として明徵にされたことは眞に喜ぶべきことで、『國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも』と詠ませ給ひし大御歌の大御心に基き『銃後も戰場だ！』といふ觀念が標語となるに至つたことも、その一つの現れと見るべきである。然しながら文字通り『滅私奉公』する軍人の場合すらも、その勳功に對しては『君恩枯骨に及ぶ』恩賞が行はるゝのみならず、その遺族に對しても年金や扶助が與へらるゝ所以のものは抑も何を意味するか？　かくして軍人官吏の場合にすらも、その立身出世觀念は絕滅し得べくもないのであつて、國家公共各種の恩賞榮典の制度はこの私利私心によつて動く人情自然の心理を顧慮して立てられてゐるものなることは否定すべくもないのである。

更に進んで考ふれば、敵前に身を曝し『決死』以て一擧に勝敗を決する軍人の臨戰心理と、『生命あつての物種』といはるゝ『物』の生産配給に專念從事する銃後一般産業人の職場心理との間には、そこに大なる相違があることを無視することは出來ない。日本臣民の究極的道德原理は一つであるが之を實踐する環境條件には根本的相違があり、從つてそこに働く人情自然の條件反射的心理法則は異らざるを得ない。實際に於いては『決死』の覺悟と活動とは軍人の場合と雖も臨戰場裡に始めて發揮せらるゝのであつて、銃後の一般職場生活に第一線的戰陣心理を不斷に普く期待することは、內心における憶念としても不自然不可能である。

三、政治道德と經濟の問題

戰爭や政治外交の場合における綜合的國策の立案遂行の當局者は、超利害超打算的見地から判斷し行動すべきはいふまでもないが、かゝる國家目的や民族的理想を實現するための物的需給を整備する所の經濟活動そのものゝ合目的性を判斷する基準は、公益の場合たると私益の場合たるとを問はず均しく『利害』觀念でありまたあらねばならない。若し萬一にも經濟活動そのものが利害觀念を無視した見地から永續的に行はるるでもあらうならば、たとひ政治道德的觀念は正しくとも、所謂『士族の商法』となり、そこに非常の浪費其他の失敗が現はれ、國家財政國民經濟は根柢より破綻し、綜合的國策の遂行そのものが失敗に歸する外なきに至るであらう。

ポリティカル・エコノミー政治經濟と續けていひ、政治は經濟に優位し之を包括するものなることいふまでもないけれども、政治活動とは區別せらるゝ特定の經濟活動の領域の存することは否定すべくもなく、政治が經濟を統制するといふことは、人性の自然から經濟そのものゝうちに働く法則に從ふことによつてのみ合目的的に行はれ得るものなることを確認するを要する。經濟も亦元より人間の精神的活動によつて營まるゝ。然しながら經濟行爲は、政治道德行爲の如き高級の綜合的精神活動とは異り、人間生存のための直接第一次の生理的慾望を充足するためになさるゝ技術的活動部面に屬し人間は個人的にも社會的にも永久にかゝる面を持ち續けざるを得ず、持ち續くるのである。

それ故、こゝに經濟人といふ如きものを假想する謬論はいふまでもないが、斯の意味に於いて人間の經濟的活動は、部分的一時的には兎も角、普遍的永續的には政治や道德を以つて如何ともすべからざる社會生活の特殊領域であつて、そこには政治原則や道德規範とは異り人性第一次の自然に基く經濟特定の法則が行はるゝ。この經濟そのものゝうちに働く特定法則を無視して企畫せらるゝところの政治的あまりに政治的なるまたは道德的あまりに道德的なる經濟政策は必ず失敗に終る。それは科學的知識なきまたはそれに反する星占術や錬金術が迷信誤謬なるが故に失敗すると一般である。それ故

今日の統制經濟や經濟計畫が眞にその所期目的を達成し得るためには、人生の自然に直接出自するが故に古今に通じ中外に亘りて均しく行はるゝところの、經濟そのものに自然固有の法則をあるがまゝに究明することが先決要件で、こゝに經濟學の學的任務がある。

人間の生命活動のうちにも動物のそれと擇ぶなき面のあることは否定出來ない。本能的行爲は衝動的反射的に意志的考慮努力を要せずして行はれる。若しかゝる機能がなかつたとしたならば人間も亦生命を防護保持することは出來ない。これは生命の本能的自働調節作用である。假りに若しかゝる衝動反射行爲をまでも一々有意的計畫的に爲さうとするならば――さういふことは實際に於いては出來るものではなく、否、する必要もない、それが生命の生命たる所以である――自由敏活なる生命の順應活動は出來ず生存に支障を來すことゝなる。有意的計畫的の複雜なる高級の生命活動はかゝる本能的無意的活動ありてこそ、それを低次の基礎として、その上に始めて行はれ得るのである。

これは個人の生命活動に就いていつたのであるが、同樣に人類の綜合的社會生活に於いても亦、諸種の高級なる文化活動や政治軍事的の綜合的計畫活動は、社會生活の低次部面たる經濟活動の領域が成る丈け自働調節的に運營せらるゝことによつてこそ、その所期目的を圓滑無礙に達成し得るのである。それ故今日の如き物資不足の條件下に綜合的國防計畫を國民經濟の部面にも當然及ぼすべき際と雖も、統制計畫を加へ得る範圍または限界が、經濟の部面には存するといふこと、從つてそこに爲すべきところと爲さゞるところが存するといふことを確認しなければならぬ。國民經濟のあらゆる領域即ち生産配給を擧げて全部計畫的に立案指令して行はむとする如きは內臟諸器管の機能や五官の活動をさへも一々意志の命令によつて計畫的に動かさむとするの反生命的不合理に等しい。かくの如きは事實不可能であり、從つて假りに强ひて實行するとすれば、生命意志は局分偏倚化せられて全體の統一的綜合的活動を破壞されることゝなる。我が國に於いて政府が米の生産に多額の補償金や奬勵金を支出せねばならぬことゝなつた如き事例は、今日まで採られ來つた統制經濟の重大なる思想的缺陷即ち非科學性の極みを示唆するもので、政治學並に經濟學の貧困の犧牲であるといはねばならぬ。

精神がはたらいて身體は動くものなることといふまでもないが、この場合と雖も身體そのものゝ活動は身體の法則、即ち物理生理的法則に從つて行はるゝので、心理精神の法則に從ふのではない。心的因果精神的法則は綜合的で、物的因果生理法則はそれに包攝せらるゝ部分的のものではあるけれども而も心的因果精神的法則とは異る固有の特殊性を有するものであることは、物理學、生理學がそれぞれ特殊自然科學として別箇に成立してをり、また心理學は心理學としてそれら自然科學とは異る精神科學の基礎科學として現に成立してゐる事實によつて否定することは出來ない。それ故如何に心理學

を研究しても物理學生理學の法則を闡明することは出來ないので、物理學や生理學は心理學者もまたそれらを別箇に研鑽しなければならぬのである。

その如く廣き精神科學の内部にあつても、政治學や法律學や倫理學とは別に經濟學といふ特殊研究領域が古來存在してゐるといふことは、それら政治、法律、道徳と經濟とが人間社會の綜合的文化活動として有機的内面的不可分關係にあることといふまでもないけれども、恰も人間の五體や内臟諸器管と同樣に、それら各部分がそれ〴〵獨自の形態機能を有してをり、從つて精密に人間の生理作用を理解し疾病治癒の法則を知るためには、全體の關聯を見失つてはならぬけれども、やはりそれら各部分をあるがまゝにそれ〴〵獨自性を有するものとして究明しなければならない。專門醫制度には誤謬があつても、身體各器官の細密の特殊研究とその成果とを無視否認すべくもないのと同樣である。

このことは精神科學諸部門の研究の場合も同樣であつて、『科學の振興』が切實の國家的要求となつてゐる時、その科學は單に自然科學部面のみを意味すべきではなく、『國防國家體制』の完璧を期するためには、綜合的見地からはむしろ精神科學部門の研究が眞にその研究成果を擧ぐることなくしては、斷じてその所期目的を達成することは出來ない。政治新體制のためには政治學が、經濟新體制のためには經濟學が今こそ眞にその本來の學的使命任務を果さねばならぬ時である。

『改造』昭和十六年五月號に『日本經濟の基底』の題下に、東京帝大敎授東畑精一氏、東京商大敎授中山伊知郎氏、同杉本榮氏、高岡高商敎授大熊信行氏、法政大學敎授岸本誠二郎氏何れも經濟學專攻者五人の『研究討議』座談會速記が掲載された。大熊氏の所説は綜合的で示唆に富む思ひ付きはよいが、肝心の經濟學的見地からの焦點が定まらず從つて全體を客觀性を保つて分析綜合する論理が缺けてゐる。この討論は結局中山氏の所論に留めをさゝれた形である。東畑氏も中山氏と大體同じ立場で

「經濟が變つた、と言ふけれども、事實はさうではなくて寧ろ經濟活動の條件が變つた——といふだけの問題であつて、それに色々と形容詞をつけるのは、一寸面白いけれども、經濟の問題そのものは變つてゐないんではないか。」

(圏點著者、以下同じ)

「……全く純粹經濟學の立場に立つ。さうしなければ戰爭經濟といふものは成立たない……」

といひ、中山氏はそれを

「たとへば經濟學が否定されて、新しい、經濟學でない政治經濟學といふやうなものが出來るとは考へない」

「本來條件を離れた、つまり條件なしに考へ得る經濟學といふものは、初めから想定しないです。その意味で現在の經濟學は、戰爭とか、政治の危機とか云ふものと結びついた意味で、その中の經濟の動きを摑へるものでなければならないし、その意味では條件に依つて修正されるといふことをわざ〳〵謳ふ必要はないんではないか……さうい

ふものであつてこそ、初めていろ〳〵なむつかしい問題に耐へ得る本當の經濟學の存立が考へられるわけです。』

といひ、『純粹資本主義』といふより『純粹經濟主義』といふ表現を擇んで

『資本主義と言はれてゐる意味の資本といふものは、本當の資本の經濟性といふものを發揮してゐなかつたといふことが段々明瞭になつて、それをもつと合理的に發揮させるために所謂經濟性といふものを貫かなければならぬといふことに歸すると思ひます。資本ではなくて、經濟自體の在り方が經濟的でなかつた、といふことが自由資本主義社會の問題であつて、純粹資本主義といふやうなものはこれを是正して經濟的なものを貫徹しようとする。……だから利潤も今までの貨幣理念とは何らか違つたものがなければならぬ。企業家も亦違つた意味で、或る修正を受けなければならない。しかし全體を貫いて見れば、それは純粹經濟主義の一つの貫徹といふか、復興といふか、さういふものであつて、資本の在り方の相違にいきなり持つて行くべきものであるまい……。』

といふのは、經濟本來の領域及び經濟學の見地に立つての主張として正しい。從來所謂自由主義資本主義の誤謬または弊害として指摘非難され來つたものは、個人的利得の無顧慮の追求であるが、苟くも第一流の學者思想家としてさういふことを是認し推奬したものは殆どないといつてよい。『見えざる手』の調和を說いたスミスにしても『正義』の支配『國防』の優位を說いてゐるのである。盜人の種子が盡きないやうに、財閥金權の政治支配といふ如き弊害は明白なる人生の事實であるが、野心や人情の弱點に促されて政治や道德の腐敗から行はれたものである。

それ故この問題は政治や道德の面にあるので、司法行政措置と相俟つべき政治や教育の改革によつてのみその弊害の匡正せられ得また匡正せらるべきもので、それは政治教育其他高次の文化領域の指導的地位にあるものゝ責任である。

行政官吏や司法官の腐敗墮落または無爲無能の事實があつたからといつて、官吏制度や法律そのものを國家社會生活から廢止絕滅せよといふものはあるまい、あれば無政府主義者だけである。問題は法制組織の改革、一層根本的には『人』の選擇、特にその思想精神の革新である。

腐敗宗教や頽廢藝術の事實も生命ある眞の宗教や藝術の復興創作をこそ要求すれ、宗教や藝術そのものを廢止せよといふ論理を成立せしむるものではない。その如く從來の經濟が行き詰つたとしてもそこに要請されるものは經濟の廢止ではなくて時代に應じた眞の經濟であらねばならぬ。それが政治道德の頽廢の結果である場合には、正しい政治や眞の道德の復興令活こそが切要である。『純粹經濟主義』の提唱はこの意味で經濟及び經濟學の內部に於いては正しい。警戒し厭離し排擊すべきはその逸脫、歪曲または僭上である。純粹資本主義とはムッソリーニ首相が、『われらは經濟學の言葉を以つて人間の歷史を說明し得べしとなすことを否定する』といひつゝ『資本主義の眞の歷史は今始まりつゝある。』資本主義は單なる壓迫搾取の組織ではない。最も價値あるものを選び、聖志あるものを結

び、個人の責任感をいよ〳〵強く鍛錬し行くべきものである。』（一九二一年六月二十一日伊太利議會に於けるファシスト黨員としての演說）といつた如きものたるべきで、ナチス指導經濟が經濟そのものゝ本質に於いては從來と『原則的に何ら新しき節なし』といつてゐることは後段に論ずる。（本書九三頁以下參照）

四、公益・私益・創造・名譽の心理學

笠信太郎氏は『日本經濟の再編成』中に

『自由主義經濟に於て營利心の作用は認めねばならぬが、營利心そのものは經濟が自由主義的な形態をとる場合の人間の經濟心理に過ぎないものである。』（二四九頁、圏點著者以下同じ）

といつて、營利心は『永遠の人間性』ではないと斷言した。著者はこれを批判する前に、岸信介氏が商工次官當時世界經濟情報社主催座談會でなしたこの點に關する意見を參照せしめよう。曰く――

『利己心とか、營利心とかいふものは、生命あるものが生命を保存する一つの本能的なものから來て居る。それが廣い意味の營利心といふことのやうであります。現在の資本主義の下に於ては、營利心は一言にして金錢とか利益といふものと考へられて居るが、さういふものが唯一の自己保存の形でもないだらうし、又各々自分の創意、イニシアティヴの唯一の原動力でもないだらうと思ひます。』（『新經濟體制を語る』七〇・七一頁）

『吾々がものを完成する、前人が知らないことを俺がしようといふ衝動は一番尊いものであり、人間の本質的なものである。誰もやつたことのないことをやる。例へば前人未踏の山を究めるのも、唯子供らしいことだ、或はそれを新聞に書かれるからといふことでなしに、吾々は常に他人が登つたことのない山頂に登りたいといふ慾がある。ものを完成する、創造するといふ慾があると思ふ、それをうんと育てるやうな教育なり、社會制度なり、政治組織なり、産業組織なりがつくられることが必要だと思ふ。……日本の教育はさういふ教育をして居ないし、日本の社會制度もさういふことになつて居ないし、産業組織もさうなつて居ないでせう。だからさういふ社會制度をつくりさういふ産業組織をつくり、さういふ教育をすることが必要です。さういふ前人未踏のものを究めようといふ、機運を助長するやうにしなければならぬ。それを利潤にのみ結付けて、それが出來ぬといふことが從來の資本主義自由主義の考方ではないかと思ふ。』（同上七一・七二頁）

と。尙ほ同じ座談會に於いて法政大學經濟學部教授高木友三郎氏は次の如くいつてゐる。

『……一つは、今は適材適所になつて居ないので創造が出てない。嫌や〳〵やつて居る。商人でも本當は嫌やだけれども、先祖からやつて居るのでやつて居るといふ人も澤山ある。だから偶々さういふ者が適材適所に行けば、創造慾が出ることが餘程違ふ。これは小學校の教育が大切で、性格檢査メンタルテストをやつて、お前はかういふ所に行けといふやうにやつてやる。その次には名譽心だ。成功した者にはヒューラーといふ稱號を與へてやる。それから代議士にする。又勞働者に勳章をやる。一方ヒューラーには勳一等をやる。さういふことになれば私はよく行くと思ふ。……一體營利心なんといふものは德川時代まではなかつた。貨幣が出てから稍ありますが、その前にな

ればない。これは貨幣と共に起つた慾ですから、暫くの間に消えてしまふ。私はさう思ふ。昔あつたものではない途中で出來た本能だ。』（同上、七四・七五頁）

苟くも經濟學博士の學位所有者がかういふ幼稚な外面論を得意になつて吐き散らすに至つては、眞面目に批評するのも躊躇せらるゝ程である。營利心といふものは德川時代まではなかつた、昔からあつたものではない、『途中で出來た本能だ』といふ如きは、用語そのものからして思想的自殺を示すもので、――生物學も、社會學も、民族心理學も、道德史もまるで無學といふ外はない。『本能』といふものは超歷史的な生物學的概念であつて、歷史の途中で出來るものでなければこそ本能（生物本有の能力）と呼ばるゝものなることはいふまでもない。本能といふ概念すら知らないやうなものが經濟學博士とは驚くべきことである。メンタルテストで適材適所を定めるといふ如きも、現代心理學の低位瑣末主義では問題にならない。最近に於ける工科卒業生の職場配當に對する當事者の不平不滿の如きに徵するまでもなく、明治以來今日に至るまでの一般官吏任用の不適正、官吏執務の非能率等々官僚主義のあらゆる弊害に思を致したならば、『天下億兆一人も其處を得ざる時は皆 朕か罪なれは』との億兆安撫の維新の勅語に拜する大御心の顯現――適材適所それ〳〵人が所を得るといふことは、啻に日本の場合だけではなく、如何なる社會如何なる時代に於いても如何に至難のことであるかゞ首肯せらるゝであらう。成功したものにはヒューラーの稱號を與へ、代議士にもする、勞働者にも勳章をやるだのと子供瞞論までが飛び出すが、勞働者や農民が勳章を貰はねば働かぬやうになつたら、それこそ末世ではないか。『途中で出來た本能だ』といつて營利心を容易に絕滅し得ると信ずる程の者が、今日新しく勞働者や農民に名譽心を增長させる制度を創設するとは、舊體制も甚しい月次陳腐である。位階勳等恩給等の現行官吏報償制度そのものは可とするもそれを充たす思想風潮の缺陷や弊害に全く無反省無感覺の態度を以てその形式主義官僚主義的弊風に墮し易き國家的報償制度を勞働者農民にまで擴大せむとする、著者はそのこと自體に反對するのではないが、その無反省も甚しき舊體制的官尊民卑心理を問題とするのである。すべてこれらは勳章や年金など貰はずとも、默して孜々として勤勞に服する煩惱熾盛愚痴無智の名も無き民のうちにも生くる愛國心尊皇心を侮辱するもので、この官僚主義的機構制度萬能論の唯物的功利主義思想こそ笠氏、岸氏、高木氏等が排擊するところの所謂『經濟心理』『營利心』の總名通稱に外ならない。『新しき經濟倫理』などいふのが、素質的に所謂自由主義マルクス主義を一貫する唯物論の言語魔術に外ならぬことを思ふべきである。

こゝに著者は岸氏の所論に向はう。前記岸氏の引用文中、著者は先に『前人未踏のものを究める』といふ句に圈點を附して注意しておいたが、それは、笠氏がその常任幹事として重要メンバーであつ

た昭和研究會發行の『新日本の思想原理』の序文に

『……この課題は前人未踏の領域に屬し、決して容易な業ではないのである。』

といひ、また同會發行の別冊『協同主義の哲學的基礎』のうちには

『新秩序建設の根據たり得べき全く新しい哲學、世界觀の確立こそ、我々日本人の責務である。それはまさに協同主義の原理に立つものでなければならぬ。』

といつてをる――この『前人未踏の領域』『全く新しい哲學、世界觀』云々といふ語法思想法と、岸氏のそれとが符節を合する觀を呈してゐるからである。昭和研究會のメムバーのうちには岸氏の名は見えない。また岸氏の思想趨向に昭和研究會の影響がなかつたとしても、笠氏の所論と、それに因んで引用した岸氏の人性論と經濟新體制論とが根柢に於いて同一の思想趨向を示してゐることは否定すべからざる事實である。（山本勝市氏著『笠信太郎氏「日本經濟の再編成」批判』參照）

こゝに昭和研究會の委員の一人であつた京都帝國大學教授谷口吉彥氏が『新體制の理論』中に

『世界歷史の轉換は、この行き詰つた近世の世界舊體制を超克して、全く新たな根本理念の上に、新たな世界觀體制を確立するにある。』（序）

『世界史の轉換といふ社會的根據の上に、全く新たな範疇の文化を創造せんとする』（八一頁）

といふ如く『全く新たな』を反覆力説して

『公益は私益に優先するといはれるドイツの新體制は、まだまだ私益を是認し、公益と矛盾せざる範圍の私益を認める點で、日本の新體制は、私益に代ふるに公益をもつてし、公益主義の經濟體制を確立するにある。』（一四七頁）

と辯證法的論理の推及を恣にして『第三の段階』といふものを持出し『非營利の上に立つた統制經濟』といふ言葉をまで用ふる、雲をつかむ如き空虛の暴論を弄ぶに至つてゐることを指摘したい。若しもかういふことが實人生に可能だとするならば、官吏の俸給は大臣も給仕も一律平等化し恩給制度と共に位階勳等の如き恩賞制度も全部撤廢すべく、谷口氏は請ふ隗より始めて之を自身率先躬行して然る後にいふべきである。谷口氏個人は假りに之をなしたとしても、かゝる官吏制度が果して實際の國家社會にとつて効果的合目的的なりや否やを一寸反省したゞけでも、谷口氏の思想法が如何に愚劣のものであるかは知られよう。官吏には國家により生活の保障が退職後まであり、加之各種の名譽までが與へられる。然るに一般商工業者にはそれらの何物もない、こゝに營利財產蓄積が許さるべき心理的社會的理由がある。そこに弊害が生ずるといつて株式會社を『公社』化すべしといふ柴田敬氏の主張の如きも、無責任非能率等、官僚主義のあらゆる弊害を一顧もしない谷口氏と同素質のものである。

かくして岸氏が『前人が知らないことを俺がしよう。』『誰もやつたことのないことをやる。』といふ

個人の努力衝動や創造慾そのものは心理的に生命感生命意志の發動として、登山家が處女峰を究めるとか科學者や發明家が實驗室的研究や考案に耽るとかいふ如き場合ならば、たとひ如何なる危險を伴つても個人的範圍に留るからよいが、綜合的人生、殊に國家社會生活に『全く新しい』『誰もやつたことのない』『前人が知らないことを俺がしよう』といふ如き無經驗、無謀の新奇計畫を試行せむとする如き態度は、精神科學的にいつて全く非科學的極まる、『ハムマアを以て哲學する』と形容せらるゝ如き危險此上もなき妄想暴擧で、それは『革命』の心理以外の何物でもない。これは青少年學徒に賜りたる勅語に『古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑑ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長シ』と詔はせたる聖諭の御精神に全く背反するものといはねばならない。『計畫經濟』を善意に解すれば、古今の歷史と中外の事勢とに稽鑑して、始めて『計畫』的といふを許されよう。さうではなく『前人未踏の領域』に『全く新しい』ことを企つるといふのは、『無計畫』そのものである。かくして若しも各個人悉くに對し營利心の代りに創造慾を起さしむるといふことになれば、社會の各個人全部が一人一人かくの如き無鐵砲の我意我見の主張者實行者となり、創造、生產、蓄積の代りに浪費、贅澤、對立、抗爭、破壞が常態となり、一億一心の代りに國家社會はアナーキーと化するであらう。

そこまで極端の推論は差し控へても、『前人が知らないことを俺がしよう』といふ如き態度は、個人的功名心事業慾を表白したもので、たとひその目的が公共的のものに向つてゐる場合にしても『俺が』といふ『私心』が前面に主導優勢的に露出してゐることを否定すべくもない。名譽心といつてもそれはやはり私慾私心の發動に外ならず、『名利』と續けて『道義』的見地からは非議せらるゝものたる點に於いては營利心と兄弟關係にある不可分のもので、名譽心が營利心と同樣に浮薄なる人情として道德的頹廢の動機となるものであることは今更いふまでもない。先に『賣勳』事件までが暴露せられたことを思ふべく、親鸞は七百年前『愚禿悲歎述懐』のうちに

僧ぞ法師のその御名は　たうときことゝきゝしかど
提婆五邪の法に似て　いやしきものになづけたり

と表現したのである。勿論名にも『千載之名』もあれば、利にも『國家的利益』や『大利無上』といふ宗教的觀念もある。それ故功名心名譽慾を容認する心理學は、當然功利心營利心をも容認しなければならぬ筈である。心理學的にいへば、公益を思ふ心は私益を求むる心以外の機能ではなく、同一の精神作用が比較的狹き範圍ではたらけば私益心となり、廣き範圍ではたらけば公益心となるに外ならぬ。これは綜合的にいつても、利己心以外に公共心といふ別個の精神作用といふものは人間には存在しない。若しも文字通り私心を滅却したならば、公共心といふものも人間には臺無しになるといふこ

とが心理學的事實である。かくして私心私情を排するといふならば、戀愛も友情も親子の愛敬も排せられねばならぬが、『忠臣は孝子の門に出づ』といふ諺に公私會通の人情自然の心理を確認すべきである。それ故聖德太子の十七條憲法にも『背私向公』といつて『滅私奉公』といふ如き言葉はない。前者は人心が狹き私になづむを誡めて廣き公に向ふべきを敎へ給うたものとして一般道德心理の表現であるが、後者は一旦緩急ある場合の非常の覺悟の形容的表現であることを確認すべきである。

『一寸の蟲にも五分の魂』といひ、『匹夫も志を奪ふ可らず』といひ、また『人生意氣に感ず』ともいふ。こゝに草木國土一切成佛、一切衆生悉有佛性といふ佛教哲學の菩提心・本願心を實人生に味ふ見地から、『私益』の全體を擧げて『公益』に融化する歡喜力行・感激法悅の世界を渙發現成するといふことが、高度國防國家體制の完璧を期する眞實の國民精神總動員運動である。（第五章參照）

第四章　經濟の不易原理と新體制

一、ドイツの戰時指導經濟の根本觀念

ドイチエ・アルゲマイネ・ツァイツング一九四〇年十二月三十一日發行の附錄 Soll und Haben『一九四〇年ドイツ戰時經濟』號の『企業家の創意』Unternehmerinisiative と題する劈頭論文に於いて、ドイツ經濟省次官ラントフリートは、先づ第一に强大なる軍事的成果を收めた過去一年の戰時中に、ドイツの經濟は戰爭によつて制限され困難にされた事情の下に於ても如何に偉大なる成果を擧げ得るかを改めて實證した、それは赫々たる戰勝を博したドイツの國防力に最優秀の武器を供給し、更に將來のあらゆる軍需を確實に充足し得るものたるのみならず、また國民生活必需品や對外貿易に於いても大なる生產擴充を來したといひ、主題の『企業家の創意』に就いて、國民經濟における企業者の創意は標語的に表現すれば『方向決定の創意』から『實行の創意』に變つたことを說いて

『國民經濟的に見れば、從來方向の決定と實行とを兼ねてをつた企業者の創意はそれに依つて分割せられたのであるから制限されるのはいふまでもない。けれども個々の企業者から見れば、實際に於いては原則的に何等新しいこ

いはない（grundsätzlich nichts neues）。何となれば自由主義經濟に於いても亦、一般の企業者は單に全く具體的な投資及び生産の計劃の實施をなしてをつたので、ある一つの計劃が實現されうるものであるかどうかは、共際全體の變動即ち自由主義時代には景氣に依存してをつたからである。』（圏點著者）

といひ、所謂自由主義經濟の場合にも、企業家は決して自由無制約であつた譯ではない、即ち國際國内の景氣變動に順應せねばならず、そこに失敗破産の危險を自己の責任に於いて負はねばならなかつた。いまドイツの現在に於いてはかゝる國際國内の景氣變動は消滅し、それに代るものとして國家の總括的な經濟指導が行はれてゐるので、企業家はこれに順應すればよい。その限りに於いて企業者は國家の經濟指導のために制限されてゐると感ずる必要はない、創意が制限されるのは各種の法令によつてゞあるが、經濟指導機構の單純化やその方法の改善は國家の利益であるから、國家意志は企業家を强制するよりも『その創造的協力を鼓舞する』のであるといひ

『指導經濟における役割を理解する企業家には、ナチス經濟法は創造的活動の異常なる可能性を呈供する。眞の企業者は自己の才能を經營競爭に試鍊する以外の何物をも要求しない。……必要の場合には權力的獨占的な有利の地位を占めてゐる一部企業團側の反對を押し切つても、眞正なる能率競爭を保護するといふことが吾々の經濟政策の最重要なる目標である。』（圏點原文のまゝ）

と『眞正なる實績競爭』を積極的に奬勵することを明言してゐる。ラントフリートは更に進んで、尙

ほまた國民社會主義は他の意味に於いても責任を重んずる企業者の創造的主動力に對しては自由の天地を與ふるといひ、共産主義的の私有財産否認・階級鬪爭の思想運動を禁絶せることを述べて

『企業者は自己の活動の基礎たる私有財産制度に危險を感じてをつた、またその努力の重要動機たる利潤追求を不道德的なるもの破壞的なるものと攻撃されて來た。國民社會主義はこの兩者、すなはち私有財産制度と誇るべき自己自身の才能に基く利己的ならざる利潤追求とを必要にして正當なるものとして明かに承認して來た ……』

『かくして企業者の創造的主動力はドイツ經濟の潜勢力の一部である。我々は之をわが國の國防力への貢獻に於いてもこの挑まれた戰爭の結果、即ち勝利に對する一つの保障と見るものである。』（圏點著者）

と結んでゐるのは、その綜合的政治指導の下に企業實務家を國家經濟の指導者に任用して存分に才幹を揮はしめ、實際に於いて成功を收めたが故であらう。

われらは翻つていまわが政府當局も告白せざるを得なかつた戰時統制經濟の失敗から（「週報」昭和十五年十二月二十五日號所載　企畫院『經濟新體制について』參照）最近の經濟新體制要綱決定に當つて捲き起された朝野の紛糾、更にそれに關する第七十六議會に於ける論議に至る經緯を、學界思想界の一般風潮と結合する時、經濟政策上の失敗が思想法世界觀上の根本的誤謬に因由するものなることを確認せざるを得ない。ナチス興國の力源が古代ゲルマン民族の神話的精神の復活に存することは

いまいふまでもなく、この人性の自然に隨順するナチス精神に基く政治原理は、經濟政策に於いても『原則的に何等新しきものなし』といふ如く、經濟自然の心理的歷史法則――『利潤追求』と『私有財產制度』とを明確に容認し進んで之を保護活用する態度を示し、マルクス共產主義的經濟を意味する『計畫經濟』プランウィルトシャフトといふ如き用語は厭離されてゐることを注意したい。

尙ほライプチッヒ大學敎授エルンスト・ルドルフ・フーバーは『國家と經濟』と題する論稿に於いて、マーカンティリズム以來の歷史的批判的敍述をなしたる後、ナチス指導經濟の原理を『經濟の自治』から說き起し、『社會主義的思考は勞働のうちに一切の經濟的價値の根源を認識する』といつて一方に於いては勞働の民族國家に對する義務と權利とを强調しつゝ進んで

『勞働が勞働秩序の核心部分であるやうに、所有權は企業秩序の核心制度である。所有權の承認によつてドイツ社會主義はマルクス主義的ボルシエヴイスムス的敎說と區別せられる。後者にとつては所有權は竊盜であり、それ故に「生產手段を社會へ引渡すこと」によつて所有權を否定せんとする。ドイツ社會主義は、これとは反對に、所有權を人間的經濟的生活の基本形態として承認する。』(『獨逸國家大系』第三卷、二六頁)

とやうに、ドイツ社會主義がマルクス共產主義とは異ること、所有權が『人間的經濟的生活の基本形態』『企業秩序の核心制度』なることを積極的に明言してゐるが、この點ドイツ經濟會議所會頭アルベルト・ピーツチェ及びドイツ經濟會議所々員フェルヂナント・グリユニッヒの共同執筆にかゝる、『經濟指導の基礎』のうちにもソ聯が實驗失敗したる共產主義的計畫經濟の缺陷を批判して

『計畫經濟に次の如き大きな缺陷のあることは周知の通りである。即ち、いかなる創意も漸次根絕し――確かに生存や、販路は保障されてゐるやうであるが――、從つて進步を斷念し、生活鬪爭を斷念することになり、しかも、文化水準の高い八〇〇〇萬の國民に對して生產と消費の集中的組織を實際において遂行することが、結局成就するはずのない任務であることは、全然別としても、文化の後退が漸次事實となつて現はれるのである。』(『新獨逸國家大系』第十卷、八八頁)

『以上において試みた經濟指導に關する敍述を終るに當つて、經濟に對する國家の、從前に比して原則的に新らしい地位を特に指摘して置く。即ち、國家は、相手國と、財貨を交換するために種々の協定を締結して、その國から資金を呼び入れるが如き經濟成員ではなく、むしろ經濟團體に對して保護、調停、法的統制をすべき立場にある。それゆゑに國家は、健全な營利心が經濟の促進力を伸張させるところの活動範圍の保護の下に、公正な所得を圖るものである。また、國家はあらゆる經濟部門における就業の機會均等を保障し、貯蓄者にその拂込金に對する確實性を與へるところの軌道において、消費と貯蓄を指導する。國家はあらゆる經濟事物における恒久性を顧慮してゐる。』(同上九一頁)

といつてゐる如きも、著者の以上の見地に通ふものである。

また獨逸經濟省前次官バンゲも『貨幣の本質とその將來――金本位制の排撃と勤勞本位購買力貨幣制の樹立』と題する論文中に

『個々の財貨の交換價値はその時々の生産と販賣の狀態により定まる。卽ち個々の財貨相互間に於ける價格の變動は、その原因が財貨の側にのみあり、決して貨幣の側にあるのではない……右の如く價格は全く經濟內部に於て且つ經濟內の原因によつてのみ決せられるものである。之に反して一般の物價水準は決して經濟を原因として決せられるものではない。物價水準の變動は一に貨幣の側からのみ生ずる。』（鐵十字社發行『世界新經濟秩序の建設と樞軸民族の使命』一三四―一三五頁）

といひ、また同主旨を次の如く換言してゐる。

『今まで述べ來つたところにより旣に明かである如く、一方に於て財貨相互間の交換價値卽ち個々の價格の構成に對しては外的な强制力により不自然な影響を與へてはならぬ。換言すれば國家は暴利とか投機的な物價吊り上げとか賣り崩しとかの場合以外には經濟內に於けるこの交換價値の形成經過に干渉してはならぬ。之と共に他方に於ては一般的物價水準の構成は全然國家の任務であり然も國家の最も重要な任務の一つである。何となれば經濟そのものはこの物價水準を作り出すことが出來ず、それは唯交換手段（貨幣）の量によつてのみ構成されるものであり、然して此の交換手段たる貨幣は國家がその發行を獨占し國家の手によつてのみ、之を經濟內に供給し取引に提供されるのであるからである。』（一三六―一三七頁）

これは個々の物價の高低は取引市場の自然に任せて、政府は共際通貨政策によつて全體としての物價水準を決定する方法に於いて指導的役割を果すといふもので、前記經濟省次官ラントフリートがナチス指導經濟の根本觀念につき『原則的に新しき何物もなし』といつたことを分析的具體的に示したものである。

然るに我が國最近の計畫經濟論乃至經濟新體制論にあつては――政府當局の方針は閣議や議會論議によつて正路に向ふことが示されたが――過去二十年來のマルクス共産主義思想の流行の餘殃の然らしむるところ、人民戰線戰術により國體隨順の擬裝言辭を弄しナチス指導者原理には無批判に追從しながらも、『前人未踏の領域』を開拓するとか、『第三秩序』または『第三の段階』といふ辯證法的圖式を用ひて『公益優先の精神』を說くに利潤廢止、私有財産制否認を以つてし、かくして『非營利』主義に立つ經濟新體制の『歷史的必然』論から國防國家體制確立、事變解決聖戰完遂、東亞新秩序共榮圈・世界新秩序建設が自己法則の貫徹として顯現するといふ。これは正眞正銘のマルクス主義唯物辯證法・唯物史觀の現事態に對する公式適用である。『昭和研究會の言語魔術』を照破した著者はいまこのマルクス主義亡靈別派の妄想を『經濟新體制論の錬金術』と名けて之に分析批判を加へ、以つて著者らが志す學術維新の契機たらしめむとするのである。

二、レニンの共産主義實驗失敗告白

著者はこゝに前記の如き資本主義呪詛論に對して、『マルクスの學説は正しきが故に全能なり』と盲信して史上無比の大犧牲を以つて共産主義革命を强行したレニンの失敗告白を紹介して反省を促さう。一九二一年十二月ロシア革命勃發後滿四年の冬モスコーに開かれた第九回全露ソヴエト大會に於ける『ソヴエト・ロシアの新經濟政策』と題する演説中に、レニンは

『吾々は自己の敗北と缺陷とを認めることを怖れない場合にのみ、どんなに苦しいものであつても眞理を公然と直視する場合にのみ、勝利を學ぶだらう。』

『最初の方の領域、卽ち政治上および軍事上の領域での吾々の功績は當然誇つて差支へない。それは歴史の中に、全世界に對する貢獻として殘されてをり、この業績はなほあらゆる領域において發揮されるだらう。だが經濟上の領域では吾々は、玆に私が報告の任に當つてゐるところの年度において、新經濟政策の道を踏み出したにすぎぬ。この點では吾々は今漸く學び始めてゐるのであつて、こゝでは比較にならぬほどの多くの失敗を犯してゐる。……これは共産主義者にとつては極めて氣持の良くない發見である。かういふ發見は殊の外氣持の良くないものであり得るし、そしてまた疑もなく氣持の良くないものである。』（『レーニン著作集』第一卷『新經濟政策』三三四頁參照）

社會科學としてのマルクス共産主義の全理論と實際政策とがその獨自の經濟學説の上に立てられてゐることはいふまでもない。このマルクス經濟學説が唯一絶對の普遍妥當的眞理であればこそ、その全理論と實際運動とは鐵の如き必然性を以つて統體一系をなし近代社會の自然史的行程に實効實績を具現すると約束された。『マルクスの學説は正しきが故に全能なり』とはこの謂であつた。然るにレニンが彼の體驗したるロシア革命に於いて、政治上及び軍事上の領域においては成功したが、『經濟上の領域では比較にならぬほどの失敗を犯した』と正直に告白せねばならなかつたといふことは、マルクス主義理論にとつて學術的にその致命傷であつた。これが『共産主義者にとつては極めて……殊の外……疑ひもなく氣持の良くない發見』であつたことは察するに餘りある次第である。更にこの點に就いてのレニンの解説を指摘しよう。

『あらゆる資本主義諸國家に於いては、その無政府狀態にもかゝはらず、また資本主義固有の混亂にもかゝはらず、經濟的な諸計畫の立案に際しては、數十年間の經驗が足場となる。これらの經驗は、資本主義國が略々同一の經濟的構造を有し、特殊なる點に於てのみ異つてゐるにすぎない限り、各資本主義國家はお互ひに比較參考し合ふことが出來る。そしてこの比較から、眞に科學的な法則、明確な法則性と規律性とを導き出すことが出來る。これに反し吾々の計算の場合にはかうした類似したものを持ち合せて居なかつた。……こゝに一つの失敗が、――吾々の全ての活動に固有な失敗が存する。』（一九二一年『ソヴエト・ロシアの現勢』、前掲書八四―參八五頁照）

『有力な資本家的企業の學校を卒業した商業上の事務員は誰でもこれほどの事は遣つてのけるが、責任ある共產黨員の九九%はそれが出來ないといふことも、また初步から學ばねばならぬといふことをも理解せぬ。若し吾々が之を理解せず、若し吾々が初步から學習しないなら、吾々はその全政策の基礎となつてゐるところの經濟上の任務を果し得ないであらう。……けれども罪あるものがあるばかりでなくて、お役所風と不規律と混亂とがあるのだからである。何人も適當に働くことが出來ず、何人もどんなに國家事務を處理してよいかを解しない。』（一九二二年『ロシア革命の五ケ年と世界革命の前途』、前揭書五二二頁參照）

『全く新しい哲學、世界觀』によつて『前人が知らないことを俺がしよう』『誰もやつたことのないことを俺がやる』といふ如き『革命』實驗の致命的失敗危險はかくの如きものである。

註　詳細は拙著『獨露の思想文化とマルクス・レニン主義』及び『學術維新』第一篇參照

曾つてありとあらゆる言葉を以つて、その政治道德的罪惡と共に經濟的『混亂』『虛構』『無政府狀態』を斷定し貶黜し呪詛して已まなかつたところの、彼等の所謂資本主義國家に於いては、それにも拘らず『經濟的な諸計畫の立案に際しては……眞に科學的な法則、明確な法則性と規律性とを導き出すことが出來る』のに、『正しきが故に全能なる』マルクス學の碩學鴻儒の淵叢たるソヴエト・ロシアに於いては、革命四年の經驗を以つてしても猶ほ『吾々の計算の場合にはかうした類似したものを持ち合せてゐなかつた……こゝに一つの失敗が、——吾々の全ての活動に固有な失敗が存する』と、レニンをして告白せしめ、資本主義的經營智能に對する憧憬的言辭をまで吐くの已むなきに至らしめたものは、究極において果して何であつたか？　資本家・勞働者、地主・小作人、資本主義・共產主義とやうにいふ如く、Aに對してその否定概念非Aを抽象的に對立せしめて『止揚』『變革』を實人生に思ふがまゝに成就し得ると妄想する唯物辯證法——實際においては素質的にヘーゲルのそれと擇ぶところなき——概念辯證法の盲信である。この未來豫言の神通力的思想法の篤信者も實際に於いては

『吾々のうち、革命を最初の發端から體驗し、吾々が帝國主義的戰線を切斷した場合の未曾有の困難を體驗し、直接に目擊して來た人々は、今日事情が如何に變化したかを眼のあたり見てゐる。形勢が今日のやうな姿のものとならうとは何人も期待しなかつたし、また期待することが出來なかつた。』（レニン、前揭『ソヴエト・ロシアの新經濟政策』）

と告白せざるを得ざるものが實人生である。『思はざることのおこる』實人生、歷史の開展が、A—非A—Bといふ辯證法的圖式主義を以て豫斷し得る如き簡單明瞭のものでないことは最早これ以上いふまでもあるまい。前記『新體制の理論』中に谷口吉彥氏がドイツの新體制では『まだまだ私益を是認し』てゐるのは不徹底で、『日本の新體制としては私益に代ふるに公益をもつて』すべしといひ、

『そこで第三の段階として考へられることは、今度は營利の上に立たない、非營利の上に立つた統制經濟、これが

革新さるべき統制經濟であらうと私の考へてゐる所である。』（二五〇頁）

と『第三の段階』として『非營利主義の上に立つ統制經濟』を提唱する、この三段開展の辯證法圖式に從つて『であらうと考へる』のは事實無視の概念論理の徹底に外ならぬ。營利主義に缺陷や弊害があるからといつて非營利主義を考へ出したところで、それには果して何等の缺陷も弊害もないかどうかを考へて見ようともせぬのは、全く反動思想に過ぎない。デモクラシイ民主主義に缺陷があるからといつて直ぐ獨裁政治を謳歌する如き幼稚低級の反動思想である。帝國憲法に明確に表現せられてゐる嚴かなる日本國體の政治原理は大政翼贊會の如きをも破邪顯正する現實的威力を有する萬邦無比の綜合的完成的のもので、『機關說』的民主主義を許さぬと同時にナチス指導者原理をも許さず、兩者の中に見出さるべき正しい人性的政治的要求を本來固有し含蓄する稀有最勝のものであることは

忠

まめやかにつかふる臣のあればこそわがまつりごとみだれざりけれ

民

ほど／＼にこゝろをつくす國民のちからぞやがてわが力なる

と詠ませ給ひし　明治天皇御製に仰ぐところである。

三、制度組織と思想精神との問題

共產主義實驗の失敗を體驗告白したレニンは、ロシア革命五年目の一九二二年の『內外の形勢』と題する演說中に

『吾々はまだ社會主義の根柢すらも有しない。社會主義の根柢が存在するかの如く想像する共產黨員は、最も大なる誤謬に陷つてゐるものである。ロシア革命の歷史的功績と、吾々が拙劣にやつてゐるところのもの、吾々が今猶ほ創造してゐないもの、そして今後幾度も遣り直さねばならぬものとの間の、明確にして冷靜なる區別――この區別こそ最も大切なことである。』

『吾々はいま新經濟政策に關聯して機關の改造や、新しい機關の創設に忙殺されてゐる。これは最も有害なおしやべりである。吾々の中心問題、主たる任務は人にある。卽ち人の選擇にある、といふ意見に到達した。この思想が私の報告の主旨である。常にこの思想と戰うて來た革命家にとつては、細密な仕事と敎育とに最大の重要のあることを認め、この思想を受け容れることは難事である。』（同上四七三頁）

といひ、また翌一九二三年『協同組合と新經濟政策』と題する論文中には

『吾々が今日必要とする一切のものは、要するに敎養上の革命を行ふことであつて、かくして初めて吾々の國土は完全に社會主義的となるであらう。』（同上五四六頁）

といふに至つた。これは思想法人生觀上に於ける人間精神蔑視・制度萬能論としてのマルクス主義唯

物論・唯物史觀の原理的改宗以外の何物でもない。レニンの所謂『新經濟政策』が、ネップ即ち資本主義的政策の復活を意味することはロシア革命史上の周知の事實であるが、右引用文中に彼が『人』『人の選擇』『教養』の重大性を確認し力說したのは、マルキストの呪詛する所謂資本主義私有財產制度の弊害なるものも、實質的には制度そのものにあるのではなくして『人』の問題であり、一層根本的には『教養』『精神』『思想』の問題であるといふことを確認せしむる。資本主義私有財產制度を現代社會の萬惡の禍源『癌』であると呪詛する前記谷口・石川・柴田氏の幼稚無學は、レニンの共產主義實驗報告によつて何人にも首肯せらるゝであらう。

尙ほレニンは一九二四年腦を病んで死んだが、その歿後最高經濟會議々長となつた――それまでロシア革命恐怖政治の鬼大將國家保安部長であつた――ジェルジンスキーの告白は、レニンのそれにも增して深刻悲痛のものである。曰く――

『吾々は企業なり產業なりを組織するに、一枚の紙切を取つて机に向ひ、必要の手段を採るやうに訓令を與へ、それで能事終れりと考へる。併しこれは大なる誤算である。斯くの如き官僚主義的事務處理方法は人的要素を度外視する。併しながら事業を運轉するものは人であつて機械ではなく、また成功を確保するものは個々の頭腦の働きである。動くものは制度ではなくしてその中にある人である。吾々は實にかゝる官僚制度のために息詰つてゐる。吾々の行政組織とその運用そのものが能率を痲痺せしめ、生產を制限するに足るやうに出來てゐるのである。……吾々はあらゆる犧牲を拂つてこの制度と戰はねばならぬ。……余はよく認めてゐる、余は最高經濟會議々長として現に起りつゝあるすべてに對して責任を有することを。而してこの責任の重荷は余の耐へ得る以上に大である。かくの如くにして吾々は續けて行くことは出來ぬ。吾々は生命と步調を合せて行くことが出來ぬ。吾々は生命と接觸を失ひつゝ、その後へに殘されつゝある。』

ジェルジンスキーはレニン歿後二年一九二六年同樣腦を病んで斃れたが、こゝに引用した彼の悲痛告白は當時ロンドン・タイムズに揭載され、故福村忠男氏によつて『原理日本』昭和二年四月號の『難思易行易思難行』と題する論文中に紹介されたのである。ロシア革命は人類史上文字通り空前絕後の慘虐犧牲を敢てしたのであつたが、かくして贏ち得た共產主義革命八年の成果がジェルジンスキーをして最高經濟會議々長の現職に於いて前記の如き大失敗の悲痛告白をなさしめたことは、精神科學的に何を意味するか？

かくして革命後すでに四半世紀を閱みしたる今日、一擧世界革命を妄想したソ聯の國民生活の實狀は、一國社會主義にすら失敗してその活地獄狀態を鎖國政策により辛じて人道の眼から陰蔽し得てゐる有樣で、その內外政策を動かすものは革命の元勳をすら殆ど餘さず『清算』し盡した事實に象徵せ

らるゝ暴虐權力意志と陰險極まる謀略に外ならぬ。マルクス主義が今や心情の要求としては全く滅び去り思想的魅力を全く失つてゐるのはソ聯に於いてゞあるといふことは、餘りにも悲慘なる滑稽である。ゲ・ぺ・ウの暴虐政治を以て尙ほ足れりとせず、最近ソ聯が新に『國家經濟檢察人民委員會』を增設した無間地獄的苛烈化の禍源に思ひを致すべきである。

いまこれを執權僅か八年にして內政改革軍備擴充より對外國威宣揚に電擊的威力を示現し、不斷增進的なる成果を收めて世界史的變革を現成しつゝあるナチス・ドイツの實狀に對比せよ。最近に於けるドイツの快速ブルガリア進駐に關するストックホルム三月二日發特電として東京朝日新聞所報『獨の勃國進駐・ソ聯も默認・軍需部門弱體を顧慮』と題する記事中に、『またブルガリアの樞軸參加に際しソ聯がとつた態度は、ソ聯の工業と運輸部門の無秩序を明るみに曝けだしたところで、先般モスクワに開催された黨代表會議以來、必ず何人も首肯し得るところである』と註して次の如くいつてゐる——

「マレンコフ黨中央委員會書記の報告によると、軍事的に最も重要な軍需品關係の人民委員部でさへも滿足すべき成果を擧げるほどに活動せず、他方大工業中心地たるゴルキー、ノヴォシビリスク、スターリングラード、ドニエプロペトロウスク、ツーラ、スタリノは質的にはもちろん、量的にも生產計畫を遂行してゐない、生產計畫や勞働時間表といふものは實際上存在せず、旅客の輸送は組織化されず、鐵道は常に延着してゐる狀態である。

そのうへ各工場の支配權ある指導者達は、一九三一年スターリンがその權力强化を斷行したにかゝはらず、常に怠慢をつゞけてをり、勞働者規律は、一九四〇年六月二十六日發布した嚴しい法令をもつて、故なくして職場を缺席する者は投獄する、と脅かしてゐるにかかはらず亂れてゐる、これらの事實は、ソ聯の國威と利益といふ觀點からみて、到底許し得ないやうな事件や、隣國の重大決定を目前に眺めながら、一九四一年の尨大な軍事豫算七百十億ルーブル（一九四〇年五百六十億ルーブル）を擁するにかゝはらず、ソ聯が消極的な外交政策をとらざるを得ない原因なのである。」

かくの如きは、ソ聯が徹底功利主義としての唯物論、經濟主義史觀としての唯物史觀に基き資本家地主に對する嫉視怨恨感情から、私有財產資本主義制度そのものを呪詛して之を撤廢せむとする共產主義の學術的誤謬を冒して之を眞に改めざる結果、國民道德の內的生命的頽廢を來し、所謂高度國防體制の確立に永久に救ふべからざる致命的缺陷を包藏するからである。わが帝國大學敎授としての前記また後記谷口・石川・柴田氏等の經濟新體制論の素質的共產主義思想が根本的學術維新を要するのはこの故である。（山本勝市氏著『計畫經濟の基本問題』參照）

四、我が國統制經濟實驗に就ての根本的反省

岸信介氏の經濟思想は先に批判したところであるが、氏は前記同一文獻中に事變以來の統制經濟の

『御承知のやうに日支事變が始まつて以來、吾々は一面に於ては日本の戰時經濟、また將來の國際情勢に應ずるための體制を整へる目的を以て、生產力擴充四箇年計畫といふものを立て、さうして國防國家の基礎を確立するといふ體制を執ると共に、これを計畫的に實施するために、重要物資の所謂物動計畫を立てゝ今日までやつて來て居るのであります。所がこの生產力擴充計畫並に物動計畫の實績を今日から見ますと、御承知の通り計畫と實績との間に相當な開きがあり、この開きは計畫そのものゝ樹立といふことに十分なる研究なく或は一つの缺陷があつたゝめに計畫自體が持つて居る缺陷といふものも非常に大きなものがあると思ひますが、更に實行の途上に於きまして實行の色々な具體的な方法に於て吾々のやり方が適當でないといふことに依るものも少くないと思ふのであります。……』(世界經濟情報社發行『新體制を語る座談會』五―六頁・圏點著者、以下同じ)

と、事變以來政府が計畫實施し來つた統制經濟の失敗を告白したが、このことは企畫院の名に於いても亦、左の如く公表せられたのであつた。

『……限られた一國の生產力を軍需充足、軍需生產力の擴充、生活必需品の最少限度確保の三つに區分し、これに基いて國民經濟の運營を生產配給消費の全面に亘つて統制して來たのである。しかしその結果は遺憾ながら、必ずしも成功とはいひ得ないのである。これは、官僚の統制技術の拙劣さによることも決して少くはないが、その根本は統制經濟そのものの缺陷に外ならないと考へる。』(週報昭和十五年十二月二十五日號所載、經濟新體制について)

この點に就いて京都帝國大學教授谷口吉彥氏は日本經濟政策學會第一會大會の講演會において自ら『其の第一陣を私が承つた』と口を切つてゐる『統制經濟の革新原理』と題する講演中に

『日本の統制經濟は甚だ非計畫的で、云はゞ行き當りばつたり、困つた所から手を付けて參りました……云はゞ、盲目的統制經濟で、盲目的にやるからこつちに闇が出て來る。盲と闇とで統制經濟をやるといふのですから……』(日本經濟政策學會年報第一輯『經濟政策の諸問題』八頁、圏點著者以下同じ)

といひ、かくの如き結果を來した根本原因を反省探求して

『私共の考では統制經濟は日本に於ては、最も理想的に行はれるであらうと云ふことを豫想して居つた。それは日本の國民性には非常に優秀な所があつて、國家の爲には凡てを犧牲に供すると云ふ立派な國民性があるから、從つて統制經濟も日本に於てこそ理想的な進展を見るものと思つて居つたが、扨戰時の日本の統制經濟が今日まで進んで來ました現情を顧みますと、我々の豫想した所とは甚だかけ離れた狀態にあることは、どなたも御承知の通りであります。……統制經濟の理想的な狀態から比較して見ますと、非常に遺憾な點が多い。是は一體どう云ふ譯で何處からさう云ふことになつて來て居るのかと云ふことを、今日我々は虛心坦懷に一つ考へて見なくてはならぬ。』(同上五―六頁)

『まあ極端に云へば猶太人的な性質が日本の國民にも相當あると云ふことを、迂潤ではあるが今日始めて分つたと云ふ譯であります。』(六頁)

「詰り日本の國民は總て神樣のやうな人間で、一切悪いことはしないと云ふ前提で、凡ての政策を立て、統制經濟の方法を考へたものですから共處に非常な齟齬を來して……」（同上七頁）

「是は今度の統制經濟によつて我々が認識を新にした點で　最も根本的な大切な點である……これは非常に根本的の問題で、結局是は國民の教育を振興せしめて、一つ國民を根本から叩き直すと云ふことが必要であると思ふのでありますが……是はさう簡單に五年や十年の仕事では出來るものではないと思ふ。又それは一應經濟學からは別な問題である。」（同上六一七頁）

といひ、こゝに『經濟學から別な問題』の根本的討究の必要を示唆しつゝ、統制經濟失敗の原因を政府官吏並に一般國民の間における『無計畫』『無組織』といふ缺陷に歸し　併しながら進んで

「第三に一般に日本の知識階級、國民を指導すべき知識階級も亦甚だ怠慢の譏を免れない。……更に其の知識階級を指導すべき我々學問の研究をやつて居る者も亦甚だ怠慢であつて……詰り今日の日本統制經濟が斯の如き狀態を示して居ると云ふのは、是はもう總ての國民各層の責任で、民間も官廳も知識階級も學者も總ての責任に歸すべきものであつて、一部の者の責任ではないと思ふ。」（同上九頁）

といふ態度に出でたのは道德的に率直眞摯であるが　こゝに經濟學界に象徵された日本精神科學界の全般的無力が告白され責任問題が提起された譯である

然るに谷口氏が先に氏の別著『新體制の理論』に就いて指摘した『營利の上に立たない、非營利の上に立つた統制經濟』を、前記『統制經濟の革新原理』の後段にも同樣に論じて、その積極的原理を『奉仕經濟』といふ言葉で表してゐるのは、依然として『日本の國民は皆神樣のやうな人間』と考へる『迂濶』思想の連續に外ならない。即ち氏は

「一體奉仕など云つたことは兎に角經濟の概念でないぢやないか、倫理的な概念ではないかと云ふことが一應考へられると思ふのですが、さう云つた奉仕の概念、奉仕觀念と言ふものは一體どこから來るかといふことが一つの問題になつて來る……」（前揭『經濟政策の根本問題』二一頁）

とやうに、根本問題に觸れながら

「インテレストと云ふ字は元來は興味といふ意味であります。所が今日はそれが利益と云ふ言葉になり、利子といふ言葉になつた。其處で私は是は面白いことだと思ひますが　インテレストの最初の意味に立ち歸つて、この興味といふことを以て推進力として曩の奉仕といふことをどういふ風に玆に導くかといふことが私の問題であります。私は興味と云ふことは一體是は心理學者に研究して貰はなければならぬが、……どうも自己以上の何か一つの高次的存在を認めて、それに自分が吸收されて行くといふ所に興味があるんぢやないか、……私も之に就ては相當に長く惱んで居る問題があつて、本當にまだ確信を持たないが、これは何れも今日において根本的に研究しなくてはならない問題だと思ひますので、今日はさういふ問題を提出する意味に於て御話したのであります。……」（同上二五頁）

といふに留つてゐる。こゝに氏は先に『一應經濟學からは別問題』といつた心理學、倫理學の問題に觸れた譯であるが、問題を提出しただけで、自ら提唱する統制經濟學の根本問題を未解決のまゝに精神科學の他の領域に轉嫁して了つた。これは學者としての『怠慢』といふよりも無力を告白したもので、正しく『身ニコ、ロミ庶人ニココロムル處』なくして『第三の段階は……と考へられる』といふ如き概念辯證法學風の必至歸結に外ならぬのである。

この點に於いて大阪商科大學學長河田嗣郎氏が同じ日本經濟政策學會大會の講演會における『經濟の自己規律性と政策可能の限度』と題する講演中に

「今行はれてゐる政府に依る統制政策と云ふものは必ずしも成功してはゐない。勿論全部失敗であるといひ得ませぬけれども、兎に角功罪相半すると云つたやうな風なものであることは、どうも是は否定すべからざるものである。……其の一つの事情がこの經濟の自己規律性、或は自律性、若くは經濟といふものに固有な法則性、獨逸語でアイゲンゲゼツリヒカイトいふものを尊重すべくして充分に尊重しなかつたと云ふ所にも、その理由があるのではないかと考へるのであります。」（同上『經濟政策の根本問題』四〇頁）

といひ、經濟學を自然科學とは異る文化科學的研究領域に屬するものとするリッケルト末派の論理主義的哲學論や、非常時局の促す政治軍事的の政策的要求に對して、經濟學の見地からは『依然として問題は殘つて居る』といひ

「其の依然たる問題は何かと云へば、經濟と云ふものは、右のやうな見方と共に亦之を自然現象的な見方で以て見て、其處に一種の法則と云ふものを見付ける、さういふ研究態度も許さるべきであり、其の研究態度の下に於て經濟法則と名付けられる所の幾らか自然法則的な性格を持つたものが其處に確かにあるのであるから、之を見付けることも經濟學の研究の問題であり、其の問題だけは依然として私は殘つて居ると思ふ。」（同上四九頁）

「假令今日の時勢が經濟現象を文化的現象として見ることに傾き、さうして之を研究する態度が歴史的な研究態度を採るのが、今日の風であると致しましても、それにしても矢張り其の文化現象には其の文化現象として價値の妥當する規範があり方式がある、其の規範や方式だけは少くとも之を尊重して行かなければならぬのであります。」

（同上五五—五六頁）

といふ思想動機や論旨には確かに正しいものがある。然しながら自然科學的方法と文化科學的方法との學術論理學的批判が缺けてゐるために、河田氏の認識論方法論と共に右に引用した統制經濟批判は全體として確信なき常識論に終つてゐる。

經濟の『自己規律性』または『自然法則』といはるゝものが、人間の生物學的本能に根ざしたものであることは著者も先にいつたところであるが、技術的生産配分の綜合的な經濟運營は價値意識的な人間の精神的活動として行はるゝものであるから、人類文化活動の一領域としての經濟に固有の法則

なるものは生理學生物學的の因果法則を含んでそれ以上の心理的歴史的の因果法則である。人口や自然資源の問題の如きも、政治的軍事的技術的に解決する外なく、現にそのために歐洲戰爭の如きは戰はれつゝあるので、これまた人間の精神的努力であり、綜合的にいつて心理學の問題であることを思ふべきである。物の技術的生産には人間の精神が主動的創意的に作用し、物價は需要供給によつて昇降するといふことは、何人も否定し得ざる經濟生活の事實である。筋肉勞働にしても元より精神が籠り働いてゐる。價値とはこの人間活動の成果に對する値（音打ち）で、需要供給の心理的評價作用によつて決定され變動するものであることはいふまでもない。マルクスの唯物論的の勞働價値說もリッケルトの觀念論的の當爲價値說と同樣に、直接經驗の事實としての心理的評價作用を價値觀念の解明に無視してゐる。要するに心理學がないといふことが方法論的に兩者に共通の致命的缺陷である。これは現日本の法律學にも政治學等にも共通の精神科學哲學の全般的缺陷の一つの場合である。

五、經濟學の根本問題と心理學

然らばいまこの問題の場合心理學と經濟學と倫理學と政治學との關係如何？　この點に於いて大槻憲二氏が近著『經濟心理と心理經濟』中に『本來心理經濟を除いては物質經濟は存在せぬ。』『從つて物質經濟の能力は、心理經濟の能力あるものにして甫めて可能なのであるから、經濟學の根柢は心理學、殊に精神分析學に存しなければならない』といひ、『慾望』の心理分析から個人の自我意識、集團意識、超自我意識を論じ、個人と社會、自由と統制の問題を主觀的努力感滿足感の問題として闡明しつゝ

「生産方法が機械的で、仕事に創造性がない以上、生産機關が所有せられても、人々は喜んで仕事に赴くかどうかは怪しいものである。資本主義經濟學と同樣、マルクシズム經濟學も亦人間を怠惰なる動物と假定してゐるところから出發してゐる以上、生産機關所有の問題の如きは一向に中心に觸れない改革案である。中心の問題は、我々がその仕事を全人格的に是認し、それを爲すことに創造の歡びと良心的な誇りとを感じ得るかどうかと云ふことでなければならない。少くとも心理學的にはその方が遙かに重大な問題である。」（五〇頁、圏點著者以下同じ）

「仕事は、本人の超自我の裁可を經ることに依つて能率が上るのであつて、必ずしもその仕事の難易多少に比例するのではない。所謂經濟學者、社會學者、殊に所謂マルキストといはれる人々は、人間の心理機制についてあまりに盲目であり過ぎはせぬか。」（同上五一頁）

といひ、「喜んで犧牲となり得ることの自由、犧牲となることに悔なき自由」を說きつゝ、然しながら

「實際に於いては犧牲は犧牲に相違ない面を必ず具へてゐるのであつて、その犧牲を犧牲と思はしめない程に沒入參與の意識を强からしむるためには、皇道大政翼賛の任に當る政治家達が、その政策を誤らないやうにしなければならないのである。どんなに秕政をとつても日本である限りは皇道が自然に行はれてゐると思ふのは、あまりにも

否氣な無責任な考へ方である。』（同上二二四頁）

といふ如きは確かに心理學的定論であるといはねばならぬ。かゝる『心理經濟』を殆ど全く無視したといつてよい『物質經濟』即ち物動計畫、生産擴充、物價停止、贅澤禁止といふ如き、果ては人間まで も『人的資源』と呼び、『精動』は『物動』の影法師化されて消滅した如き唯物的機制主義が强行されたことが『盲目的』と許せらるゝに至つた統制經濟失敗の主因である。

かくして大槻氏が『贅澤』の問題に就いて

『物がその價値を正しく發揮せしめられる以上、それは如何に豐富に消費せられても惡（贅澤）ではない。それは戰爭に依つて如何に多くの物資が消費せられても、その國民の生活がその結果として向上するならば、決して無意味（贅澤）ではないのと同じである。』（同上一九五頁）

『少くともドイツの統制技術は決して道德的ではなく、寧ろ科學的である。戰爭の結果今は多少の贅澤をさへ許されてあるやうである。或る種の贅澤は文明それ自身であり、文明に必要であり、また文明を促進するものである。』（同上二一七頁）

といふ如き言説にも所謂心理經濟なるものが何を意味するかゞ示唆されるであらう。また氏が『政治は道德的であつてよい、否道德的でなければならないが、政策は道德的であつてはならない。それは純粹に科學的（經濟學的）でなければならない。でないと行き過ぎになる。政策を科學的に行ふためには　政治の科學や心理學が確立してゐなければならない』といひ、『闇』の心理に就いても

『押付けられて行つた道德は道德ではなく屈從である。卑屈になりたくないと思ふから反抗するやうになる。反抗は逆効果に外ならない。それ故に、七七禁止令に對して多少とも日本民衆が逆効果を示したと云ふことは、日本人が道德的でないといふことではなくして、寧ろ逆に强い道德力を持つてゐると云ふことに外ならないと私は考へるのである。この力を正しく發揮せしめるためには、心理學の知識とそれに基く政治技術（政策）が必要である。』（同上一九四頁）

といふ解釋を下した如きに徵すれば、虚心坦懷に『迂濶』を自白した谷口吉彦氏が『猶太人的な性質が日本の國民にも相當ある』といひ『日本人の猶太人的性質を根絶せしめる』などいつたのは、『日本の國民は總て神様のやうな人間で、一切惡いことはしないといふ前提で、凡ての政策を立て、統制經濟を考へた』といつた如きと共に、所謂『道德一點張り』で極端から極端に――Aから非Aに――反動的な解釋を下す心理的無洞察の辯證法論理が、月次といふか幼稚といふか、要するに如何に淺薄皮相の非科學的獨斷に陥るものなるかゞ首肯せらるゝであらう。いまこの谷口氏自身を精神分析學の對象とすれば、善玉惡玉思想の童話心理である。

この點に於いて谷口氏が統制經濟の辯證法的三階次を區劃して、『營利を目的とした統制經濟』に

弊害があるからといつて『營利の上に立たない、非營利の上に立つた統制經濟』を說いたのも亦同樣の非科學的反動思想であることは、石川興二氏等の私有財產制否認の共產主義思想と共通である。かくの如きは全く非心理學的極まる形式主義的な道德的政策論で、個人主義や自由主義の思想的誤謬と個人の生命道德的な自由活動人格價値とを混同し、後者と不可分なる私有財產制度に伴ふ弊害を見てその制度そのものを呪詛する消極的物神崇拜心理から出たものといはねばならぬ　大槻氏はこれを『原始的』幼稚の思想と呼んで

『個人の强さはその個性の確立に依つて生ずるのである。個性の確立は、その人の自我と超自我とエス（集合的無意識の總體）との三つの心理內部の廳所がそれ〲の主張を全的に唱へ得ての苦鬪の結果、やうやく辿り着くことの出來た心理的統制の上に生ずるものである。それ故に、個人をしてその個人の心理的統制を許容しない程度にまでせゝこましく干涉的になつたならば、國家社會の統制は形式的統制となつて了つて、實質上は極めて軟弱なものとなるより外はないのである。』（同上二一九頁）

といつてゐる。個人の內的精神的自主自律活動を鼓舞激勵して、そこから生れ開くる自由の天地を認めず　外的社會機構による形式的平等主義を强制したならば　表面善美の觀を呈する社會制度を充す國民は奴隷的軟弱人と化し　『高度國防國家』の要請は根柢から裏切らるゝであらう。

明治天皇御製

　折にふれて

さま〲のうきふしをへて吳竹のよにすぐれたる人とこそなれ

　教　育

吳竹のなほき心をためずしてふしある人におほしたてなむ

『さま〲のうきふしをへて』の御製は明治三十八年日露役當時の御述懷である。個人も國家も內的外的に樣々の障害に逢ひ　そこに苦鬪すればこそ生命は彌々强靭豐富のものとなり向上發展せしめらるゝ。この人間心理は古來『無二敵國外患一者、國恒亡』といふ孟子の言葉にも表現せられてゐる。個人の營利心、自由競爭、私有財產制度に弊害があるからと云つて之を廢滅する社會機構を案出し强行せむとする如きは、『吳竹のなほき心』の强靱なる生命道德の心理に背反する洋意のサカシラである。

註　大政翼贊會經濟政策部副部長の肩書で出版廣告された田中精一氏の『經濟新體制とは何ぞや』は『一つの夢物語り』と自ら謳はつてゐる。曰く『私は私自身の夢物語りを持ちたい。それは「自由競爭」が完全に終止した狀態の夢である。或は、もつと正確に言ふなら、競爭が終止せざるを得ない狀態、つまり、一國の全產業が一企業によつて掌握されてしまつた狀態を夢みたいのである。』（四六頁）と。これは『空想的社會主義』以上の夢物語りといふべく沙汰の限りである。昭和の大御代、而も空前の國家非常時に大政翼贊會の幹部の一人にかゝる妄想家が出でたのは、精神科學の言語魔術・錬金術時代の一景物である。

六、日本國體・帝國憲法と私有財產制度

資本主義の廢絕を目的として行はれたロシア革命の戰時共產主義の失敗經驗から、レニンが『經濟上の領域では吾々は今漸く學び始めてゐる』といつたネップ卽ち新經濟政策なるものは彼等が本來死敵として鬪ひ續け來つた所の資本主義そのものゝ復活であつた。かくして一九二六年三月以降共產主義國家と呼ばるゝソ聯に於いて私有財產の無制限相續が原則的に容認せらるゝに至つた事實は、私有財產制度が人間性の本然に基くもので原則的に如何にしても廢絕し得ざるものなることを實證したに外ならぬ。これは私有財產制度が『之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス』と詔らせ給ひし日本國體の原理に含蓄せられて、あらゆる時代のあらゆる民族に不可缺の經濟的社會制度なることの承認を要請する。それは『盗むべからず』の宗敎道德法律的規範が古代宗敎の戒律にも既に揭げられてゐることに依つて明白である。日本に於いても、私有財產制度は『明治以後歐洲より輸入せし資本主義制度の根本原理』であるとか、『營利心なんといふものは德川時代まではなかつた』といふ如き幼童的無學に就いては先に一言したが、古事記の傳ふる天津罪のうちに見ゆる畔放(アナハナチ)、溝埋(ミゾウメ)の如きに耕地の區劃から所有權が發生しその侵害を罰するに至る法律觀念の萌芽がうかゞはるゝのである。ま

た　元明天皇の御代に『蓄錢ノ詔』『蓄錢ヲ奬勵スルノ勅』が重ねて下されてをり、光仁天皇の御代に下された『百姓ノ利ヲ貪ルヲ禁ズルノ勅』も『貪ル』ことが禁ぜられたので、『利潤』そのものが禁ぜられたのでない。卽ちその一節に

『頃年百姓競求ニ利潤一。或擧ニ少錢一得ニ多利一。或期ニ重契一强責ニ質財一。未レ經ニ幾月一。忽然一倍。窮民酬償彌致レ滅レ門。自今以後宜據ニ令條一。不レ得ニ以過ニ一倍元利一……』

とあることによつて明白で、不當の高利貸は今日と雖も脫法的に行はるゝに過ぎない。かくして人間の營利心やその社會的表現としての私有財產制度が本來人間自然の性情に根ざさず歷史の或る時代から發生したもの、從つて之を容易に絕滅し得るものなるかに說くのは、社會科學的無知も甚しき妄論である。

仁德天皇が民の竈の賑ひをみそなはしまして『朕が富めるなり』と詔はせたりと傳ふる畏き古事のこころは、明治天皇の先に引用しまつりたる『ほど〳〵にこゝろをつくす國民のちからぞやがてわが力なる』と詠ませ給ひし大御歌にさながら拜せらるゝところで、一君萬民、君臣一體の日本國體にあつては、個人の私益私營がさながらに國家の公益　天皇の大御業すなはち天業大御稜威にヲサメらるゝ。キコシメス、シラスと申しまつるにも這般の消息が窺はるゝのであつて、個人の私營私有を認

め給ふといふことは日本國體の本義と不可分である。次節に批判する如く、石川興二氏が國體と私有財産制度とは『本質的に矛盾し互に排除し合ふ』といふことこそ反國體的思想である。これは氏が普遍人間性と國體の本義とを心理學的文化史的に究深盡奥することなくして、事毎に矛盾對立觀を持出す近代西歐の民主主義、社會主義、共産主義思想からなしたサカシラノコトアゲである。

帝國憲法第二十七條に『日本臣民ハ所有權ヲ侵サルルコトナシ、公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニヨル』と規定され、私有財産制度は欽定憲法の保障する所である。然しながらそれはいふまでもなく國家の『公益』の下に從屬するものであるから無制限のものではない。それを憲法の明文も昭示してゐるのである。それ故日本にあつては『所有權は義務を負ふ』といふ如きワイマル憲法の條規や、『公益優先の精神』といふナチス全體主義經濟原理の如きを俟つまでもなく、欽定憲法そのものが本來最初からかゝる思想原理を含蓄し表明してゐることは、伊藤公『憲法義解』にも

『本條ハ所有權ノ安全ヲ保明ス。所有權ハ國家公權ノ下ニ存立スルモノナリ。故ニ所有權ハ國權ニ服屬シ、法律ノ制限ヲ受ケザルベカラズ。所有權ハ固ヨリ不可侵ノ權ニシテ、而シテ無限ノ權ニ非ザルナリ。』

といつてゐることに徴すべきである。

この點に於いて企畫院調査官奥村喜和男氏が『變革期日本の政治經濟』中に『憲法義解』の右の註脚を引用して『我國の所有權が、物に對する西歐的絶對支配權を内容とするものでなく』（二八一頁）といふのは正しいが

『一體私有財産制が人類にとり入れられたのは、さうして置けば一生懸命にやるからである。』（同上六六頁）

といつてゐるのは、生命の事實に密着せざる偏理的功利主義人生觀からの思ひつき解釋である。『憲法義解』が所有權は『無限ノ權ニ非ザルナリ』と要約斷言するに當り、その前に『固ヨリ不可侵ノ權ニシテ』といふ強き表現を以つてその本質を説いたのは何故であるかを閑却すべきではない。

元來日本臣民は一旦緩急ある時は大君ノマケノマニマニ身命を捧げて『義勇公ニ奉ス』るのであるから、生命にとつては第二次の私有財産が國家公益のためには當然全部を擧げて徴用せらるゝことも原理的にあり得べきで、それは『普天之下莫ㇾ非㆓王土㆒』天皇の大權に屬することといふまでもない。この原理は憲法第二十七條にも第二項に『公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル』と掲げられてゐるのみならず、同第三十一條には

『本章ニ掲ゲタル條規ハ戰時又ハ國家事變ノ場合ニ於テ　天皇大權ノ施行ヲ妨クルコトナシ』

と、憲法第二章の臣民權利義務の全體に對する國體原理に基く根本的制約が明示せられてゐる。かくの如き　天皇大權の發動は然しながら明文の如く『戰時又ハ國家事變ノ場合ニ於テ』とその適用か特

定されてゐることを確認すべきであつて、右憲法第二十七條の本文第一項には『日本臣民ハ所有權ヲ侵サルヽコトナシ』と所有權の原則が宣明せられてをり、第三十一條がその例外的規定なることはいふまでもない。それ故『皇祖皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニ』せさせ給ひし帝國憲法の條章の根本精神に於いては、臣民の所有權・私有財産制度そのものが原則として日本國體の本義に背反するといふ如き立論の成立すべき根據は憲法の明文條規を否定しまたは變更せざる限り斷じて成立しない。從つてかくの如き立論はそれが如何なる思想動機よりなさるゝにもせよ、個人的私見であり獨斷である。帝國憲法は畏くも『皇祖皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ』給ひしところであり、その改正變更に就いての發議は嚴に『勅命』に保留せさせ給ふ旨が明示せられてゐるのであるから、論者が國體原理に對する信順態度を示すとも帝國憲法の告文・勅語・上諭の大御言葉とその法條明文とを否認するならば、そのこと自體がすでに『承詔必謹』の臣道規律に背反するものなることを省るべきである。

こゝに『生命奉還』は日本臣民の反國體思想からの宗教的回心、カンナガラノミチへの信順意志の表示であり、『財産奉還』はその第二次的の道德的情操の表示と解する限りに於いては思想的意義がある。然しながらそれらが決して『大政奉還』と同一律に解すべからざるは、後者が『武家政治』といふ政治上の具體的反國體事實に關するものであつたからである。之に反して『生命奉還』といひ、『財産奉還』といふ語の意味するところは思想精神的のものたるべきである。萬一之を何等かの法制的形式に規定せむとするに至るであらうならば、その限りそれは思想精神の威力を無視し生命を機械化するマルクス主義的唯物思想以外の何物でもない。財閥の不正跋扈等所謂資本主義の缺陷弊害なるものは司法行政的處置をも含めての大臣『輔弼』の責任に於いて、今日要求せらるゝ『高度政治力』の發揮に依つて肅正し解決すべく爲し得べきものである。これは著者の先に指摘したる如く、ナチス全體主義がマルクス共産主義的『計畫』經濟を排撃しつゝその『指導』經濟に於いて効果的に實證しつゝあるところである。所謂資本主義の缺陷弊害の革正を營利心の否定、所有權の廢止によつて期せむとする如きは經濟の本質と共に政治の何たるかを解せざるものである。

七、私有財産制度否認論に就て

京都帝大經濟學部敎授たる石川興二氏は『新體制の指導原理』中に

『……現代政治の資本主義的墮落は、また現代立法の資本主義的墮落として現はれる。而してその最も露骨なるものは治安維持法である。卽ちそこには皇室に對する罪と私有財産制度に對する罪とが同一條文に於て規定せられ、「國體ヲ變革シ又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知リテ之レニ加入シタル者ハ云々」となつてゐる。然るに皇室と私有財産制度とは全くその原理を異にするものである。卽ち皇室は日本國民固

有の共同社會を一貫せる根本原理であるに反し、私有財產制度なるものは明治以後歐洲より輸入せし資本主義制度の根本原理である。而して共同社會的原理と資本主義的原理とは本質上矛盾し互に他を排除するところのものである。……我々はかくの如く相矛盾せる二原理を同一條令に於て確保せんとせし政黨政治の無反省なる態度に驚かざるを得ない……

この法律が今日我國の社會運動を徒らに非合法化し、社會の健全なる進步を妨げし罪は著しいのであつて、引いては累を皇室に及ぼす怖がある。かくて此法律は現代社會に於ける重大なる社會惡であると云はれ得るのである。」（一四三―一四四頁圏點著者）

これは私有財產制度否認論、別言すれば共產主義運動公認論であることといふまでもないが、我が國體の原理と私有財產制度の原理とが『本質上矛盾し互に他を排除する』といふに至つては、精神科學的に殆ど無知無學であるといはねばならぬ。

石川氏は先づ治安維持法中に『皇室に對する罪と私有財產制度に對する罪とが同一條文に於て規定され』てゐるといひ、特にこの點を力說して非難してゐるが、石川氏の引用した同條文は昭和三年に改正された以前、即ち大正十四年制定當時のまゝのものである。所で石川氏の該著のこの所論箇所は昭和七年の執筆にかゝると自ら斷つてゐるにも拘らず、河上肇氏の弟子として治安維持法には今日まで重大關心を拂ひ來りしものに相違ない經濟學專攻の帝大教授として、同法の改正事實に對する完全なる無知を證する如く『……又ハ……』と續けられた大正十四年制定當時のまゝの條文を引用してゐるのは、それが果して善意なりや否やを疑はしむる程である。いふまでもなく昭和三年改正の治安維持法には既に、國體變革の罪と私有財產制度否認の罪とは『又ハ』とは續けられず、同じ條文中にではあるが、獨立文章として別項に科刑にも差等を附して規定されてゐる。然しながら問題はこの形式論にあるのではなく、我が國體と私有財產制度とを『本質上矛盾し互に他を排除する二原理』といふ思想法そのものにあるのである。

註　治安維持法が最初國體變革の罪と私有財產制度否認の罪とを同一條文に一括して規定したのは、當時の共產主義運動そのものが、正統マルクス主義の根本理論から國體變革と私有財產制度否認とを不可分のものとして主張し實行せむとしつゝあつたからである。此度の第三次改正案が全く獨立の條文に規定してゐることは今いふまでもない。

石川氏は『現代政治（また立法）の資本主義的墮落』といふ言葉を用ひてゐるけれども、『その最も露骨なるものは治安維持法である』といつて、治安維持法が『私有財產制度ヲ否認スル』共產黨運動を國體變革運動と併せて禁壓することに對して、『現代における重大なる社會惡』といふ言葉をまで用ひて呪詛論をなしてゐるので、この語法思想法が『私有財產制度＝資本主義制度』を社會惡の根

源なりとする、マルクス共產主義の信奉態度を示すものなること餘りにも明白である。この同じマルクス共產主義思想がまた谷口、石川氏と同僚教授たる柴田敬氏の『日本經濟革新大綱』には

『資本主義こそは正に現に生產を傷づけ、經濟力の効果的利用を妨げ、社會的不安を內攻せしめ、支那民衆を不必要に抗日に驅り立て、其他の東亞諸民族を不必要に日本から離反せしめ、以つて聖戰目的達成を困難ならしめつゝある癌であり、その癌の病毒は之を如何に詭辯の膏藥で塗りつぶして見た所で、世界的危機の進行につけて日本を危機に陷入れるべく作用せずにはをかないのであるから、臆病心に災されたり膏藥療法に迷はされたりして、手遲れせぬうちに此の癌を剔出する事に反對する事は、結局日本を窮地に陷入れることになる……』（一二一頁）

といふ表現となつてゐる。この論理を換言すれば現支那事變は日本の資本主義的大陸侵略戰爭に外ならず、而もそれは國內に於いても國民經濟を破壞しつゝある禍源であるから、所謂東亞新秩序を確立するためには先づ日本の社會そのもの、『癌』たる『資本主義』を廢絶せねばならぬといひ、そこから支那事變の解決を說くのはマルクスの唯物史觀丸出しであつて、本人の意圖如何に拘らず、これは完全なる共產主義的敗戰思想である。

人は各個人それ〳〵身體を有する生命主體である。人は民族共同體國家社會の成員として過去祖先未來子孫の生命ともつながるものとして天地の恩、主上の恩、父母の恩、衆生の恩によつて生けるものなることといふまでもないけれども、一個の生命主體としてはそれ〳〵因緣と性格とにより各自獨立の生業を營み自己の生計は自己の能力責任に於いて立つべき天命を負へるものである。天地自然が特立の個體生命を生んだといふことはそこに沒却すべからざる使命價値が存することを否定すべくもない。西歐近代の人生觀としての個人主義や自由主義の誤謬はいふまでもないが、個體生命がその天命使命のまに〳〵民族共同體國家社會の成員として生き且つ貢獻するためには、各自が生命主體としてその自由意志に基く自由判斷によつて各自その所を得、創意を發揮して獨特の自由活動を爲すのである。そのために各人は獨立の身體を有すると同時に獨立の精神を有してゐるのである。この生理心理的生命主體としての個人は共同體家族生活者として、その自由活動の基體たる生命の維持存續のために必須の生業を營み職分を果しその家計の累積結果として自由處分をなし得べき私財を有すべきである。それなくしては人は創意主體性を發揮して自由活動をなし國家社會に貢獻することは出來ない。これ古往今來國家社會の歷史的事實として個人所有權、家族世襲財產制度が自然に成立し發達し來つた所以である。私有財產制度を一度撤廢したソ聯が再び之を原則的に容認せざるを得ざるに至つた所以の根本義をこの生命活動の現實に就いて確認すべきである。

道德的人格の自由は文化社會を成す人間生命の威嚴と不可分のものであるが、生命の事實としては

人格とは身體的生命主體であるから、個人はかゝるものとして文化生活を自主自律的に維持する要件としての私有財産なくしては、一般的永續的には人格の威嚴と自由活動とは存立基礎を失ひ、かくの如き個人のなす國家社會は全體として文化價値なきものである。『恒産無きものは恒心なし』といひ『衣食足りて禮節を知る』といふのは、この綜合的文化事實の普遍的庶民心理を表現したものである。

以上は個體人間の側からいつたのであるが、綜合的國家社會の側から見るも、個人の生活を一々國家社會が保障するといふことは實際に於いては容易のことではないのであつて、『國民生活の安定』といふことが、從來我が國の歴代內閣其他の政綱方針として掲げられたけれども、史的現實に於いては如何？ 健康保險や失業保險の制度の如きも、その主旨は諒とすべきであるが、その目的が各國に於いて眞に實質的効果的に達成せられ來つてゐるであらうか？ 共産主義を實行したソ聯の如きに於いては、一般民衆生活は之を外國人に公開し得ざる活地獄狀態にあるといふことは、革命後二十餘年の今日に至つてすらも鎖國政策がとられ外國人の目から隱閉されてゐる事實に徵すべきである。英國や米國の如きに於いて、失業救濟が相當に行はれ來つてゐるけれども、それはむしろ勞働者の勤勞精神を害ひ寄生蟲的存在を增大して、國家社會を脆弱化不健全化しつゝあるものなることは否定すべからざる事實である。而もかくの如き制度を設け得た國家は英米の如き廣大なる領土資源を横領壟斷せる最大の所謂『持てる國』資本主義國家であり私有財産制度の上に立てるものなることを、その歴史的地理的の特殊成立條件との關係に於いて確認すべきである。

かくして個人家族の側から見るも國家社會の側から見るも、人間生存第一次の保持は原則として生命主體たる各個人の自主活動とその能力責任に歸するといふことが、合目的なるが故に正當であるのは、それが全體として生命自然の要求と法則とに從ふからに外ならない。こゝに個體生命家族生活にその存立維持の要件として所有權、私有財産制度が認められ來つてゐることの人性的及び歴史的の動かすべからざる合理的根據が存する。先に紹介したナチスの指導經濟原理を參照すべきである。

元より弊害は如何なる制度にも必ず不可避のものであつて、所謂資本主義私有財産制度に隨伴する弊害は、いま一々これを列擧するまでもない。然しながらそれは資本そのものゝ不正不當にあるのではなくて、資本家所有者たる人の罪であり、根本的には政治家の指導精神能力の問題である。若しこの思想精神、人生觀世界觀の問題を抜きにして、罪を機構制度に歸し所謂資本主義私有財産制度を撤廢して、社會主義共産主義的制度を實行した場合、その具體的實質は何であるかといへば、一切の商工業を官有官營化する以外の何物でもない。然るに我國の實績に徵すれば官營事業は遞信と鐵道との外は殆どすべてが失敗である。最近の如き機構萬能の唯物的時代思潮下にあつては、鐵道運送の掛員

の間にも甚しき失態不正が行はれ社會問題化しつゝある有樣で、官僚主義の弊害に就いては喋々するも月次である。共産主義とか新體制とかいふ言葉を用ひればこそ、何か全く新しく實施して後にその利弊を斷ずべき新軌軸なるかの錯覺も生ずるが、實際に於いてはそれは全産業の官營化官僚主義的經營以外の何物でもないといふことを知つた瞬間に、その錯覺や幻像は一時に消滅するであらう。『財産奉還論』は政治道德と經濟とを混同する社會主義的の非科學的謬想で、國體上當然の『大政奉還』が明治維新後藩閥官僚政黨政治より最近の官僚行政となつた事實に鑑みるならば、政治上に於いても制度機構の改廢より直ちに　天皇親政の實を仰ぐことの如何に至難なるかゞ確認せらるゝであらう。
それ故假りに所謂『財産奉還』が制度機構の上に行はれたとしても、『經濟大權』といふ如きものゝ運營は實際に於いては官僚行政による外なきを思ふべく、現日本の官界弊風の下に官僚主義的經濟運營を實施したる場合の弊害に至つては眞に計り知るべからざるものがあることは、幾度か指摘した赤露のゲペウ苛烈暴虐政治に徴すべきである。尙ほこのことは我が國史上の過去の事實に徴しても、不祥の想像ではあるが、反國體の幕府的支配の出現が將來絶無なりとは斷ずべくもないので、かゝる場合忠臣の草莽崛起、國體明徴運動の民間興起が經濟的にも合法的に斷絶せらるゝに至る重大問題が潛んでゐることを警告したいのである。（尙ほ本書一五〇―一五六頁參照）

八、石川興二氏のマルクス主義讃美論

京都帝大教授石川興二氏は『經濟論叢』昭和十六年二月號所載『現代日本の危機と經濟學』に於いて、『人文學上の眞理は世界史實の比較研究の上に立脚しなければならぬ』といふ歷史的見地を表明して

『日本が今日未曾有の難局に立つに至つた所以のものは何であるか。それは明治の日本とは反對に大正昭和の日本は多年國體を忘れ、この國體を忘れたるまゝ今日世界史的變革期に突入し來つたが故である。現代日本の危機を突破せんとすれば何よりもこのことを明にすることを要する。』

と大聲疾呼する口吻を反覆示してゐる。然しながら石川氏のこの見地は

『今日ロシヤがその國力を著しく增進せしむるに至りし所以のものは、旣に第一次世界大戰に於て社會主義的革命を敢行しそれ以來今日に至るまでの世界史的變革期に當りこのロシヤの國體に最も適當せる立場に於て對處し得たが故である。同樣にドイツもその國體に卽する全體主義的立場に於てこれに對處し得たが故である。これに反しフランスは自らの國體の自覺に立たず英國に便乘しながら逆に沒落するに至つたのである。』（圈點著者）

といふものである。日本には　天皇統治の日本國體が適當してゐるが、ロシアの國體としてはマルクス共産主義が『最も適當してゐる、』恰もドイツにはナチス全體主義が、フランスには民主主義・自由平等思想がそれぐヽその『國體』に適當する如くに、といふのである。

著者はこゝに石川氏が前記の如き自己の思想法研究態度を表明するに當り、『青少年學徒に賜りたる勅語』に『古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長シ』と詔はせたる聖諭を引用しまつりつゝ『洵に至言である』といふ如き日本臣道に背戻する僣上不敬の言辭を示してゐることを注意したい。日本人には日本國體が適合するといふ石川氏自身がその出發點に於いてすでに臣道感覺廢缺の反國體思想家であることを看過するを得ないのである。著者は氏の思想內容そのものの批判に進むに先だち、右に引用した氏の日露獨佛の現代史實に關する國體論思想論が『古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ史實ニ鑒ミ』果して『其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長シ』たるものなりや否やの吟味から出發したいのである。

國民性とか國狀とかいふ言葉を用ひるならば、石川氏の前記所說も猶ほ部分には首肯せらるゝ節がある。然し『國體』といふのは國家の根本的永續的體制を意味する政治的概念であることは、石川氏自身も『國民全體が一致し且つ一貫し得る指導原理はその國の根本構造即ち國體である』といつてゐる如く、學術的並に常識的通念である。この意味に於いて帝政國家から革命によつて社會主義國家となつたロシアやドイツやフランスの如きには全體的永續的指導原理がないから『國體』がない。ステートト、シュタート、エターといふ英獨佛語が一時的『狀態』觀念から生れた國家概念なるは周知のことである。（西晉一郎氏著『眞正なる國家』參照）

それ故日本國體と全く同列に、ソ聯、フランス、ナチスの現代史的狀態を國體と名づけて論ずるのは、思想史的見地曖昧なる石川氏の場合、永續的『史實』と一時的『事勢』とを同一視する非科學的態度である。フランス今次の亡國的敗戰はフランス革命の『自由・平等・友愛』の個人主義民主主義思想そのものが本來哲學的世界觀的に致命的缺陷を包藏するものであつたからであることは、このフランスも（王朝時代は今措いて）ナポレオンの帝政時代には興國の實を示したけれども、第三共和國となるや漸次遞減的に國威を失墜して脆弱國となり、今次の歐洲戰爭に於いて遂に慘敗して亡國狀態に陷り．かくしてペタン政府がフランス革命の標語を潔く捨てゝ『勤勞・家族・祖國』を更生せむとするフランスの指導原理として掲ぐるに至つたことによつて明白である。この精神史的事實に徵する時、共和國としてのフランスは共和『國體』そのものに亡國的素因があつたので、この意味に於いてフランスは『國體明徵』では救はれず、救國のためには、現に思想的政治的に『國體變革』——『フランス革命の革命』が行はれつゝある。これはドイツに於けるナチスも『社會民主主義革命の革命』として成就せられたのである。（井上孚麿氏著『君主制の歸趨』參照）

ロシアの場合は如何？　石川氏は前記論文にいふ——

『若し日本の學者の云へるが如く、社會主義にして絶對的に誤りであつたならば、社會主義革命後のロシヤは、帝政時代とは一變してかくの如き發展をなし得なかつた筈である。これまでの資本主義經濟學者がかくの如きロシヤの國體に適應し從つてロシヤをしてかくも强大ならしめたるマルクス學を專ら誤謬なりとする論證を事とし、以て日本國民をしてロシヤを輕視せしめ、油斷せしめたることは、今や容易ならざる影響を日本の國運に齎らすことゝなつたのである。

これと共に日本の國體とロシヤの國體とを混同してツアーを倒せし社會主義ロシヤを以て日本の國體の敵であると考へしめたることは、軍事外交上に於けるロシヤへの敵對的態度となつて現れたのであつて、このこともまたロシヤに對する日本の今日の關係にとつて重大なる障害となつて居るのである。またかく日本がロシヤに敵對感情を示せしことは、ロシヤをして日本を極度に危險視せしめることゝなり、遂に支那をして日本と戰はしむることにも働いたのである。今日日本は支那事變により重荷を負ふて國際的非常時にあるのであるが、この支那事變の原因はこゝまで遡つて考へなければならないのである。』(圏點著者)

こゝに引用した石川氏の所說の全體を貫く思想法は、京大教授として同僚たる柴田敬氏の先に指摘した『日本經濟革新大綱』中の

『資本主義こそは正に現に生產を傷つけ、經濟力の效果利用を妨げ、社會的不安を內攻せしめ、支那民衆を不必要に抗日に驅り立て、其他の東亞諸民族を不必要に日本から離反せしめ、以つて聖戰目的達成を困難ならしめつゝある癌であり、その癌の病毒は之を如何に詭辯の膏藥で塗りつぶして見た所で世界的危機の進行につれて日本を愈々危地に陷入れるべく作用せずにはおかないのであるから、臆病心に災されたり膏藥療法に迷はされたりして、手遲れせぬうちに此の癌を剔出する事に反對する事は、結局日本を窮地に陷入れる事になる……』(一二一頁)

といふ一節を想起せしむるものがある。

石川氏は後に指摘する如く、マルクス主義の人生觀とそれに基く國家論とが日本國體と相容れざることは認むるけれども、その資本主義・私有財產撤廢の共產主義經濟論に對しては全的信奉態度を示してゐる。いまこの點の批判は後段に讓るが、右に引用した石川氏の日本對ソ聯コミンテルン關係に對する所論が如何に思想的誤謬と事實錯認とを犯してゐるかといふ點から吟味しよう。

註　ソ聯の軍備國力また松岡外相の歸朝報告演說等については一三二頁以下參照

石川氏は『社會主義ロシヤを以て日本の國體の敵と考へしめたことは……』『またかく日本がロシヤに敵對感情を示せしことは……』といつて、それが『支那事變の原因』であるかの如き斷定を下してゐる。柴田氏の前記引用文はこれが註脚と見らるゝものである。この論理は若し日本がソ聯コミンテルンに敵對意志を示さなかつたでもあらうならば、滿洲事變も支那事變も起らなかつたといふに等しい　石川氏のこの論理はスペインの內亂の如きをも、獨伊の反ソ反コミンテルン政策がその原因で

あつたといはむとするものであらう。これはマルクス主義の基本理論たる唯物史觀に基く『國家死滅說』『世界革命』の思想意志を全く無視した態度で、マルクス主義に對する根本的無學無研究でなければ、ソ聯の一時的カムフラージユ政策からの一國社會主義に對する故意の辯護、換言すれば人民戰線戰術に對する內應的意圖に出でたものと解する外はない。

日本のマルキストらは今日こそ彼等の人民戰線的言語魔術の動機から直接國體變革の意圖を表明しないが、數年前までの日本共產黨は明白にソ聯國家と表裏一體のコミンテルンの指令のまゝに『〇〇〇の撤廢』を標語として掲げたのであつた。また『帝國主義戰爭反對』『植民地の解放』『支那から手を引け』等の標語をも掲げて朝鮮臺灣滿洲の放棄までも煽動したので——これは日本共產黨首領らの告白したところである——ソ聯コミンテルンこそマルクス主義の世界革命意志から日本の國體の變革と共に大陸政策の破壞をもあらゆる方法（中國共產黨の組織の如きもその一つ）に依つて陰謀策動なさゞるなく、積極的に日本國家の根本的全體的破壞を目指して侵襲し來つたものである。三・一五事件、四・一六事件に於いて頂點に達した大正末年から滿洲事件勃發に至るまでの日本共產黨跳梁の日本總赤化運動が直接『國體變革』を企圖したことはいふまでもなく、また外には西安事件から續いて起つた現支那事變も亦、英米佛國際ユダヤ財閥とソ聯コミンテルンとの陰謀によつて企圖され、日本はそのために不擴大意志であつたにも拘らず引込まれたものであることは、今日に於いては國民的常識といふも愚かの次第である。

然るにこの明白なる國民的常識を缺いてをるか、それともコミンテルンの人民戰線的謀略戰術に意識的無意識的に內通して之を歪曲し瞞着せむとするものが石川氏の前記所說で、別項に論じた氏の治安維持法排擊論もこの思想意志の表現に外ならない。帝國大學教授としてかくの如き現實史實に對する錯認といふか歪曲といふか、要するに餘りにも甚しき重大謬說をなすといふことは只事ではない。著者は更に根本的に石川氏のマルクス主義そのものに對する態度を檢覈せねばならぬのである。

石川氏はいふ——

『彼（レーニン）はロシヤの事實を研究しこれが解放の爲めの理論を求め遂にマルクスの學說に於てはじめてこれを見出したのである。抑もマルクスは飽なき搾取階級としてのルイ王朝並にその貴族階級の壓制より國民を解放すべき平和手段が盡き遂に階級革命の手段に訴へてこれを遂げ得たるフランス革命の構造を深く究明して之を資本主義社會に適用したのである。かくて飽なき搾取階級としての支配者階級に對する被搾取階級の階級革命による大衆解放を以て根本的立場とするマルキシズムの立場は、正にロシヤの國情に適應するものであつた。かくしてロシヤは社會主義革命によりはじめてツアーの暴政より國民大衆を解放し得、新な社會主義制度の中に合理的に組織され

たのである。賢明なる社會主義の指導者は、經濟的革新に苦心し、五ケ年計畫を重ねることによつて今日偉大な生產力を創り出せしのみならず、ツアーの壓制下に於ける國民を愚にする敎育を革新することにより國民大衆を社會主義的に敎育した。』（圈點著者、以下同じ）

石川氏のこのマルクス主義とソ聯の國情とに對する價値判斷は、ロシア國民にとつてはマルクス主義は學術的『眞理』であると認容したもので、氏はかゝる認識論的見地を左の如く表明してゐる。

『マルクス靑年を學問的に鼓舞したところのものは即ちマルキシズムを普遍的なる眞理として論證せんとするところのマルクス學徒であつた。これに對して在來の資本主義的立場に立てる經濟學者はマルクシズムの誤謬なることを普遍的に論證せんとした。而もこの相反する態度の學者は根本的に於て同樣の誤謬を冐したのである。即ち人文科學の眞理を自然科學同樣の普遍性に於て問題とする點に於て兩者は同樣な學問的誤謬を冐すものである。この誤謬は日本の實踐生活に重要な影響を與へた。』

これでは石川氏は、人文科學卽ち精神科學上には時代と民族とを超ゆる學術的眞理は絕對に成立せずとなし、從つて『天地の公道人倫の常經なり』『之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス』と詔はせたる日本國體の普遍的文化價値を否認するもので、日本國體を民主主義共產主義と同列視併列視するものは如何に國體信奉の言辭を示すとも文化價値的に實質上日本國體を否定せるに等しい。孔子が『性相近也、習相遠也』といつた如く、習卽ち習俗歷史は時代と民族とにより相違するけれども、性卽ち人間性に立脚して普遍人間的さながら永遠人道的なるものが、道德宗敎の根本規範として確かに妥當するのである。仁愛といひ慈悲といひイツクシミといふ如き卽ちこれである。（井上毅著『梧陰存稿』中『五倫と生理との關係』參照）石川氏が、『新體制の指導原理』中に繰返し引用しまつつてゐる『天下億兆一人も其所を得さる時は皆　朕か罪なれは』の聖諭に仰ぐ日本國體の根本精神を、『最大多數の最大幸福』といひ『プロレタリアの獨裁』といふ如き民主主義共產主義と同列視併列視する態度を以つて說くのは反國體的で、これ石川氏の所論が全體として非科學的なることの思想素質の象徵である。更に氏の所論を引用して以下にこの點を細論しよう

『經濟學者がマルクス學に對して取るべき正しき立場は、この經濟學の根柢たる人生觀に十分なる硏究と吟味を與へ以てマルクス學はロシヤの國體に適應することを明にし從つて隣國ロシヤが社會主義革命によつて强大となるべきことを日本國民に警告しこれを徒らに侮辱することを戒めると共にそれが我國體に合致せざるものなることを明にすることであつた。然るにマルクス經濟學に對する經濟學者の無理解な態度は、これまで資本主義經濟學の無批判なる遵奉が日本國民をして國體を忘れしむる影響を與へたその方向に催進し、現代日本の國運に對し重大な難問題を結果することゝなつたのである。』

共產主義でなければ資本主義と、この對立概念以外また以上には一歩も出づるを得ないやうのことでは『人生觀』を云々する資格はない　これは『經濟學者が』といつて、經濟學の根本問題たる人間

性と綜合文化活動とに對する心理學・精神科學・哲學的研究を遂げない憐れむべき無學の然らしむるところである

石川氏の所謂『マルクス學』を『正しきが故に全能である』と盲信したレニンがロシア共産主義革命の失敗、殊に經濟的方面に於ける『殊の外……極めて……疑もなく氣持の惡い失敗』に就いての告白は、これまた既に文獻的に確實に指摘したところであるからこゝに反覆しないが、こゝに彼がネップ新經濟政策を已むなくされた當時における『資本主義』的經營方法に對する憧憬的言辭に注意を喚起したい。石川氏が日本の經濟學界に於ける『資本主義經濟學の無批判なる遵奉』の排撃を强調し、マルクス主義に對してはその國家論と經濟論とを不當にも機械的に分離して、前者即ち國家論に就いては人生觀的見地より反國體的なりとして排撃しつゝ、後者即ち共産主義的經濟論に就いては全く無批判に之を認容し、否、內心に信奉してゐることは、先に『新體制の指導原理』の一節を引用して指摘した如く、氏がその治安維持法排撃論中に、私有財産制度は反國體的なりといふ驚くべき妄論を敢てしてゐることゝ照應せしむべきである。

石川氏の『飽なき搾取階級としてのルイ王朝並にその貴族階級の壓制より國民を解放すべき平和の手段が盡き遂に階級革命の手段に訴へてこれを遂げ得たるフランス革命』といふフランス革命觀は、それに續く『かくて飽なき搾取階級としての支配階級に對する被搾取階級の階級革命による大衆解放を以て根本的立場とするマルクシズムの立場は、正にロシヤの國情に適應するものであつた』といふマルクス主義ロシア革命觀と共にフランス革命・ロシア革命に對する全面的讃美である。これは思想的に日本人殊に帝大敎授たる學者として個人自由主義・社會民主主義を學術的『眞理』なりと容認する態度である。それを石川氏は『經濟學者がマルクス學に對して取るべき正しき立場は……マルクス學はロシヤの國體に適應することを明に』することでなければならぬと確言した。石川氏は右二箇の引用文に於いては『國體』と『國情』といふ概念を全く同意語として使用するに至つてゐる。かゝる非科學的の粗雜思想から、氏は『經濟學者としては』と斷りながら、マルクス主義のロシア的妥當性に就いては政治的社會的軍事的方面から淺薄皮相の常識論を反覆するのみで、マルクス主義の根本的批判は勿論ロシアの社會史的事實との關聯に於いて專門の經濟學的方面からロシア革命の價値を檢討し闡明するといふことは、十六頁に亘る該論文中唯一箇所もない。資本主義の爛熟からのみ『鐵の如き』『自然史的』『盲目的必然性』を以て起るといふ共産主義革命を、西ヨウロッパの意味に於いては資本家も居らねば勞働者もをらず、從つて所謂ブルジョア革命も遡つて宗教改革も文藝復興も、更に封建時代すらも經驗しなかつた如き文字通りの中世的未開野蠻國に實行せむとしたロシア革命に經濟

史觀としてのマルクス唯物史觀から見て何の必然性があつたのであるか？

『飽なき搾取階級としての支配階級に對する被支配階級の階級革命による大衆解放』といふ言葉はロシア革命當初の大混亂また戰時共產主義のために史上全く類例なき數百萬人の無辜の大犧牲が拂はれ、革命の元勳すら殆ど殘らず無法律的な『血の肅正』によつて清算され、最近『國家經濟檢察人民委員會』の新設を已むなくされた如き實狀を人道の眼から陰蔽するためには、ソ聯は四半世紀に亙る鎖國政策を依然として飽くまで維持せねばならぬ、――斯の如きは石川氏の所謂『ツアーの暴政』とは全く比倫を絕する『この世ならぬ』卽ち陰府地獄の惡鬼羅刹的暴政であるが、これを以て『ロシアの國體に適應する』といふ如きは、科學的精神をも含めてその出自源泉たる人道的精神ヒユーマニズムを全く滅却するものである。石川氏はいふ、『ロシヤの有爲なる青年は幾度かの搾取階級の壓迫よりロシヤ國民大衆を解放せんと心身を碎いたのである』と。思へ、現ロシアにあつては貴族的支配階級としての共產黨とその上に立つスタリン王朝の暴政はツアーの暴政以上の、卽ち史上全く類例なき活地獄的のもので、惡魔的の組織的暴壓機關を以つてこの暴政からの民衆解放運動を鏖殺しつゝある――これ實に理知主義と技術文明とによつて强化され倍加された鬼畜的野蠻思想としてのマルクス主義唯物論が、歷史的に中世

的未開野蠻國たるロシアに適用された結果としての野蠻の自乘ともいふべき、惡魔の演出したる人生悲劇ではないか！（拙著『學術維新』第一篇『唯物史觀とレーニンの體驗したるロシア革命』參照）

再び三たび反覆したい、かくの如き人道廢缺のロシア革命の史實に對して、『マルクス學はロシヤの國體に適應する』『ロシヤは社會主義革命によりはじめて……國民大衆を解放し得……合理的に組織された……賢明なる社會主義の指導者は……』と、この惡魔的人生悲劇とその演出者とを讃美するのものが石川興二氏であるといふことを！『天下億兆一人も共處を得さる時は皆朕か罪なれは』と詔はせたる維新の勅語を反覆引用しまつり、『君民憂を共にし得なければならない』『憂を共にせんが爲めには、先づ愛を共にして居なければならないのみならず』『この爲めには君民知見を同じくしなければならない』といふ如く――尊嚴冐瀆の僭濫不敬言辭を連發しつゝ全同胞的共憂・共愛・同知見の『共同社會原理』を力說强調するものとして、石川氏は何故にその自ら立する共同社會原理を現ロシアの國情に適用しまた『マルクス學』に對して學術的批判を下さうとはせぬのであらうか？

われらはいま、『國民全體が一致し且つ一貫し得る指導原理はその國の根本構造卽ち國體に立脚せる原理である。故に國民全體がその國體を自覺しこれに立脚して行動せる時代は榮え然らざる時代は衰へることゝなるのである』といふ石川氏に對して

『現ロシアにあつてはその國民全體が自覺してマルクス共產主義に一致し且つ一貫して共憂・共愛・同知見を行じつゝあるのであるか？』

と嚴肅に問はざるを得ない。若しも『然り！』と卽答し得ざる限り石川氏は學徒として『マルクス學はロシアの國體に適應する』といつた自身の斷定を卽刻撤去しなければならない。革命當初における幾百萬無辜民衆の大虐殺はいま措いても、全世界民衆の記憶に新しき革命元勳の血の肅正、かくの如き無數の惡魔羅刹的行爲を職權として擔當し來りつゝあるゲ・ペ・ウまた最近新設された國家經濟檢察人民委員會の如きは、ソ聯の全體國民生活事實に於いて何を意味するか？　『ツアーの壓制下に於ける國民を愚にする敎育』を呪詛した石川氏は、二十世紀の現代に史上全く類例なきソ聯四半世紀の鎖國政策——ロシア國民の國外旅行は勿論、外國の新聞雜誌其他あらゆる印刷物の入國禁止、外國人の一般視察禁止と印刷言論敎育機關全部の官營化等々に對して、當然『マルクス學』的註釋を與ふべき絕對的義務がある。こゝに『萬國の勞働者團結せよ！』の國際主義原理から、この『マルクス學』の泰斗？によつて如何なる『合理的』註釋が與へらるゝかは、蓋し見物である。

註　『中央公論』昭和十六年四月號の戰時ソ聯の研究特輯論文中、麻生仲夫氏は『赤軍の刷新問題』の題下に、最近ソ聯が『二元的統帥の弊』を實證した赤軍政治委員（コミツサール）を廢止したる事實に因み、これは同時に『從來兎角精神的要素を輕視し、物質的要素を偏重する傾向のあつた赤軍が、精神的要素を尊重しはじめて來た』ことを示すといひ、從來共產主義の根本思想たる『自由平等主義』『民主主義』のために赤軍內に於いては上下の別が思想的に分明せず、從つて指揮官の權威が確立されず、『司令官や各級指揮官よりは兵士大衆の方が權力をもつてゐた』のに對して

『新軍律令は、かゝる狀態に根本的なメスを入れた。指揮官の一元的統帥（單獨責任制）、指揮官の權力の向上、上官の命令に對する絕對服從、軍律違反に對する峻嚴なる刑罰は、新軍律令の特徵である。』

『……武器使用に至るまでのあらゆる强制手段が指揮官に許されることゝなつた。しかもその結果に對して指揮官は何らの責任も負はなくていゝのである。』

『ともあれ、赤軍の刷新過程は、その內面的弱點、政治的精神的缺陷を暴露した。……こゝに赤軍の苦悶がある。さればこそ、嘗つて「ブルジョア的」と罵倒し來つた軍隊建設の諸原則を採用することも敢て辭さないのである。云々』

といつてゐる。所でこゝに『ブルジョア的』といふ評語で表されてゐる如き實內容は、今日に於いてはマルキストの所謂『ブルジョア的』諸國家の軍隊には行はれてゐない野蠻極まる暴力的のものである。ソ聯が今日かゝるものを要するのは、そこには精神的權威と思想的自發性とが缺けてゐるためである。最近わが陸軍省から發表された『戰陣訓』にしても全く精神的のもので、すべては原理的に『軍人勅諭』に示させ給うたところである。

尙ほ著者は最後に訪歐旅行から歸朝した松岡外相が四月二十六日日比谷公會堂に於ける歡迎會席上の報告演說中に

『私は日ソ國交を調整すべしといふ論は卅年來もつてゐるので、今日俄にそんなことをいひ出したのではない、しかし共產黨には絕對反對で、そのことをはつきり申して來た……これだけは間違ひのないやうに願ひたい、スターリン氏と會つて、貴下の共產黨に對しては私は絕對反對いたしますというて來たのである』（東京日日新聞、四月二十七日附參照）

といひ、尙ほこれはラヂオ放送中に强調されたのを聞いたのであるが、松岡氏はスターリンに對して『共產主義は必ず失敗するものである』と斷言したといふこと、それにも拘らずスターリンの方で『天皇陛下の萬歲のために』乾杯したしと申し出で

そこで乾杯また乾杯歡を盡したといふことである。これは明かに思想戰におけるソ聯の對日本屈服を物語るもので、學者殊に帝大敎授としての石川氏の無學無信をこれに對比すべきである。レニンは新經濟政策採用に當り、若しこれをなさゞれば『我々は數ケ月にして顚覆されたであらう』と共產黨大會に於いて告白したことは一言するに留めるが、今日ソ聯が兎も角も現勢力を得てゐるのは共產主義の實行を緩和してゐるためであるといふことは、前記註の指摘もその一實例に外ならない。

九、經濟の論理と倫理の論理

東京帝國大學經濟學部助敎授難波田春夫氏が近著『日本經濟の諸問題』中に

『たしかに經濟には普遍的なもの、卽ち、時と處を異にするも變ることなき、一般的、普遍的な原理がある。すべての人間が滅することのできない私をももち、如何ともすべからざる經濟的欲望を有するかぎり、人間に於ける利己的なものの支配から脫することができない。ところが、この利己的なものは衝動的な、したがつて自然的なものであるから、結局そこには、人爲を以てしては枉げることのできぬ自然法則が働いてゐるわけである。』（五八頁）

『本來論理（經濟、著者註）は自然必然的なものとして、絕對に自己を貫徹するところのものであつて、あらゆる時あらゆる場所を通じて普遍妥當性を有する。したがつてまたそれは、倫理の成立してゐるところに於てすら、他ならぬ倫理のなかに自己を實現してゐなければならない。けれども倫理は、決して單なる論理ではなくして、かゝる普遍的な論理の特殊的に限定せられたところのものである。』（一三二頁、圏點著者）

『かくて一般に、人間共同生活にあつては普遍的な論理は決してそのまゝにあらはれることなく、必ず倫理的に可能ならしめる如く限定されてゐなければならないのである。』（一三三頁）

とやうに、經濟は普遍的必然的な論理であり、倫理はこの論理を特殊的に限定するものであるといふのは、經濟は存在事實であり、倫理は當爲規範であるといふに等しい。難波田氏はかくの如く經濟に就いては論理といつてこれを倫理と對立せしめてゐる。然しながら氏も倫理とは『人間の間柄における在りかた』といふので、いふまでもなく倫理も亦人間の根本的な生活事實であり、そこに規範的法則が行はれてゐるのであるから、『倫理の論理』もあるべく、また實際あるので、それが古來道德史倫理學の研究對象である。氏自身も『人間生活は、一定の在り方に於ける論理としての倫理に於てある。』（同上一一三頁、圏點著者）といつてゐる。そこで問題は經濟の論理卽ち經濟學の闡明する經濟的價値と倫理の論理卽ち倫理學の闡明する倫理的價値とは如何なる關係に於いてあるかである。

昭和研究會の『協同主義の經濟倫理』中に

『倫理は經濟に對する附加物でなく却つて經濟の內部にあるべきである。言ひ換へれは、新しい經濟の倫理は單なる倫理でなく經濟の論理でなければならぬ。』（二頁）

『經濟現象も歷史的現象として……その客體的側面より捉へられたものが論理であり、その主體的側面より捉へられたものが倫理である。しかも論理と倫理とは別箇のものでなく兩者は統一をなしてゐる。』（三頁）

といふ。この『倫理は經濟に對する附加物でなく』といふのは、マルクス主義唯物論唯物史觀から從

來の倫理は經濟に對する外的附加物——或は僞善的修飾物——に過ぎざるものであつたといはむとするものであることは、右に續けて『新しい經濟の倫理』を說き、それは『……却つて經濟の內部にあるべきである』『經濟の論理でなければならぬ』といふことによつて明白である。これは一見倫理を具體化實質化せむとする態度らしく思はしむるけれども、その思想動機は倫理を『經濟の內部』に持ち込んで、『經濟の論理』に、換言すれば正邪善惡を利害得失に埋沒せしめ解消せむとする言語魔術に外ならぬ。これ經濟のみならず、政治も文化も含めた國民生活の全領域を支配する指導原理として『公益』といふ功利的觀念を掲げた所以である。また經濟現象は歷史的現象の『客體的側面』で、倫理はその『主體的側面』であるといふのも意味をなさぬ。いふまでもなく歷史的現象はすべて主體たる人間の意志活動を根本契機とする文化現象であるから、悉く主體的のものである。人間の經濟生活は既に動物的自然から內在的に一步超出したものであることは、人間の精神活動に依つて道具を發明し使用して自然を改容し、最小の勞力により最大の効果を擧げむとする、これこそ『經濟的』といふことの根源的な心理學的意義である。

かくして經濟の法則は自然法則といつても、マルクスのいつた如き自然科學的因果法則ではなく、生產にせよ消費にせよ、人間の精神がはたらいて行はるゝものであるから心理學的のもので、それは人間の精神的價値の實現評價の世界である、その尺度は利害得失である。これに對して道德的價値の尺度はいふまでもなく善惡である。そこで問題は利害得失と善惡との關係如何である。

『幸』サキハヒといふ日本語は『山幸』『海幸』のサチと不可分であることいふまでもなく、この道德宗教的價値と經濟的價値との不可分關係は英語の good-goods 獨逸語の gut-Güter といふ語彙にも同樣に示されてゐる。これは『得』と『德』との漢語の關係にも示されてをり、山鹿素行は『山鹿語類』中『論二義利一』の表題の下に『義利恐當作情欲』と附記して

『義者宜也、利亦宜也、故曰利者義之和也』

『凡利有二大小一、有二廣狹一、君子之利大而廣、小人之利小而狹、是君子小人、其知識所レ不レ同、格物致知之用在二此間一』

『聖人之學、在二節レ欲正レ利、而又無二潔白無欲之可一レ稱、是至德之溫潤也』

といつてゐる。即ち公共的見地から節欲正利すべきを命ずるのが道德的規範であるから、道德的價値は利欲即ち經濟的價値に優位して之を包納し統綜する。それ故道德は『非營利』であるのではなく、營利を含んでそれ以上の『超營利』である。而して道德はかゝる公共利害を憶念する內的動機心術に重きを置くので、外的行爲または結果が公共利害を侵犯するか否かを問題にするのは法律的價値觀念としての正邪曲直である。かくして法律的價値としての正邪曲直の觀念は、利害得失の經濟的價値と

善惡の道徳的價値との中間にある。經濟的價値を公共的に規制する民法商法殊に今日の統制法の如きはその顯著なる實例であつて、個人の權利といひ國利民福といひ國家の權益といふ言葉にも利害觀念と正邪觀念との密着不可分の關係がうかゞはるゝであらう。

それ故『公益』とは『非私益』ではなくて私益の有機的全體的効果を表す總名で、それは木々の葉末の滴水が落ち流れて小川となり江河となり果ては大海に注ぐ間に、飲料灌漑の用ともなれば舟筏交通また電氣發生の用ともなる、大海は國家經濟國際經濟の全國民全人類的慶福の世界に比喩して思想すべく、公益は私益の生成する全體に外ならぬのである。經國濟民の經濟政策がかくの如き見地より企畫指導せらるべきは、畏くも　明治天皇が『不磨ノ大典』帝國憲法發布の告文に

「……以テ臣民翼贊ノ道ヲ廣メ永遠ニ遵行セシメ益々國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ八洲民生ノ慶福ヲ增進スヘシ」

と　皇祖皇宗の神靈に誓はせ給ひて、同じ憲法發布の上諭には

『朕ハ我カ臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此ノ憲法及法律ノ範圍內ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシムヘキコトヲ宣言ス』

と詔らせ給ひ、また

民

ほど／＼にこゝろをつくす國民のちからぞやがてわが力なる

道

國民がこゝろ／＼に進みゆく道にはさはるものなくもがな

と述懐せさせ給うたところで、『皇祖皇宗ノ遺訓ヲ明徵ニシ』給ひし帝國憲法の條章に恪循する國家經濟の根本原理は、かくこそ仰ぎ知るべきである。

それ故如何なる理由を以つてするも、公益優先の精神といふ如きものを掲げて『臣民ノ權利及財産ノ安全』を否認せむとする如き言說をなすものは、國體の本義とそれに基く帝國憲法とその精神の表現たる條規（第二十七條）とを否定せむとするものである。殊にそれが公益優先の精神といふ如き唯物的功利主義思想を以つて、經濟のみならず政治及び文化をも含む國民生活の全領域にも亘る『國民組織』の指導原理たらしめむとするに至つては、文化價値として最低次の經濟的利害觀念を以つて政治及び一般文化活動をまでも支配せむとするもので、嚴かに肇國宏遠、樹德深厚、克忠克孝、億兆一心を說かせ給ひたる教育勅語に

『……爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ』

と聖諭あらせ給ひし日本國民道德の綜合的人生哲學原理に背反するものといはねばならぬ。

『此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス』と詔らせ給ひし　皇祖皇宗の遺訓、臣民祖先の遺風の下にあつては、『公益』の觀念は分析的德目の一つに外ならぬ。いま正に我が國未曾有の非常時局に際しては天壤無窮の皇運を扶翼しまつるべく『義勇奉公』の精神をこそ昂揚すべき時、『公益優先』といふ如き物質的功利主義的標語を原理として掲ぐる如きは、國體の尊嚴を冒瀆し、國民の義氣を損傷するはいふまでもなく、外國渡來の高度政治力・高度國防國家體制要望の根本精神とも相容れざる劣弱思想である。

讀者のうちには、著者が一方に於いては經濟固有の法則を說いて人情自然の利害觀念の否定すべからざるを力說し、同時に他方に於いて義勇奉公の忠義道德を說いて國民組織原理としての『公益優先』の觀念を排擊することを以つて、論理的矛盾に非ずやといふ如き疑惑を有つものがあるかも知れない。著者はいま最後に著者自身にも不斷に念頭にあつた、この疑問に答へたい。

第五章　政治道德と至高文化價值

一、諸文化價值の序列體系

正義また善といふ道德的價值は個人的利益の數量的總和ではなくして、創造的綜合の心理法則に於いて內在的ではあるが、超越昇華の契機を有するのである。而してこの超越昇華は利害得失より正邪善惡に進んで、それが生死の問題に觸るゝとき宗教藝術の至高文化價值の世界に入る。こゝに人生の威嚴があり現實的不可思議がある。これ倫理を經濟の論理に埋沒し解消し得ざる所以である。それ故倫理は、本來經濟の外部から之に『附加』せらるゝものではないから、またその『內部』に改めて持込まるべきものでもない。眞實の倫理はその文化價值の本質からして、經濟的價值に優位する高次者として之を統綜し人間行爲の內的動機となつて經濟活動の上にもはたらくものたるのである。これ自由主義經濟學の始祖と呼ばるゝアダム・スミスすらも、『國富論』中に『私益の追求』が許さるべきを說いた際、『正義の法を侵害せざる限り』といひ『國防は富裕よりも重要である』といつて英國の航海條令を『總ての商業法規の中恐らく最も賢明なるもの』と讃へ、また『道德情操論』中には

『正義は全堂宇を支持する支柱である。若しこれを撤去せんか、人類社會とふ宏大無邊の建築物は忽ち微塵に崩壞せざるを得ぬ。』（『國民精神文化』第七卷第三號所載、中山幸氏『最近に於ける經濟倫理の問題』中の引用による）

といつてゐる如く、倫理の原則は東西古今一貫相通ずるものであり、舊來の『商業道德』とか最近の『新しい經濟倫理』とかいふ如きものも、その正しき心理的意義は新舊を越えて不變不動なる根本原則の部分的時代的適用以外には成立すべくもないのである。

而して善惡の道德的基準は日本にあつては君臣の大義としての『忠』の觀念であつて、國體の信に基き大君のマケノマニマニ『天皇陛下萬歲！』と唱へて生き且つ死する時、それは宗派宗教を超出するカンナガラノミチの國民宗教である。生くる限り、人は愛慾名利の私情私心を脫却し得ないが、——痛ましきかな、汝が人たること！——生けるものは無常であり人は死すべきものである。こゝに生るゝ永生の希求より肉身は滅ぶるとも魂魄永遠に生きむとする、宗教的信樂の世界がある。愛慾名利の煩惱を斷じ得るならば、また人生に死といふことがないならば、人間に宗教はいらぬ、恰も人間に疾病がないならば醫師醫藥が不必要である如くに。『まことにしんぬ。かなしきかな、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずにいることをよろこばず、眞實の證にちかづくことをたのしまず、はづべし、いたむべし。』と悲歎告白しつゝ、親鸞が

『しかるに常沒の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成じがたきにはあらず、眞實の信樂まことにうることかたし。なにをもてのゆゑに、いまし如來の加威力によるがゆゑに、ひろく大悲廣惠のちからによるがゆゑに、たまたま淨信をえば、この心顚倒せず、この心虛僞ならず。こゝをもて極惡深重の衆生、大慶喜心をえてもろもろの聖尊の重愛をうるなり。』

『それ眞實信樂を按ずるに、信樂に一念あり、一念といふは、これ信樂開發の時尅の極促をあらはし、廣大難思の慶心をあらはす。』（以上『教行信證三』より）

といつたのは、『極惡深重の衆生』も『信樂開發の時尅の極促』、稀有最勝の瞬間に『廣大難思の慶心』『大慶喜心』を感得する入信の宗教心理學を說いたものであるが、これは日本臣民が應召出征決死突擊のまた戰死臨終の瞬間に於ける『天皇陛下萬歲！』の叫びに共感同證するところで、絕ちがたき恩愛のきづなさながら大君の醜の御楯と出陣した萬葉のわれらの祖先は

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出でたつ吾は
大君の勅かしこみ磯に觸り海原わたる父母をおきて
大君の勅かしこみ出で來れば吾ぬとりつきて言ひし子なはも

と詠じたのである。この個人愛慾の煩惱が法悅の心境に昇華する心理に就いては、親鸞がまた

罪障功德の體となる　こほりとみづのごとくにて
こほりおほきにみづおほし　さはりおほきに德おほし
名號不思議の海水は　逆謗の屍骸もとゞまらず
衆惡の萬川歸しぬれば　功德のうしほに一味なり

（曇鸞和尚和讃）

寶林寶樹微妙音　自然清和の伎樂にて
哀婉雅亮すぐれたり　清淨樂を歸命せよ
清風寶樹をふくときは　いつゝの音聲いだしつゝ
宮商和して自然なり　清淨勳を禮すべし。

（讃阿彌陀佛偈和讃）

と讃嘆したことを指摘したい。この心境は不忠不孝のわれら國民も『明治天皇御集』を拜誦しまつる時、愚惡人生さながらに解脫の思ひ大慶喜心をいたゞかしめらるゝところである。こゝに宗教的信仰は藝術的表現と表裏して神情開朗の至高精神文化價値を現成するのである。かくして自然人生のあるがまゝの姿を如實に探求して眞僞を分つ科學的精神または學術的價値も亦、宗教藝術の至高文化價値と契合するに至らずしては未だしといはなければならぬ。

天地自然の全條件、宇宙人生意志の發現動向に人間の全生命活動が冥合し乘托することが、不可測不可思議の神意に隨順し天地の化育に贊する所以である。これは正しく惟神の大道カンナガラノミチに外ならぬ。この天地自然、宇宙人生をその因緣條件に分析して究明せむとする自然科學、精神科學はこの不可測不可思議の神意を部分的に問はむとするものと見るべきで、この意味に於いて一切の科學的研究は神意明徵、從つて國體明徵に向つての知的努力である。西洋の思想傳統に於いても基督教から起つた勝義の『自然法』の觀念はこの見地に屬するものであるが、それが近代自然科學の興隆以後所謂實證主義的史學また世俗的文化及び戰爭に對立する觀念となつた時、西洋に於いては宗教對科學の抗爭關係を見るに至つたのである。然るにわが祭政一致のカンナガラノミチはその藝術的表現としてのシキシマノミチと相俟つて、自然と歷史との一切を擧げて、それ故に東西文化の全內容全價値を包納攝取し批判選擇し統綜令活する至高人生原理であり、『高度政治力』といふよりも『大御稜威に仰ぎまつる至高政治力』の史的現實的理念として國防國家體制の絕對的基準たるのである。

明治天皇御製

天

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

地

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける

今上御製

迎年祈世

西ひがしむつびかはして榮ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

漁村曙

あけがたの寒きはまべを年おいしあまも運べりあみのえものを

老人隱居論を唱へた大政翼贊會前事務總長有馬賴寧氏の政治觀念が如何に憐れむべきものであつたかは、畏かれどもあけがたの寒きはまべにあみのえものを運ぶ『年おいしあま』にも職域奉公の姿をみそなはしまし〻大御歌を拜誦しまつつた全國民の均しく批判默契したところであらう。いま一億一心尙ほ足らざるを覺ゆる時、三國條約が締結された未曾有の世界的大動亂に對處すべき時、現日本總力戰體制を指導する高度政治力よつて實現せらるべき經濟政策の根本觀念は如何なるものたるべきか？

二、高度政治力・高度文化力・高度經濟力

政治や道德は勿論經濟に優位しなければならない。優位するとは、高次のものが低次のものを包攝

し統綜しその處を得せしめてその本來の面目を發揮せしむるの謂ひであつて、辯證法論理に『止揚』し『揚棄』するといふ如く、否定したり廢止したりすることではない。これは政治そのもの〻內部に於いても理想の政治は公正なる民意の暢達を促すことを思ふべきである。勿論、國民經濟に對する一定の政治的行政的司法的指導また統制は、『經國濟民』即ち國家經綸の實內容として如何なる民族、如何なる時代にも當然行はるべきである。況んや全世界が戰國時代化し、經濟がブロック的に閉鎖され、殊に現在の日本の場合の如く史上空前の非常危局を打開する國家總力戰・高度國防體制の完璧を期すべき絕對的要求が之を促すに於いてをやである。

然しながらさうであればある程、この場合外的機構迷信の形式的統制・机上計畫經濟や生命の自然に背く硬直せる戒律主義的道德を以ってしては、その綜合的永續的の大目的を達成し得べくもない。これこゝにナチスの『指導者原理』が持ち出さるる所以であるが、――終局的民主政を脫しない政治上の獨裁政に就いての日本國體原理からの批判は別に示したところである。（拙著『ナチス思想批判』參照）――指導者とはいふまでもなく精神の指導者であり、技術の場合にしても思想教育の不斷の新創造者改革者でなければならない。レニンが『人』『教育』の根本的重大性を痛感し確認せしめられたのは、制度機構萬能論としての唯物主義に基くロシア革命の失敗の經驗から死に頻してのことであつたが、

ヒットラー總統のナチス運動は前歐洲大戰における對英思想戰の失敗の殷鑑から『世界觀の革命』『人間の再教育』を意味する『革命の革命』――レニンの最後に到達したところの思想教育改革から出發したものであることに就いては、『魂の中心的な體驗』としての『內的變化』を說くローゼンベルクの『二十世紀の神話』の一節に『眞の再生は決して權力政策だけのことではない。況んや、自負的な沒分曉漢の考へるやうな「經濟的立直し」の問題ではない』といつたことを、またヒットラー總統『マイン・カムプ』の次の一節を指摘したい。

『今試に國家を形成し維持する力は何であるかと問ふならば余は直ちに次の如く答ふることが出來る。卽ち各個人が民族協同體のためにその有する能力と用意とを喜んで犧牲にすることとこれである。この精神は經濟とは何の關係もない。何故なら人間は斷じて實業のために自己を犧牲に供することはない。換言すれば人は實業のためには死せず、唯理想のためにこそ身命を抛つのである。』（原著一六七、一六八頁）

『一九一四年、獨逸國民が自分達は理想の爲めに戰つてゐると信じてゐた間は、獨逸はまだまだ不動の地磐の上に立つてゐたといへる。然るに彼等が日々のパンのために戰つてゐるに過ぎないといふことが解つた瞬間に、彼等は進んで降伏したのである。』（同一六八頁）

これであつた、國家を維持し形成する力は『經濟的立直しの問題ではない。』『經濟とは何の關係もない。』『人は斷じて實業のためには死せず』と、その指導者らが異口同音に宣言するところの、祖國永久生命のために喜んで己を捧ぐる自己自身の精神的感激を告白しつゝ、之を古代北方ゲルマン民族の神話的精神の復興と結合し、ドイツ民族の祖國愛の潜める衷情に愬へて全國民平等の感激を喚起したナチスの國民精神總動員運動であつた、かのベルサイユ條約の國民總奴隷の鐵鎖を斷絕し以つて執權八年にして今日の歐洲に於ける無敵ドイツを現成したところの根本力源は！

これに比すれば、わが新體制運動が政治的意味に於けるナチス『指導者原理』を模倣する反國體思想を以つてして、『公益優先』といふ如き功利的觀念を指導原理として掲げ、『體制』『機構』によつて『高度政治力』を作り出さむとする如き動向を示したといふことは、大政翼贊の日本臣道の見地より見て二重三重の誤謬を犯したものであつた。これ朝野國民輿論の批判を蒙り遂に今次の如き根本的改組を招いた所以であつた。

個人內心の精神的活動も重層的であつて、對人的對境的に人の精神的活動はその面を異にしその層を異にして現はれる。幼兒に對する場合と大人に對する場合と、男に對する場合と女に對する場合と親しき者に相對する場合と初見の人に應接する場合と、また上位下位の場合と同等對立の場合とに從つて、人の心的態度は複雜微妙に變轉相違する。

その如くまた人は一足の靴下を買ふといふ場合には、出來るだけ廉價で丈夫なまた人によつては色

や柄までも選擇する。それがその場合の人情の自然である。然し孤兒院の出張販賣の如きに對しては品物の良否價値の高低を超越して買ふのであるが、それでも餘りにひど過ぎる粗惡品である場合には猶不快や義憤を感ずる。これも一般の人情である。更にまた正當なる法律的權利や名譽を維持し擁護するためには、金錢上の利害を超越して爭ふこともあれば、一層根本的には法律をも犯して道德的または政治的理想の實現に挺身し、宗教的信念や學術的研究のためには肉身の破滅をも賭して悔いざるに至るのである。眞の藝術の意義はこの明暗交錯重疊奔轉して端倪を許さぬ人生微妙の消息を表現し鑑賞する點に存する。藝術的價値の獨自性はその表現形態にあるが、根源的にはかくの如き綜合的人生價値そのものである事はいふまでもない。これが文化創造の心理であり、價値意識である。高度政治力とは、かくの如き物質的並に精神的文化を唯一の世界觀原理に依つて內面的有機的に統綜し、現在及び未來に向つて不斷に新なる創造的開展を遂げしむる如く、民族生命を鼓舞し激勵し躍動せしめ國家社會生活に生成的秩序を與ふるものでなければならぬ。換言すれば高度政治力とは、高度精神力創造的世界觀の形成力そのものであるから、威力ある國民精神國民文化の今活總動員運動を外にしては無生命無內容の舊式强權支配となる。『物動』の影法師的存在たりし舊『精動』の失敗はいふまでもないが、『精動』を冷笑し思想戰を言語魔術化して『組織だけの組織』によつて高度政治力を實現し得べしと妄想した新體制運動が僅々半歲にして全面的解體に終つたのは、その致命的缺陷が本稿の批判對象となつた共產主義的經濟新體制論の橫行に象徵暴露せられた如き、機構組織迷信の經濟主義的唯物論、即ち本質的舊體制思想に存したからである。

かくの如きマルクス共產主義的變革思想意志を今日最も露骨に表明したものは、前記『國民組織の政治力』の著者杉原正己氏と同志關係を公言せる後藤基春氏の『經濟主義の克服』といふ著書で、後藤氏は同書中に

『社會はその存續上、すなはち自然への適應に當つて不斷にその技術的體系に變化をもたらす。そしてこの技術的體系の變化が一定點に達するとき、人間同志の結ぶ生產關係＝經濟もまた變化しなければならない。』（一一五頁）

とやうに正眞正銘の唯物史觀の公式を自己流に敍述しつゝ

『……政治が經濟に對して新しい地位を要求し始めたといふことは、單に「官僚勢力の擡頭」でもなければ、「官僚政治の勃興」でもなく、社會の生產力＝技術體系の發展の必然的結果であり、それは經濟自體の法則的自己否定の所產なのである。經濟は政治によつて否定されたのではなく、經濟の必然的發展が自己を否定し、政治を導入したのである。』（一一六頁）

といふ典型的言語魔術を弄して、『新しい生產關係―新しい經濟は、獨占金融資本的統制に對して、

その止揚變革を要求してゐるが、同時にその一方の擔ひ手たる國家權力に對しても、その止揚的變革を要求してゐる』（同上一二二頁）とまでいふに至つてゐる。これは先に批判した石川興二氏の『マルクス學』信奉禮讃論を想起せしむる。『新體制』運動の妖氣に釣り出されて跳梁したマルクス共産主義の亡靈の群は、大政翼賛會の改組と共に改正治安維持法の嚴肅なる適用による司法行政的處置と相俟ち學術論理の威力によつて今度こそは徹底的に掃蕩せねばならぬのである。

『經濟自體の法則的自己否定』による『政治の導入』といふ如きヘーゲル・マルクス・西田哲學的概念辯證法のナンセンスは別に根本的批判を加へた所である。經濟自體は政治や法律や倫理やまた宗教や藝術によつても、決して否定も解消もなし得べからざる、人性自然の生理心理的の機能であり歴史社會的領域である。高度政治力・高度國防國家體制整備の要求する經濟新體制、計畫經濟なるものは、決して經濟そのものゝ政治化または倫理化たるべきではなく、經濟にはあくまで經濟本來の性能を最高度に發揮せしむる、換言すれば高度經濟力を發揮せしむることを目的としなければならない。高度經濟力とは高度資本主義といふ如きものに非ざるはいふまでもなく、三國條約下現日本の必然的要請たる『東亞共榮圏』の廣域ブロック經濟の相互依存共榮關係に於いて、日本民族日本國家の全體的綜合的の經濟的要求を最大限最高度に實現するものであらねばならぬ。

三、科學技術新體制と國防哲學

大阪帝國大學教授菊池正士氏が『文藝春秋』昭和十六年六月號の『純正科學と時局』に於いて

「私だつて決して從來個人的の名譽の爲に研究して來た譯でもないし、又自然探求に對する興味のみからやつて來たのではない。殊に外國へ行つてから以後は日本の名譽の爲に、日本の科學の水準を高め様と云ふ氣持が私の研究生活の指導原理となつてゐたことは疑ひのない所である。然し何の爲に日本の科學水準を高めるのかと問かれれば恐らく私は、日本の國防の爲であるとは言はなかつたであらう。……併し今我々に要求されてゐるものは、こんなまぬるいものではないのである。我々は正に國防の爲に働かねばならないのである。民族の安危が我々の双肩にかゝつてゐるのである。此の意味で私はたとへ純正科學の同じ題目について、同じ研究をするにしても、その氣持から云へば百八十度の轉回は必要であると思ふのである。單に眞理探求を目的に研究するのでもないし、又漠然と日本文化の體面の爲にするのでもない。日本の國防の一端の責任を負ふてゐるのであると云ふことをはつきりと自覺することが、純正科學に從事するものにとつても何よりも大切なことになると思ふのである。……私は日本の學界の現狀が此の點に於て尙ほ充分であるとは思はない。學術新體制の基本的意義は此の點にあると思ふのである。」

といつたのは、自然科學者の素朴眞摯なる道德的痛感に同情共鳴を覺えしめらるゝのであるが、このことはフィヒテが『ドイツ國民に告ぐ』の中に

『最も抽象的なる諸々の科學に關する吾人のすべての努力すら、究竟何を欲するのであるか。是等の努力の直接の目的は、科學を次々の世に傳へ、これを世界の中に維持することであるかも知れぬ。然し一體何のためにかく科學を維持せねばならぬのであるか。疑ひもなくたゞ適當なる時期に於て一般の生活と人性に適する全き秩序とを形作らんがためであらう。これが究極目的である。即ちすべての科學的努力は間接的には、たとひ後世になつてからであるとしても、要するに國家に奉仕するのである。若し科學がこの目的を捨つるならば、科學の品位と獨立とは失はれて終ふのである。而してこの目的を有するものは必ずや支配しつゝある國民の言語を以て書かれなければならぬのである。』（岩波文庫大津康氏譯二七二頁）

といつたことを想起せしめらるゝので、明治以來眞の哲學者が學界思想界を正しく指導し來つたならば、今更自然科學者をして愛國心、國防觀念を力説せしむる如きことはなく、日本の科學技術に大なる進歩發展が現成せられてをつた筈である。

この點に於て企畫院次長宮本武之輔氏が『文藝春秋』昭和十六年五月號に『日本科學存立の論證』と題して『今や現實に眼を蔽つて安價な自己陶醉に甘んずべき時代では斷じてない。科學・技術水準の低いことは率直にこれを認めて、しかしてこの水準を昇上すべきを眞劍に考究すると同時に、このために全民族的の努力を傾倒すべき時代である。』といふのは當局者としての責任の痛感をも覺えしむる切實の態度を示すもので、氏が自然科學の見地から

「若し科學概念の內包を限定して、純正科學だけをその對象とするならば、日本科學なるものは、絕對に存在し得ない。例へば航空機の基礎理論のひとつを構成する氣體力學の法則は、わが國において成立すると同時に、獨逸や米國においても齊しく成立するのである。」

といふのは勿論正しい見地で

「たゞしこれに反して科學概念の內包を包括して、ひとり純正科學ばかりでなく、應用科學までを包含してその目標とするならば、その後者については日本科學なるものが、立派に存立し得る。」

『然るに科學者或ひは理學者の一部に、法則や發見だけが貴重なる學術であつて、成形や發明は寧ろ學術の圈外にあり、純正科學が進歩しさへすれば、これが應用を目的とする技術などは、職工にでも任せて置けば自然發生的に發達を遂げるかの如き說をなすものがあるのは、確かに謬見の甚だしきものだ。』

といふのも、自然科學に於いてはこの通りである。宮本氏はこゝに純正科學の發達が實驗と不可分の應用發見發明の過程に於いて行はれ來つてゐることを實例を擧げて叙述し、而してそこに應用科學の領域には各國民の國民的性格が必然的に形成實現せらるゝことを說いて

「しかるにこれに對しても、わが學界の一部に應用科學の分野においてすら、特殊性格の日本科學を否定しようと

する論者のあることを、私は心から遺憾とする。それらの論者のいふところによれば、科學に國家的性格や民族的性格を認めるが如きは、學術の神聖と自由とを無視するの甚だしきものであり、學術の墮落と自殺とを意味するにほかならないと。かりそめにもかやうな誤れる觀念に支配されてゐたればこそ、そして日本的性格の技術を育成するために、意識的の努力を傾注することを怠つたればこそ、わが國の技術に滔々として植民地的性格を植付けてしまつたのだ。』

といつてゐることに對しては、今日最早如何に頑迷固陋なる世界主義の迷信家ら（例へば石原純氏・桑木嚴翼氏の如き）も抗しようとはせぬであらう。然しながらこの宮本氏の慨歎に徵しても、我が國從來の科學技術の『植民地的性格』の禍源は全體としての精神科學哲學上の盲目的な歐米崇拜學風に存したのであるからして、氏が該論文を

『科學振興の目標の中には、自然科學・人文科學・精神科學、その他すべての科學が取入れられなければならないのはいふまでもない。それが自然科學と人文科學とを互助連環の關係において、生成發展せしめる所以だからである。たゞし今日のわが國において最大の國家的要請に立つたのは自然科學であり、また歐米諸國に比して最も劣勢にあるのも自然科學である。この意味において、自然科學の振興に、國策の重點のひとつが置かれるのは當然である。私が自然科學を本論稿の主題とした理由は、畢竟そこにあるのである。』

と結んでゐるのは綜合的見地から不徹底である。即ち『自然科學と人文科學とを互助連環の關係において』生成發展せしむべきを說く以上、自然科學の振興を殊別して現日本に於ける『最大の國家的要請』といふのは根源的綜合的でない。哲學的世界觀的考察といはるべき高度政治的觀點が充分に開けてゐない。企畫院が經濟新體制や科學技術新體制の局分的方面の企畫から出發して綜合的政治文化政策の方針確立を逸してゐるところにも、現日本の思想的全體的缺陷が反映されてゐるので、改組された大政翼贊會の活動も鈍重であり官界新體制が財界の月次要望を受けて停頓してゐる如き事態の根本禍源は、帝大法文經濟學部の精神科學哲學部門の非日本反國體學風を清算せざる思想的無力無生命に存するのである。

著者はこゝにフィヒテが前記『ドイツ國民に告ぐ』の同じ箇所で

『理性ある著述家はそも〳〵何を欲するか、何を欲し得るか。彼は一般公共生活に働きかけ、これを自己の形象に形どり且つ作り替へること慾するであらう。……かゝる著作家は根源的にまた精神生活の根柢からして、同じく根源的に働く人、即ち支配する人に代つて思惟せんと欲するのである。』（前揭書二七二頁）

といつた精神を、『君言臣承』『承詔必謹』の日本臣道に體現して輔弼の責任を完うし得る如き綜合的人材と思想とを啓培長養すべく根源的學術維新をなさゞる限り、今回發表された如き科學技術新體制要綱は假りにその所期目的を達し得たとしても、總力戰國防體制としては局部肥大の畸形的缺陷を

生ずるに至らんことを恐るゝのである。

現代廣義國防の見地より武力戰に並列して外交戰、經濟戰、及び思想戰を論ずるのは分析的見地からの理論である。歐洲大戰以來特に戒心注意せらるゝに至つた所謂思想戰とは、的確にいへば寧ろ宣傳戰の技術のことに外ならぬ。その一擧一動坐作進退が内心情意の發動表現であり、自殺犧牲の精神力を有する人間にあつては、生命生活は本來心理的精神的のものであるから、一切の外的物的條件は支配驅使せられ、畢竟解脱せらるべき精神の方便であり手段である。それ故精神力は一切の戰鬪戰術に君臨する原動力であつて、人生に於ける一切の戰は精神の戰である。それが戰爭の『本質』であり、武力戰や外交戰や經濟戰は廣義思想戰としての精神の戰の『現象形態』に外ならぬ。かくして本來精神の戰にあらざる如何なる武力戰もあるなく、近代兵器と産業との基礎たる自然科學の理論技術もそれらの操作運用も、畢竟國民精神力の問題であることはナチス獨逸興國の眼前の事實に徵すべきである。（前記ルーデンドルフの總力戰論參照）

元來國民が國家を護るのは言ふ迄もなく五十年百年と一定年限之を護るのではない、永久に護らむとするのである。蔣介石の支那すら猶ほ長期抵抗を續けつゝある。我等日本國民が日本を護るのは、天壤無窮の皇運を扶翼し奉り我國の威烈を『世界の光華』たらしめむとの大御言に副ひまつらむとするのである。故に『國防』とは日本國民にとつては『國體の防護』である。思へ、國體を防護せざる國防とは何を意味するかを！『國體』の滅びたところには『日本』はなく、日本國民は護るべき國もなければ、守るべき力もない、卽ち國防の主體も原動力もないのである。國防が『國民精神の威力によつて國民精神を無窮に護るわざ』であるといふのはこの故であつて、この『國民精神を國民精神の威力によつて無窮に傳ふるわざ』としての教育こそ國防の力源であり根本義であるといふ事理を孫子の兵學に徵し　明治天皇の悲痛の大御心に仰いで骨髓に銘刻すべく、政治も經濟も藝術も宗教もこの一義に歸趨冥合することによつて、始めて所謂高度國防國家體制の完璧は期せらるべく、人類理想としての正義人道が具現せらるゝのである。（河村幹雄氏大正十二年著『國防の將來』參照）

四、藝術的創造精神と總力戰體制

著者はこゝに綜合藝術・綜合文化の鑑賞批判力の體現者ブルノー・タウトが『日本美の再發見』中に、京都の桂離宮と日光の東照宮との建築美を對照して

「こゝには（桂離宮）自由な精神の創り出した自由た藝術があり、かしこには（東照宮）たゞ惟れ命に從へる個々の要素の累積がある。……日光は消化せられざる輸入品であつた、これに反して桂はその當時存在してゐた一切の影響を消化攝取したのである。』（岩波新書本前揭書二六頁）

といつたことを指摘したい。『統制』といふ言葉はナチス獨逸にあつては、原理的標語としては經濟政策上に於いても用ひられず、『指導』の語が擇ばれてゐる。消極的語感を伴ふ統制といふ如き語彙概念を顯著に示す思想法を以つてしては、『たゞ惟れ命に從へる個々の要素の累積』といはるゝものを作り出すに過ぎず、決して國家國民の總力を根源的創造的に發揮せしむることは出來ない。『自由な精神の創り出した自由な藝術』と桂離宮を嘆稱したタウトの、右に續く讃辭を引用しよう。

『桂離宮にあつては、いかなる要素もそれぞれ自由な個性をもたないものは一つだにない。それは宛も、何人も强制を蒙ることなく各人がその本性のまゝに行藏してしかも調和を保つやうな良き社會の成員の如くである。まことに桂離宮は、文化を有する全世界に冠絶せる唯一の奇蹟である。パルテノンに於けるよりも、ゴチックの大伽藍に於けるよりも、こゝではるかに著しく「永遠の美」が開顯せられてゐる、——それは我々に同一の精神をもつて創造せよと訓へる。』（同上二五頁）

桂離宮の『永遠の美』が『同一の精神をもつて創造せよ』と我々に訓ふるものは、決して建築や藝術の世界に留まるものではない。藝術は人生そのものゝ表現に外ならぬからである。『何人も强制を蒙ることなく、各人がその本性のまゝに行藏して、しかも調和を保つやうな社會』云々といふ言葉に『萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得セシメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシムル』と詔はせ給ふ大御心の天照す現實の世界に思ひを馳すべく、萬邦の精華・日本國體さながらの藝術的表現——世界史上『唯一の奇蹟』『永遠の美』を異邦人も亦桂離宮の建築美に仰いだのである。基督教徒が『みくにを來らしめ給へ』と祈る天上の國の宗教的理念を、我等はいま異邦人と共にわがスメラミコトの大御心のままなるスメラミクニに仰ぎまつるのである。こゝに我等はアマツヒツギノミワザ天業としての『大政』の御理想をこそ、高度政治力といふよりも至高政治力の世界觀原理と仰ぎまつるのである。かくして眞の高度政治力なるものは、綜合藝術を創作鑑賞し得る如き高度精神力、綜合文化政策を具現し得る如き哲學的世界觀を有する人によつてのみ發揮せらるゝ。こゝには經濟は經濟の、また文化は文化の『本性』即ち本質價値が最高度に發揮せしめらるべく、かくして始めて國家國民の眞の總力發揮が可能ならしめらるゝのである。

小堀遠州はたゞひたすらに皇室に仕へまつる建築を建築の理想原理のまゝに直感し構想して制作したまでゝあつた。それがパルテノンやゴチックの大伽藍にも勝る『永遠の美』を創造して、異邦人をも嘆稱やむ能はざらしめ、『それは我々に同一の精神を以つて創造せよと訓ふる』とまで言はしむるに至つた如き、國寶さながら人類の至寶を殘すことゝなつたのである。これ實に『自由なる精神の創り出した自由な藝術』で、明治天皇が『おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國民』と

詠ませ給うた日本國體の精華、萬世一系の　天皇の大御稜威の一つのしるしである。日本の詩歌、文學美術の一つ一つ——全體綜合藝術をして、また學術、宗教等一切を含めての——全體綜合文化をしてそれぞれ悉くその『本性』に從つて至高價値を創造するところあらしめよ！

『經レ邦論レ道』『燮ニ理陰陽一』以つて『儀ニ形四海一』すべき大臣の『輔弼』の責任とはかくの如き政治力を發揮することであらねばならぬ。こゝに『不レ戰屈ニ人之兵一』といふ至高の兵學原理を思ふべく、高度政治力、高度國防國家體制といふ如き西歐的思想範疇は、天壌無窮の皇運を扶翼しまつる『七生報國』『永久國防』の日本國體原理によつて眞に生命化せられねばならぬ。

政治國防を經濟化する、換言すれば經濟的利害によつて政治國防を規定するといふ如きことのあるべからざることは、今日萬人の均しく確認するところである。國防の完璧はいまや國家國民の絶對的要求である。所謂高度政治力はかくの如き國家的要求を具現すべき力である。然しながら政治が經濟に優位するといふことは經濟そのものを政治化することではなく、却つて經濟の『本性』機能を最高度に發揮せしむる、換言すれば高度經濟力を發揮せしむる如き、眞に生命ある經濟政策が企畫實施せらるゝことであらねばならぬ。而してその際同時に國民精神が最高度に昂揚せしめられて、國民の道德的情操は宗教的感激に高められ、究深蘊奧の學術的探求と至高の藝術的創作鑑賞との內的要求が各人の胸奧より油然として湧き起る如き、民族精神の全體的雰圍氣が醸し出されなければならぬ。

人の痛さを知るのは己を抓つて知るのである。『己の欲せざる所、之を人に施す勿れ』といふ。利他忠恕の念も集團的公共心も、自利自愛の念と同情心とから發して歴史的社會的交通の間に啓發向上綜合昇華せしめられたもので、良心といひ良知良能と呼ばるゝものもかくして個人の內心に開發せられて不斷に生成するものに外ならぬのである。それ故若しも利害打算の心性機能が個人の內心から消滅したならば、その時個人は公共的利害をも計量判斷するを得ざるに至るであらう。蓋し私心といひ公共心といふ、それ〴〵別箇の心性機能は何處にも存在しないからである。私人間の消息挨拶に『自愛』『自重』の言葉が交はされる心理は何であるか？　また『憤せずば啓せず』といふ、憤るのは私であつて、私情私心が動かねば人間に向上も發展もない、私利私慾の念を斷滅すれば利他公益の志も生命自然の彈機を失ふに至るからである。

人の親は幼兒に對しては努めてその意を迎へて自然の生命力を伸させようとする。義に喩る君子は如何なる時代も少く、大人も全般的には利に喩るところの、女子と共に『養ひ難し』と歎かるゝ小人——大きな子供である。『義ハ君臣ニシテ情ハ父子ヲ兼ネ』と詔はせたまふ日本國體にあつては、天皇は大御親に在しまして民を『赤子』と愛でいつくしませ給ふ。『憲法義解』大赦權の註に曰く、